324

547

始

8.9.5

324
547

布教講習會講演録

第貳輯

324-547

第壹回

布教講習會講演錄（第壹編）第二輯

（目次）

◎今後の實踐倫理問題……東京帝國大學文科大學教授文學博士 中島力造 講師……（一—二五）

◎近代文明と宗教問題……東京帝國大學文科大學教授文學博士 姉崎正治 講師……（二六—三五）

◎宗教意義の發達……日蓮宗大學講師 高島平三郎 講師……（三六—三五）

◎婦人問題と宗教……東洋女學校副校長文學士 和田鼎 講師……（三六—三六）

大正
6.1.6
内交

今後の實踐倫理問題

東京帝國大學文科大學教授文學博士 中島力造講述

今後の實踐倫理問題

帝大文科大學教授文學博士　中島力造講述

第一回

第一項　倫理學の大要

諸君、御招きに依りまして、少しばかり倫理學のことに就て御話しを致すやうにといふことでありました。何分時間が少くないのでありまして、諸君に御滿足を與へる樣な話は出來ぬであらうと考へますけれども、少しばかり御話をして今後の御研究の端緒にでもなりますれば、私に取つて誠に幸なことゝ考へます。何ら云ふ御話をしたら宜しいか色々考へて見ましたが、どうも適當な題が見付かりませむので、假に倫理問題に就て御話しするやうに申し上げて置きました。乍併之に就て御話しするには、どうしても亦現今の狀態に如何にしてなつて來たかといふ事を少し申上げませぬと、御話する事が甚だ不滿足であらうかと考へますので、如何にして倫理の研究が今日のやうになつて來たかと云ふ事の極く大體の說明を致すつもりであります。

倫理の問題は人の精神が或る程度まで發達すると必ず起つて來る問題であつて、何れの國に於ても倫理の研究は昔しよりあるのである。東西兩洋何れに於ても、其點は同樣である。乍併西洋に於ては、東洋とは少しく趣を異にして、倫理の研究其物が、段々と一つの學問となつて來たのであるが、東洋殊に支那などのことを考へて見ると、倫理に就ては研究はして居るのであるけれども、其研究が或點に於ては哲學と混じて居たり、或點に於ては政治學と混じた居たり、又或點に於ては心理學のやうなものと一緒になつて居つて、倫理學と云ふ一つの獨立したものは出來なかつた。儒教などでも倫理の事は研究して居るのであるけれども、倫理學と云ふものは出來てゐない。予は佛教のことは餘り詳しく研究して居りませぬが、佛教に於ても高尚なる哲學の思想又は政治に關する思想もあるであらうが其等が倫理と混じて居て、未だ倫理學と云ふ獨立したものは出來て居らぬ樣に考へる。然るに西洋ではそれが或時代より分れて、倫理學は倫理學、哲學は哲學、政治學は政治學、心理學は心理學と分離したのである。其の分離したのは或點より云ふと非常に不利益になつたのである。精神科學と云ふ學問は互に離るゝことの出來ない關係を有つて居るのであつて、分けて研究することは、種々誤りを生ずる事になり、又到底分離して完全に研究の出來ぬ樣にもなる。乍併又他方より考へて見ると、分離した方が東洋の如き狀態であるよりも、餘程專門的になつて進歩した點もある。總じて分業的となり專門的となることは、其事を特別に詳しく研究する爲に便宜を與へるので、深く研究が出來ることになる。

然らば西洋ではそれは何時頃より始まつて居るかと云ふと、希臘時代即ち希臘のソクラテスの時より之が段々と分れ始めた。ソクラテスは支那の孔子に較べると、凡そ百年ばかりの後の人であるので東洋の思想よりは少し後れて居ると云ふて宜いのである。ソクラテスは西洋の紀元前四百六十九年に生れて同三百九十九年に死なれた。孔夫子は五百五十年ばかり前に生れた人であるし、釋尊は學者に依つて違ふけれども、通例では五百六十年か七十年頃と云ふのである。故に印度の思想と較べても、西洋の方が百年ばかり後れて居る。哲學の研究はソクラテス以前にもあつて、恰も婆羅門の哲學のやうなことを希臘でも考へて居つた。所がソクラテスの時になつて、種々の原因が集まつて哲學問題を研究して、宇宙の問題を解決しやうとしても、却て夫は大問題で、到底容易に滿足なる結果を得られぬ。乍併人間として現り實行しなければならぬとは、さう深く考へずとも、此の世の中のことで極りがつくのである。故に哲學の大問題は後ちにして、現り人の爲すべき事、即ち人は如何なる目的で此世の中に生存すべきであるか、如何なることを爲すべきであるか、夫は斯樣に實際問題に力を盡したならば宜いと云ふ考にソクラテスがなつて來た。夫故に高尚なる哲學の問題よりも、手近の倫理道德の事を研究し始めたのである。是が西洋に於ける哲學と倫理學の分離した始めとなる。

斯くして漸次其研究が進んで來た。勿論哲學と全然離れる事は出來ぬが、哲學の大問題の解決を待たずに、倫理の方は倫理として解決しやうといふ一種の新研究法が、ソクラテスに依つて始められた

といふても宜いのである。

西洋に於ても其時代に依つて倫理學の研究する事項も、又研究の方法も異つて居るが、其事は後に説明するとして、今日はどう云ふ風になつて居るかと云ふことを述べやう。其前に何故倫理の研究が起つたかといふことを簡單に述ぶる必要があると思ふ。

希臘に於て倫理の研究が起つた原因は何であるかと云ふに、社會が段々發達して來たので、是迄人が實行して居つた道德・作法では滿足が出來なくなつた。經濟上政治上其他各方面にも發達するし、又人の思考力即ち物事に就て考へる力も大いに發達して來たので、唯昔より人として斯くせよと敎へ込まれ、或は社會が斯くせねばならぬとの言ひ傳へて來た事では、實際上滿足が出來なくなつて來たが爲に、茲に倫理の研究が始まつて來たのである。それは日本に於ても又何れの國に於ても同樣であるが、特に西洋の近世即ち今より三四百年前よりは倫理の研究が非常に盛んになつて來た。何故盛んになつたかといふに、近世の社會とそれ以前の社會とは多くの點に於て非常に變つて來た。以前に人間が人間として爲なければならぬと思つて居つたことゝは、大に違つたことを爲なければならぬ樣になつて來た。又或事を昔は是非人間は爲なければならぬと思つて居つたのが、今日では夫れ程實行する必要がなくなつて來た。斯樣に社會が變化して來ると、茲に實際上倫理の問題が起つて、其研究が盛んになつて來るのである。現今西洋に於て倫理の研究が頗る盛んになつて來た原因は、第十九世紀に於て自然科學即ち物質上の學問が非常に進步して、機械工業等が發達し、電信電話の發明、蒸汽力、瓦斯力、又は電力等を利用するやうになつて、交通其他一般人類の生活上に、多大の實益と便利とを與ふるやうになつて來た。此の社會の變動に伴ふて、昔の道德ではどうしても足らない。又昔必要であつたことが、今は却て不必要となつた事が澤山出て來た。其處で此新時代には何う云ふ道德が必要であるかと云ふことが自然と問題になつて來たのである。處が夫が未だ決まらぬ爲に、今日多くの學者が熱心に研究して居るのである。日本に於きましても舊幕の時代と現今の時代とは非常な相違である。封建時代に吾々の行つて居つた事では、今日は不足の點が澤山ある。過去の時代には左程大切の事と思はなかつたことも、今日は是非實行しなければならぬ樣になつて來た。又其時代には非常に大切に思ふて居つた事でも、今日では左程大切と思はなくなつた點も少くない。夫故に現今日本でも、存外多くの人々が倫理の研究に從事して居るのである。斯の如くに社會に倫理の研究が始まり又それが盛になるのは、いつでも社會に何かの原因で大變動が起り、世間の趣が變つて來て、昔の方法では到底いかぬと云ふ時である。例へば夏になつては冬の著物は著てゐられぬ、夏には夏に適した著物を用ゐなければならぬ。斯樣に、社會の生活方法が變る結果として、昔の儘の物を用ゐて居つたならば、恰も夏に冬の著物を著てゐる樣で不便極まる事になる、新時代には新時代に適したものを發見しやうとする爲めに、茲に新倫理の研究が起つて來るのである。

然らば現今倫理の問題で、何が研究の主題であるかと云ふと、それは前述の自然科學の發達である近代の人間が自然科學を利用し、衣食住に必要なるものを生產し、又それを分配上に應用する樣になつて、社會に大變動が起つて來た爲めに、倫理をもそれに應じて變へなければならぬと云ふことになつて來た。次の主因は政治思想の變遷である。昔の人民は唯上の人が治めて行き、下の人は唯導かれて居たのであつて、政治の事などは一向心得ず之には無關係で生活して居つたのであるが、今日は歐洲ばかりでなく多くの國でも代議政體といふものに改まり、下々の國民より代議士と云ふものを選んで、其者が協議をなして國家の政治政策上に必要なることを定めると云ふことになつて來た。故に其人を選ぶには如何なる人が適當であるか、と云ふことを知らなければ滿足なる選擧が出來ぬと云ふ風に、政體も變つて來た。それが又國民の倫理思想上に大變動を生じて來る樣になつた、則ち代議政體と云ふことが始まる前には、全く認められて居なかつた所の道德が必要になつて來た。斯くして倫理道德上に一大變化が生じて來たのである。今一つの原因は自然科學研究の結果、人と云ふ者が他の天然物に對する關係が餘程變つて來た。換言すると前には人間は萬物の靈長であつて、禽獸などゝは全く性質の違つたもので、人間と彼等とは全然類を異にする樣に思ふて居つた。所が動物學生物學の研究が盛んになつて、其研究の結果人類も他の動物も或る同一の法則の下に支配されて居るものであるので、是迄人間自身は吾々は萬物の靈長であつて特別例外に此世の中に生じて居たもので、全く他のものとは違つてゐる樣に思ふて居つたのは、大なる間違であつたと云ふ樣に變つて來た。斯樣な變化て、舊來の道德觀念の基礎が動いて來た。それかと云つて舊道德を全く棄てる譯には行かぬ。そこで何か新道德の基礎を見出さねばならぬと云ふことになつて來た。是亦倫理の研究が盛んになつて來た所以である。

以上を約言すれば第一は經濟上の變動、第二は政治上の變動、第三は人類學上の變動。斯う云ふ事項が倫理思想の變動上に重なる原因になつたのである。

是等の事に就ては、未だ日本では其研究の必要を餘り感じて居らぬ點もある。何故かといふにまだ吾國では第一の經濟上の發達が西洋に於けるが如くになつて居らぬ。併し今後は段々と實業が發達し經濟事情が變つて來るに相違ない、さうすると日本でも矢張り西洋と同じ樣な問題が起つて來て此處五十年も經たぬ中に、吾國も西洋と同じ問題で苦しむ事になつて來るであらうと思ふ。

次に第二の政治上の問題。是亦今日では一般の國民が政治上の事に就てそれ程に考へて居らぬ爲に西洋の如くに新倫理の基礎の上に政治道德を立てなければならぬと云ふ事の必要を感じて居らぬが、我國も立憲政と云ふものを布かれ、相當の資格のある者には選擧權を與へられた爲めに政治上の思想も段々と變つて來るであらうと思ふ。現に選擧のある毎に人民が政治上の事を深く知る樣になつたり又選擧毎に悲しいことには善事よりも惡事の方が弘まる傾が見受けらるゝのである、それかと云ふて

二百年前封建時代の樣に、此日本を後へ還すことは到底不可能である。それでどうしても玆に新政治に適合する樣な倫理を改めなければならぬことに迫られて來て居る。之も西洋程强く感じて居らぬ爲に、政治道德研究の必要も今の處では未だ十分に注意されて居らぬ樣な譯である。次に第三の自然科學より來た所の人間の位置の變化。是亦一般人民は自然科學に就てまだ大體を心得へる迄にも至つて居らぬが、之れも敎育が漸次普及し、中學校に於て動物學、生物學と云ふやうなものを學ぶやうになると、自然科學の思想に反對するやうなことは、道德上よりも宗敎上よりも言ふことが出來なくなつて來る。それに反對した樣なことを言へば、却て道德や宗敎を多くの人が輕蔑することになつて來るのである。故に是も玆二三十年間には何とかして完全なる道を考へなければならぬ必要に迫られつゝある。既に斯う云ふ知識が這入る前に、此頃は自然主義なるものが世間に八釜敷なつて居る。自然主義は重に動物性に基いて起る人間の慾望に、より多くの滿足を與へるのが人生の目的であるかの如くに說く主義の總稱であるが、是は確に進化論の誤解より來て居るものである。斯う云ふ風に本當の自然科學の知識が廣まらぬ前に、早や已に道德を破壞する思想が大分這入つて來て居るのである。斯う云ふ次第で、今述ぶることは現今の場合に於ては左程必要でないことのやうに考へらるゝかも知れぬが、敎育宗敎の上に遠からず此問題は起つて來るに相違ない。故に何とかして適切な穩健の思想を見出し、之に依つて人民を指導する事に今より注意せねばならぬと考へる。

今一つ倫理學に就て述べて置きたい事は、多くの專門學では之を研究して居らぬ者は、夫に對して餘り意見を唱へぬ、例へば法律の學問などは、法律を特に研究したものでなければ分らぬ。物理學も數學が出來て居らぬものには分らぬ。法律學物理學等に就ては、素人は餘り何も言はぬ。所が倫理道德の學問に關係しては之を專門的に研究もして居らぬ人、又十分なる素養も有つて居らぬ素人迄が、色々と八釜しく喙を容れるので益ゝ混亂を惹き起す事になる。專門家に任して置けば自然に穩健なる解決が出來さうなことでも、素人が八釜しく煽動する傾があるので、益ゝ思想の混亂が起つて來る。思想の混亂が起つて來ると、或人は非常に保守的になつて、何も彼も昔に返す方が宜いと云ふ樣になる。さうかと思ふと又一方には、却て其反對に極端なる新思想を生じて來る。此處に極端と極端とが出會つて大衝突を生ずる樣になる。是が倫理の研究に就て一つの不利益の點である。併し一方から云ふと夫れが亦面白い結果とならぬでもない。何となれば、他の學問では個人々々に取つてそれ程必要なことでないので分らずとも濟むが、此倫理道德の學問に就ては一通り解決が出來て居らなければ、吾人は一日も安心して居ることが出來ぬ、如何に六ヶ敷き事でも研究をして其解決を圖る樣になる。何う云ふ事をすれば善いか、何う云ふ事をすれば惡いか、今後はどう云ふ事をして行けば、人間としての職分を完ふする事が出來るかと云疑問は、誰にも彼にも當面の問題である。尤も興味のある問題である。何としても棄てゝは置けぬ。故に專門に研究せぬ人でも色々論議する樣になるのである。斯

様になるのは、各自に取つて必要の學問であると云ふことを示してゐる。倫理道德の事は打ちやつて置けぬ性質を有つて居るのである。其點より見ると、此倫理の大切な所、面白い所が、明かに分ると云ふてもよいのである。

以上の譯で昔より何處の國でも社會に變動が起つて來ると、直ちに倫理の問題が起つて新解釋を求めなければならぬ樣になつて、此の研究の隆盛を來すのである。現今の日本の狀態は西洋とは多少違つては居るが、其研究の動機となる點は殆んど同一である。

其處で昔より大體どう云ふ樣に道德倫理に關する問題の解決が進んで來て居るかと云ふと、今日は所謂第三の時期に這入つて居ると云ふても宜い。所謂第三の時期とは何であるか、第一の時期は人倫道德に關し客觀的解釋を取つて居る。乃ち道德の標準を何人かの命令、誰かの敎に基けて居る。誰が斯く敎へた、彼の聖人が斯く說いたと言ふて滿足して居る。或は社會の輿論が斯ういふ事を要求して居る。故に社會に生存する者は、是非共其要求に應じて行かなければならぬと考へ、我以外に道德の標準を客觀的に求めたのが、最も古い第一期の時代である。

然るにそれが段々と反對の方に進み行き、今度は我自身の中に主觀的に道德の標準を求める樣になつて來る。それはどう云ふ譯であるかと云ふと、此は人間の精神が發達した結果である。然らば如何に主觀的に求めて居るかと云ふと、人間自身の各自の幸福と云ふものが道德の要求である。則ち吾々の善いと云ふことは、幸福を增進することであると考へる。斯く幸福と云ふものを主觀的狀態と考へる樣になる。然らざれば吾々の理性といふものに於て、道德の標準を認める。さうするのが合理的である、そうして行かなければ理屈に合はぬと考へる、斯く理性の方より道德を說明する。或時には快樂或時には理性斯う云ふ樣に自分の心に備はつて居るもの、或時は又自分の意志と云ふものが吾々に命令を下す其意志の命令は人性其ものから現れて來る要求である。斯う云ふ風に意志の方面に道德の標準を定めやうと考へたこともある。又人には良心と云ふものがあつて、其良心が吾々に斯くの如きことをなせと命ずる、其良心に叶つて行くことが道德である。斯樣な風に人心の能力に基づき、主觀的に倫理問題を解釋したこともある。兎に角道德の標準を我心に見出さうと考へたのが、大別して云ふと第二の時期の說である。

第三の時期に就て解り易く云ふならば、凡そ一個人の經驗に訴へて考へて見ても、又た人類の歷史の大體より考へても同じことであるが、少年には親が斯くせよと云ふた、之は親の命令である。或は師匠が斯うせよと云た、之は師の命令である、故にさうする。斯樣に考へて客觀的に道德の標準を置て居る。或は精神の發達の鈍い者であるならば、少年と同じく法律が吾々に斯くせよと要求するので斯くしやうと考へて居る。併し段々自分の精神が發達して來ると、外部より來る命令では滿足が出來ぬやうになつて、自分自身で考へる樣になる。是は所謂青年期である。青年期に迷いの多いのは、客

觀的道德より主觀的道德に、容易く移れぬので、色々迷ひを生じて來て、厭世的になるものもあれば或は己の一身を支配することの出來ぬ放蕩無賴の人になる者も出て來るのである。それが一歩進むと今度は綜合の時期になる。外部よりの要求にも或點に於ては應ずる。乍併只外部の命令であると言つて應ずるのでなく、自分の良心、自分の理性がそう云ふことを要求する。理性の要求する所と外部の要求する所とは同一のものであつて、違つたものでないと、斯樣に考へる樣になつたのは則ち第三の時期である。人が三十歳以上にもなつて來ると、總て分別が付くと云ふのは此處である。人類の歴史でも、個人の發達でも、同樣である。古代の倫理思想は客觀である。近代歐洲の倫理思想は主觀的で一個人の精神上に、道德の基礎を見出すといふ方に進んで來て居る。而して十九世紀の終りより二十世紀の今日は此二つのものが綜合された。所謂主觀的の要求と客觀的の要求とが一致した所に眞の道德と云ふものゝ基礎があると、斯う云ふ風に思想が進みつゝある。未だ其處が十分に到達して居らぬのであるが、確に其方へ歐米の思想は今移りつゝある。

それで日本の今日の思想はどの邊にあるかと云ふと、社會一般の精神狀態に由て道德上の事を考案するに、今や客觀的より主觀的へ移りかゝつて居る。人が己の一身を修むることが出來ずして無賴放蕩になり、金錢の奴隷になり、情慾の奴隷になるのは、恰度昔の命令的外的道德、即ち外部から來る命令に從つて來たものが、今や第二の主觀的道德に移らうとして居る狀態である。それで之を打棄て置けば自然に其方に進み、所謂極端なる快樂主義とか、個人主義とか云ふものが增長して來るに相違ない。併し其れで今日本の風敎に關係のある敎育家、宗敎家が注意しなければならぬ事は、其主觀的の狀態に永く置かぬやうにしなければならぬ事である。必ずやそこへ多少は向つて行く、どうしても主觀的狀態に多少這入つて行くけれども、其の主觀的狀態に長く止まるのは安全でない。主觀的を超越して第三の時期、主觀客觀を調和するの時代に移すやうに努むるのが宗敎家や敎育家が一般の人心を指導して行く上に、今後二三十年間最も注意しなければならぬ點であらうと思ふ。併し日本の現狀は如何と云へば、學問としては進んで居るが、一般の社會としては寧ろ客觀的道德より主觀的道德に移らんとして居る時である。以上は大體古來より倫理問題の變遷したる順序である。

次に倫理研究方法の變遷を述べむに、是も大體三期になつて居る。第一期の倫理道德の研究法は、重に宗敎に基き宗敎に依つた倫理の研究法である。是が最も古い。第二期が哲學に基いた倫理の研究法であり。第三期が科學を基礎とせる研究法此三に分れる。勿論此各期は斯樣に劃然區別の出來るものでない。第一期の宗敎と、第二期の哲學とは判然區別の出來るものではなく。又第二期の哲學と、第三期の科學も亦明晰に區別の出來るものでない。けれども大體を以て斯樣に區別するのである。其處で第一期の宗敎的研究法と云ふのは如何なる方法かと云ふに、是は種々樣々の倫理の問題をそれぞれ各宗敎宗派の取つて居る所の根本思想に依つて解決する方法である。宗敎は種々あるが、何れの宗

教宗派でも根本思想と云ふものは、其宗其派に依つて其處に多少違ひ目はあるが、大體は一致して居るのである。其處に準據し其說明に基いて總て倫理問題を解決して行く。新しく起つて來る問題があれば其點より之を解決する。例へば他力宗であると他力の立脚地より總てを見て行く、自力宗であると其立場より總てを考へて、而して倫理の諸問題は何でも解決する。次に宗教的倫理の研究法は經文に依る事。何の經文に斯う書いてあるので斯うせねばならぬ。斯う云はれてあるので斯うすべきであると。斯樣に一つの書物を本にして、經典に由て解決して行くのが第一期である。

次にそれが段々變化して、今度は第二期の哲學的に解釋になる。則ち哲學の根本思想に依つて解釋する。之は大體二つになる。即ち唯物論的と唯心論的とである。凡そ天地には物質より外には何物もない、天地の現象は皆物質の變化に外ならぬと、斯樣に見るのと。天地の現象は精神即ち心の變化より生ずるもので、心の外に何等の實在もないと見る此二つがある。尤も唯物論と言ふても唯物論の說方にも色々あるが、兎に角さう云ふ立場より總ての事物を見て倫理問題を解決する。其解決の仕方は時代に依つて違ひ、其結論も種々あるけれども、唯物論の方より進めばどうしても自然主義になり、唯心論の方より行けば理想主義になる。兎に角此の時期では唯斯うあるといふことでは滿足せぬ。斯くあるべしと云ふ一つの標準を置いて、それに依つて問題の解決を求めて行く方法である。是等の事を詳しく說明すると長時間を要するので玆に止めて置く。

次に第三期は科學的研究の方法であつて、是れが現今倫理學研究上最も廣く採用して居る所の研究法である。その方法の例は何か學問に依り、其を根據として倫理の總ての問題を解決しやうとするのである。例へば心理學と云ふ一つの學問は、人間精神の現象を研究する學問、此の心理學の立場より一切の倫理問題を解決しやうと云ふのが、今日の科學的倫理學と云ふものゝ一つである。乍併此基礎に立つ說は大體、個人說になる。個人と云ふものを最も重く見、個人が總ての標準になつて行く說になる。次の一例は社會學と云ふものを基礎學に取つて、人間社會は斯う云ふものである。社會と云ふものは斯樣に發達するものであると云ふ社會學の結論を根據として其立場より一切人間の道德現象乃ち「人間は斯の如きことをすべきものである」「斯の如きことをしてはならぬ」と說明して行く方法である。此二方法即ち心理學を本とすべきか、又は社會學を本とすべきかと云ふ事は今日一部の倫理學者の間に問題となつて居るのであるが、予は此の何れをも取らぬ。心理學と云ふ方に偏してもいけず社會學に偏しても不可ぬ。心理學と社會學とは、人の本性より起つて來る所の學問で、此二者の何れにも偏しては不可ぬ。人と云ふものゝ特色は精神現象であるので、其方より言へば心理學を本としなければならぬ。乍併人は孤立して生活が出來るものでない。社會を離れた人は一人もない、斯の點より見れば社會學が本にならなければならぬことになる。されば心理學も社會學も共に取らなければならぬ。故に兩者の根柢に依つて始めて倫理問題は說明すべきものであるといふのが予の說であるが。

兎に角科學的倫理學は上述の如きことを唱へて居る。次に又人は動物であるので、動物學と云ふ科學を基礎として、禽獸と同じ動物の法則に依つて、人倫道德を說明しやうとする方法もあるが。此は勿論餘り勢力はない。此等を稱して科學的倫理研究法と云ふのである。

是て以上に述べたる如く倫理學の研究法は大體此三つになつて居る。第一は宗教的、第二は哲學的第三が科學的と云ふ三方法になつて居る。併し前述の如くに宗教と哲學とは、固より分離するとは出來ぬ。發達したる高尙なる宗教は、皆哲學の基礎を有つて居る。哲學の基礎の無い宗教は未熟の宗教である。故に此二者は離すことは出來ぬ。又哲學と科學も勿論明に離すことは出來ぬ。科學を段々研究して往けば詰る所哲學になる。乍併通例大體分けることは出來る。又三つの研究方法は今尙東西共に存して居る。西洋諸國には今尙基督教に基いて又は或る經典、或る宗派の教理を本にして一切の倫理を說く學者もある。又獨逸では倫理を哲學の一部分として所謂哲學的研究法を取り、哲學の原理で倫理道德を說明する方法を探つてをる。英國の學者は多く科學的研究を準據として居る。但し此三方法は前述の如く、一つが廢れて他が出て來たり、其一が消えて次に第三が出るといふのでなく、三つが同時代に存在して居る事もあるのである。乍併其始まつた順序は斯樣な次第で、段々新研究法が附加はつて來たのである。要するに此の三研究法に依つて、倫理學の三種類が生じて來る。即ち一を宗教的倫理學と云ひ、二を哲學的倫理學と云ひ、三を科學的倫理學と云ふのである。如斯に是迄倫理學は漸々變化して來て居るが、然らば現今其倫理學の問題になつて居るものは何か、如何なることが研究上の大問題になつて居るか斯う云ふ疑問が爰に起る。扨て倫理の問題は今日澤山あるけれども、大體を云はゞ之を三つに區別することが出來る。一を良心論と云ひ、二を理想論と云ひ、三を應用論と云ふ。

（一）良心論、良心と云ふものゝ解釋は多少人に依つて違ふ。良心は理性であると云ふ人もあれば、感情であると云ふ人もある。又は意志即ち志向であると云ふ人もある。斯く良心と云ふものゝ解釋は違つて居る。乍併人が良心を有つて居ると云ふことには何人も疑を容れぬ。良心が無いと云ふ人は一人もない。其處で今日學問上難問となつて、多くの人が研究して居る點は、何れより此の良心と云ふものが來たのであるか、何故に人のみに斯う云ふものがあるのであるか、人類以外の者には良心に耻づるとか、良心に責めらるゝとか云ふ如きことは何もないが、人間には或事をすれば良心が滿足に思ふとか、或事をすれば良心に恥かしく思ふとか、又は良心に責めらるゝとか言ふ樣になつてをる。さう云ふものは何れより來たか之が即ち良心起原論で、今日倫理學の大問題になつて居る。何故良心の起原に就て議論があるのかと云ふと、それは前述の自然科學研究の結果より、此問題を研究しなければならぬやうに餘儀なくされて來たのである。即ち昔は人は萬物の靈長である。天より良心と云ふものを授けられて居るとか、或は良心といふものは、神の心が人心に現れて居るのであるとか、或は又

宇宙の實在が吾々の良心となつて現はれて來て居るのであるとか、斯う云ふ樣な解釋で濟んで居つた所が動物と人間との比較研究が初まつて以來、さう云ふことは全く根據の無いことで只一の信仰に過ぎぬ。學問上之も科學的に事實上に基づき經驗上の證明を求めなければならぬと考へて來た。動物學の研究が大いに此問題の研究を迫つて來た。そこで何とか之を解決せねばならぬ必要で此問題が起つて來た。即ち自然科學の研究上より餘儀なくされて來たと斯く云ふて宜いのである。此の良心は何れより來たかと云ふ問題に對して、種々說明の仕方があるが、此は後に述ぶる事にして。次の倫理學の問題は

(二)理想論である。凡そ人性の最終の目的として、吾々が此の世の中に存在して居るのは何であるか。大體人と云ふものは何の爲めに生きて居るかといふ問題である。吾々は只動物と同じく食つて飲んで生を續けて居ると云ふ丈では滿足は出來ぬ。何か爰に吾々が生存して仕遂げなければならぬ目的があるに相違ない。個人々々に所謂一つの天職と云ふものが何かなければならぬ。それは何かと云ふ問題。是れが第二の問題であつて、之れにも勿論種々なる解釋の仕方があるが。次の問題は

(三)應用論である。吾々が社會的生活をして、三十年或は五十年の間生存して居る間に、社會に對して如何なることをすれば宜いのであるか、國に對して如何なることをすれば宜いか、自分自身に對して如何なることをすれば宜いのであるかと云ふ實際問題、日常生活を指導して行く方法に就ての問題の研究である。

大體以上の三問題に分れるのであるが、中に就て今日は倫理學上何が最も重要なる問題になつて居るか、困難を感じて居る問題は何であるかと云ふと、何よりも今日では實際問題である。勿論良心起原論も、人生理想論も共に大なる問題として研究はして居るが、段々と良心論より理想論、理想論よりも應用論の問題の方が重なる研究問題になつて來てゐる。何故斯樣になつて來たかと云ふに、段々と社會が大變化をするので、最早や理想論の研究で長く日を費して居ることが出來ぬやうになつて來たためである。何とかして現實の社會を早く救はなければならぬ必要に迫られて來た。故に良心起原論とか人生理想論とか云ふて、唯靜かに考へて居る丈では往かぬ。例へば隣家より火が起つて來た際に、如何にして火を防ぐかと云ふことを研究して居つても仕方がない、早速行つて火を何とかして消さなければならぬといふ必要に迫られて居る。今日は社會問題、即ち倫理を如何に社會の實際問題に應用するかと云ふことが最も大切の問題、最も切迫した問題になつて來て居るのである。此事は特別に宗教家布教家に關係のあることであるので、少しく詳論して見やうと思ふ。兎に角此の三問題に分れて應用論が今日では焦眉の問題になつて居るのである。乍併此の第三の問題は第一第二の問題に就て何か自分の意見が定まつて居らなければ實行の出來ぬ問題である。唯無暗に實行を急ぐ丈では足らぬ。何か自分の信ずる一つの倫理上の主義と云ふものを以つて實行しなければ、滿足なる解決は出來ぬの

であるので、第一第二の問題に對しては、今日の倫理學が如何なる學說を採つて居るか、何れの學說が最も滿足なる倫理と認めて居るのであるかといふことを少しばかり述べて、而して其主義に基いて第三の切迫して居る問題の解決の方に講演を進めて行かうと考へるのであるが。其前に良心論と理想論とに就て今日解說されて居る所に就て、極く簡單に說明して見やうと思ふ。

（イ）良心起原論、昔より良心は人心に何れより來たのかと云ふことに就ては種々なる說明があつて學者の意見は一致して居らぬ。最も古いのは生得說と云ふ說で之も術語であるので此の語に依つて言ひ現さるゝ意義は種々あるが、要するに生れながら人心が有つて居る即ち人性に良心と云ふものが生來具はつて居ると考へる說を言ふのである。然らばどう云ふ風に生れながらに具はつて居るかといふ點に就ては、說明の仕方が違ふのである。例へば或學者の說に從へば、人性に善惡正邪を判斷する力が自然に具はつて居る。乃ち吾々は物體の大小を自然に判斷する力を有つて居り、又時間に對して、時間が長いとか短かいとか言ふ判斷も、生れ付自然に出來る力を有して居る。斯樣に人は事物に就ては其善惡を判斷する力を自然に有つて居るのである。其れは良心が生得である爲めである、と說明をした人もある。此說に反對して判斷といふものは種々の條件があつて其の協動の結果始めて生じて來るものである。良心は一種の感じである。或事をすれば自然に心に滿足に感ずるとか、或事をすれば不愉快で堪らぬとか、或は良心に責められて生きて居られぬとかいふやうに感ずる斯樣な感じは人心が生れながらにして有つて居るのであると論ずる學者もある。則ち其一方では良心を以て理性と見、理性は生得であると考へ、他方では良心を一種の感じと見、感情を生得であると考へる其見方に相違がある。又同じく理性に善惡正邪を判斷する能力の具はつて居ると考へる人の中にも、判斷の標準が具はつて居るのであると云人と、判斷の根本原理が具はつて居るのであると云人との別がある。又夫等と異なりて此事が善である、彼の事が惡であると一々事に當つて判斷する能力が人心に生來あるのであると考へる人もある。則ち一方では一々の知的働きが生得であると見、他方では根本原理が生得であると見るのである。詳しく分けて論ずると、殆んど數限りがない程違つた說があるが。兎に角生れ附き人心に良心と云ふものがあると見るのが生得說である。此生得說といふものを、吾々東洋人は通例之まで信じて居た、西洋でも昔はさう云ふ風に信じて居つたのである。併し近世に到つて科學發達の結果、其反對を唱へる人が出て來た。それは

（ロ）經驗說である。良心は經驗で出來たものであつて、決して生來在るのではない。生れた時に吾吾の精神は善惡正邪に就て判別する能力があるのでない。是が善であり惡であるといふ事は、親なり教師なり、或は社會全般より敎へ込まれたものである。それを經驗して、其の結果として良心と云ふものが出來たのである。それで人の生れた境遇が違ひ、時代が違ひ、社會が違ふと、其人の善惡正邪に關する判斷が違つて來る。或社會に生れた人は或事を一向平氣で惡と思はぬが、他の社會に生れた

人又は他の教育を受けた人は、同一の事を感ずる。此の差は全く經驗又は教育と云もの丶結果であると、斯樣に說くのが所謂經驗說である。此經驗說と云ふものにも種類があるが、如何にして經驗で出て來るかと云ふと、或人は人の精神も肉體と同じく、習慣と云ふものが出來るやうに造られてある。吾々は肉體のみならず精神に於ても或事を絶えず繰返して居ると其方に發達するものである。例へば絶えず歩いて足を使ふて居る人は、足が極めて丈夫になる。足を使はずに居るものは、足が段々弱くなるが如くに、精神でも同じである。眼を細かい物を見ることに常に使へば、段々細かい物が見えるやうになるが、眼を細かい物を見ることに使はなければ、細いものをよく見る力がない。是れ則ち精神統一が出來ぬのである、習慣に由て細かいものがよく見えると見えぬと云ふ相違が生ずるのである。斯樣に精神も毎日同樣の事を繰返すと、習慣を生じて來る。即ち聯想が生ずるので或事を考へれば善或事を思へば惡といふやうに直ぐに善惡の觀念が容易に起つて來る。其聯想は生來具はつて居るものでない。或事は惡であると屢ゝ聞くと其事を聞けば直ちに惡と思はれるのである。是が則ち良心の出來た根原であると、心理學生物學の方より說明をするのである。又或人は啻に精神がさうなつて居るばかりではない、社會には法律といふものがあつて、或事をしてはならぬと定めてあるので、其をしてはならぬと禁じてあることをなす時は罰せらるゝ、罰は苦であるので、其苦を免かるゝ爲に或事は爲し、或事は避ける樣になる、之が法律の制裁に由て習慣になり良心が出來たのであると言ふ說の人もある。又法律が出來て居らぬにしても、或事をすれば社會の人々が其人を輕蔑し排斥する。或事をすれば感心な人であるといふて褒める。斯樣に輿論が制裁を加へるので或事は善、或事は惡と考へる思想の習慣が出來て、次第に良心と言ふものになつて來るのであると考へる人もある。又或人は人一代にては却々そうはならぬが先祖代々以來、或事は善、或事は惡と教へ込まれて來たので、其習慣が先祖より親に、親より子に傳はり、又其次の子に傳はるといふことになつて、代々の經驗の結果で良心が出來たのである。一代の經驗の結果ではない。人類全體數千年來の經驗の結果爰に良心が生じて來たのである。經驗全體が作り出したのであると斯樣に說くのを經驗說と云ふのである。斯く良心の起源は一人の經驗で生ずるとの說と人類の經驗全體が之を作り出したのであると考へる說との二說がある。古來宗教家の方は多く生得說を取つて居るが、科學者の方即ち自然科學又は生物學を研究した人は、多く經驗說の方を取つて居るのである。爰て此等の說の是非に就て批評をすると或は參考になるかも知れぬが、今は暇がないので之で止めて置く。(若し斯る點を詳細に知らんとせば拙著「教育的倫理學」に其の二說の長短が批評してあるので其に讓る事にする。)此等の說は何れも或一派の人々が主張して居るのであるが、最近倫理學に於ては其の何れをも取らぬ。此の二者を結び付けた即ち調和したる如き說を今日多くの倫理學者は取つて居るのである。予の考へては此の實現說なるものが宗教とは完全に調和する說である

(ハ)實現說と云ふのである。予の考へては此の實現說なるものが宗教とは完全に調和する說である

と思ふ。生得說といふ方は、舊式の宗教家は之に贊成かも知れぬが、今日の進步したる宗教家は、生得說よりも寧ろ實現說の方に宗教は近いやうに考へて居ると思ふ。然らば其實現說とは如何なる說であるかといふ事を簡單に云はゞ。凡そ人間の性格には良心になる可能性がある、良心になる種子がある、良心になる傾向があると云ふて宜い。それを教育なり、經驗なりに依つて引出す即ち養成する。さうすると良心と云ふものになると斯う云ふ說であつて、經驗だけでは良心は出來ぬ。良心になる種子が無いならば、如何に教育を加へても良心にはならう筈がない。又經驗と云ふものが無ければ、如何に可能性があつても良心は出來ぬ。又良心と云ふものゝ發達が、教育の如何に依つて異なる。或る境遇に生れたものは、良心が十分に發達せぬが、或る他の境遇に生れたものには、良心が十分に發達する。斯樣に變化のある所を見ても、良心の發達が大に教育の如何に關係して居ることは明かなる事實である。今日吾々の有つて居る良心は、內外二つの要素が協同して生じたものであるといふ風に說くのである。何故實現說といふかと云ふと實現說といふ名を附けたのは、人の精神には一種の可能性があつて、此の可能性を實際に現はし、現實のものに作り上げるのであると考へるので實現說と云ふのである。初めより良心なる潛在力はあるが、それを教育に由て養成して事實上に現はして來るのであると說明するので實現說と名付けるのである。是は單に良心ばかりではなく、今日の科學では他の事にも與へて居る說明である。例へば栗の木が出來るのは、栗の實を植えた結果である。其の栗の實の中に栗の木になる可能性が存在して居るので、栗の木が出て來る。石ころなどを植えて置いても、それは植物にならぬ。何故かと云へば石ころの中には、植物となつて發達する可能性がないからである。併し栗の木になる可能性を有つて居る栗の實であつても、それを机の上に置いて、其物に滋養分を吸收することが出來ぬやうにして置いたならば、栗の樹にはならぬ。何時までも栗の實で殘つて居る。斯樣に人の精神は、良心になる可能性を有つて居るけれども、それを養つて往かなければ良心にはならぬ。可能性だけでは良心でない。吾々の生存して居る所の社會が栗の木に譬へて云へば恰度土の樣なもので、良心が生じて來るのは、土の中に栗の實を埋めた樣に社會的に生活するためである。それで種々の刺戟を受けて良心と云ふものが出來る。斯う云ふ風に今日の倫理學では良心の起原を說明するのである。此の說が今日では最も廣く學者に採用されて居る。此の說明の仕方は今一步踏込んで考へて見ると、哲學の問題になつて來る。何故かと云ふと、何故そう云ふ可能性があるのか、其の可能性と云ふものは何より來るかと云へば、それは宇宙の實在にさう云ふ可能性がある。夫が各個人の精神に現はれて來るのであると言はなければならぬ。夫は己に哲學になつて居る。けれどもそれまでは倫理學では論究せぬ。倫理學としては、人心には可能性がある、其の可能性を養つて行かなければならぬと云ふやうに說くのみで、今一步進んで、何處より其可能性が出て來たかと云ふ問題になると、开は已に哲學になるので、唯物論の方では夫は物質が樣々に結び付いて斯樣になるといふであら

うし、唯心論の方では宇宙の本體が一個人の精神として現れて來ると説くのである。予の見る所では物質の結合などでは此の説明が出來るものでないと思ふ。良心の起原といふ説明より哲學に這入つて往くならば、唯心論にならなければならぬと思ふ。兎に角、斯の如きが今日の良心論である。そこで是は特に教育に關係するので起原の外に更に一言附け加へて置くが、良心と云ふものは昔の人の言ふたやうに棄てて置いてはいけぬのである。昔の人は良心と云ふものは生得的である。生れ付き人が有つて居るので自然に現れて來る。又別段に教育をしなくも正確なる判斷を爲し得るものである。それには誤りがない、斯樣に云ふのであるが。それは今日の説では唱へられぬ。何故かと云ふと吾々の良心は『玉磨かざれば光なし』と云ふが如くに、自然に放棄して置いたでは良心の光は出ぬ。之が教育の必要なる所以、殊に宗教の必要なる所以である。如何に立派なる寶玉であつても、山の中より掘り出しただけの璞では光は出ぬと今日では言ふのである。良心には誤はない、良心の判斷は必ず正確であると云ふものにするには教育をしなければならぬ。打棄つて置いては正確なる判斷が良心より生じて來ぬ。其れで啻に良心の智的方面に注意して教育を加へなければならぬばかりではなく、良心の感情的方面にも十分に注意せねばならぬ。今日學校などに於て教育の不充分に感ぜられるゝ點は多く良心の智的の方ばかりを重く見て、良心の感情の方面に十分の注意を拂はぬためである。善惡正邪の別に就ては一通り心得て居る者でも、而も善をなし惡を避けるに足る强き觀念を有つて居らぬためである。其處になると家庭の教育とか宗教の教育とかいふものが必要になつて來て、學校の教育と相俟つて往かなければならぬ。學校の教育にては良心の感情の方面の教育、意志の方面の教育は誠に出來難いのである。

良心問題に就てはこれだけにして置いて、理想論に移つて其大體を講述する。理想論も大體を分けて三説となる。其三説中最も簡單にして古いものが快樂説である。人は皆快樂苦痛を感ずるものである。故に出來る丈け快樂を增し出來る丈け苦痛を避けて人生の幸福を增進するのが理想であると説くのが自利説或は功利説と云ふ。功利説は最大多數の人の、最大幸福を增進する爲に、吾々は爰に生存して居るのであると考へるのである。其の功利説も亦快樂説の一種であるが、自利説とは勿論異ふ、自利説は自己の苦痛を避け快樂を增すを以て理想と見る説である。此説も古來歷史を考へて見ると種種に分れて居る。例へば自利説にしても其の最も簡單なものは、現在の快樂を主として將來の快樂などは考へぬ。唯だ現在直ちに快樂を最も多く得るやうに努むるのが人生の目的であると説く。今一つの點は快樂には肉體の快樂と、精神の快樂とがあるが、其の何れを主にすべきかと云ふと、極端なる快樂説は肉體の方を主にするが、他の説では精神の方を取らなければならぬと云ふ。斯樣に自利説にも色々違ふはあるが、兎に角自己の幸福を增進するを目的とするのが自利説である。功利説の方は最大多數の最大幸福を目的とするのである。所が其最大多數の最大幸福といふ事に就て、最大といふの

は何の最大を言ふのか、自分と同人種の最大を云ふのか、又は同國人の最大多數を云ふのか、人類全體の最大多數を言ふのか、或は人類以外の動物迄も含めて最大多數といふのであるかと云ふと、種々說が違ふ。又此等のものゝ幸福を增すと言つても、劣等なる幸福を增すのか、高等なる幸福を增すのか。高等なる幸福なれば、分量は少くても構はぬが、劣等なる幸福ならば、非常に幸福の分量を增さなければならぬてないかと云ふ如き種々の疑があるのである。兎に角快樂說は感情を本にして、感情に於て滿足を得るのが人生の目的であると考へ。或學者は快樂說を主張して居る。之に反對の說を通例合理說と云ふのてあるが、快樂說が感情を主にして行くに反して之は理性を主にして行く。理性に滿足を與へる。我等の本性が益々理性の支配を受けるものになるのが、人生の目的てある。例へば兒童などは感情に支配されて居るが、それが段々成長すると、道理を辨へる力が發達して來る。何事ても道理に叶つて、場合々々に適當なる事をするやうになるのてある。人は理性が益々進んで、一切のことを理性に便りて支配して行く者になる。斯うなるのが人生の目的である。人生を合理化する。合理的のものに化して行くのが人生の目的てある。それて克己制慾といふことが人生の目的になつて來る。理性は常に感情を合理化すべきてある。人は感情を押へて理性の力に依つて動くべきてある。斯樣に努めなければならぬと云ふのが合理說の主張てある。併し合理說にも二通りある。一は消極的て唯快樂を抑へよ、快樂は理性を害するものてあると考へ克己を主張する說と。他は積極的に理性を益々磨き盛んにして完全の人になれと說く完全說との二通りある。要するに合理說は感情を主とする快樂說に反對し、理性を根柢として人生の目的を定めやうとする說である。次に現今の倫理學者に廣く採用されて居るのは實現說と云ふ說である。實現說と云ふのは人の本性に唯だ可能性がある、其の可能性を益々伸して行くのが人生の目的てあると考へる說てある。人の性には人が益ゝ進化して完全なるものになる能力が備はつて居る。其能力をその儘に捨て置かず、自己の力て修養し發達させて之を實際に現はすべきてある。唯可能性を有つて居るばかりては足らぬ、實際にそれが現れたものになれ。斯うするのが人生の目的てある。總ての宇宙の物は、皆或る能力を持つて居つて、而して各々其の能力を發揮しやうと努めて居るのてある。牛が發達するのは、牛が有つて居る能力を完全に現はすのてある。植物が成長するのも、植物が持つて居る能力を發揮して、花が咲き實が成るのてある。宇宙の物は凡て其有つて居る能力を完全に現はそうとして、存して居るのてある。

然らば吾々が實現すべき所の能力は如何なるものかと云ふに、之に就て三通りの說がある、(一)自我實現說、是は個人としての精神能力を益々發揮させ、完全なるものになると說き、個人の方を重んずる。次は(二)社會的實現說。是は吾々は社會を爲して生存して居る、此社會を完全にするが人生の目的てあると說くのてある。之は只個人が完全になると考へるのみてない、吾々が生きて居る全社會則ち國家を完全にするといふことが、人生の理想てあると見るのてある。次は、(三)人格實現說。此

說は社會を實現するのは、則ち自我を實現するのである。人は社會生活をして居る、其社會生活を完全にするならば、個人としての自我も亦完全に實現が出來るのである。此二者は離れたる別物ではない。人格の社會的方面を實現すれば、個人的方面が實現される。自己を完全にすると云ふことは社會を完全にすることになる。斯樣に說くのが人格實現說である。此等の說に就ても種々批評すべき所もあれば主張すべき點もあるが、時間が足らぬので曩に述べたる、「敎育的倫理學」に讓ることにする。

乍併玆に結論として述べて置かなければならない事は、此實現說と云ふ說は、上述の合理說と快樂說とを、實際は調和して居る。調和する爲に唱へたものではないが自然に調和して來る。何故ならば、人の生來有つて居る可能性を、段々實現するならば、吾々一身の上に幸福が自然に增して來るのである。譬へば吾々が快樂を得やうと思ふて食物を食ふならば、それは間違つて居る、健康を保ち生命を續けて行く爲に、適當に食物を喰へば愉快に喰れる如くに、玆に人格を實現しやうと努め往けば、求めずして相當の快樂が生じて來る。實現說は此快樂を排斥するものではない。又人格を完全にすることは、何うしても社會を離れては出來ぬことである。社會の中にあつて、自己の人格が完全になつたならば、直ちに其れが社會に影響して來る。自分だけが完全になつて、社會が影響を受けぬといふことは出來ぬのである。又人格を實現すれば功利說の主張とも一致する。人格實現說は求めずして功利說自利說とも調和して來る。又理性を發達させずして、人格を實現することは出來ぬのであるので、合理說とも調和することになつて來る。實現說が、是迄の快樂說、或は合理說と違ふ所は、人格を實現するには奮鬪努力しなければ出來ぬ、怠つて居ては出來ぬ、何處までも吾々の努力で進んで行くのである。自己に自己を實現する力はあつても、自然の儘に放棄して置いては、決して其可能性が現れて來ぬ。自分の努力に依つて、自分の發達を害するものを退けて、奮鬪するのが人格を實現する唯一の道である。怠けて居ては實現は出來ぬ。故に今日の倫理說では怠惰と云ふことを一つの重なる罪惡と見て居る。奮鬪努力に由て、初めて自分の力が現はれて來る。足は足を働かすことに依つて、丈夫になる。手は手を働かすことに依つて丈夫になる。手足も之を使はずに其能力を實現することは出來ぬ。人格實現は奮鬪して、社會に盡すことに依つて、始めて人格の力が出て來る。怠けて居つては人格の實現は出來ぬ。斯ういふ點が是迄の說とは違ふ所で、是迄の說では人は先づ修養して、自分が完全になつて然る後に社會に出て動くべきであるといふ風に說いた。先づ第一に自分の修養をしなくてはならぬ。さうして完全になつた身を以つて、然る後に社會に盡すべしと說いたものであるが。今日の倫理學はさうは考へぬ。始めより社會の爲に奮鬪努力せよと說くのである。先づ完全なる自己を修養し而して後社會に出て活動すると云ふ方法では、自分の品性を完全にすることが出來ぬ。唯自分の品性を完全にしやうと企て居つては、完全になるものではない。自己を忘れ、自己を棄てゝ始めて、本當の自我が現れて來る。自分を破らなければ、自分の力は出て來ない、他人の爲めに、社會の

爲めに奮闘努力すると云ふ事に依つて、人格が實現さるゝのである。先づ修養してから後に世間の爲めに動くと云ふやうな方法は誤つて居る。自己を修養することゝ、社會の爲めに盡すといふことゝは、全く二分する事が出來ぬ。社會國家の爲めに盡すと云ふ事が善良の修養法であると、斯う說くのである。此點は今日の說き方と昔の說とは大に違つて居る。次に今一つ現今倫理學說の違ふ所は、世界觀に對して古來三說がある。(一)は樂天說と稱して、宇宙は因果の法則に由て出來て居るので、人類が何も格別に奮闘しなくとも宜い、捨てゝ置ても最後には其目的に達するのである。何も吾々が骨折つて心配する必要はない。天則に依つて定まつて居るので、其天然の儘に任して置けば、最後には極樂になるのである。吾々が格別心配をした所が何等の效能もない。渴すれば井を鑿つて水を飲んで居れば宜い、餓たらば何か喰つて居れば夫で宜い、別段社會の爲に犧牲になるとか、奮闘するとかといふ必要はないと云ふ樂天說、(二)は厭世說。世の中は苦の世界である。どれ丈吾々が奮闘しても良くなるものではない。人慾は限りの無いもの、吾々に慾望のある間は人生は苦痛である。慾望は吾々が有限である爲に起るのである。蓋し慾望の起るのは苦痛である。故に如何に努力した所が此の世の中で苦を全廢し、人類を幸福にすることは出來るものでない。斯く人生を悲觀してしまふ說が厭世說である。次が今日の倫理學說の採用して居る、(三)改善說である、改善說とは如何なる說かと云ふと、世の中が善くなるとか善くならぬとか、人類の幸福が增進するとか增進せぬとか云ふのは、要するに努力次第である。努力したならば、改善は必ず出來るのである。打棄てゝ置けば何時までも改善は出來るものでない。人が奮闘努力せば善くするやうに天地は出來て居るのである。若し人が此努をしなかつたならば、人として生れて居る天職を完せぬのである。吾々は働く爲に世の中に出て來て居るのである。人格を實現すると云ふのは、畢竟其處にあると、斯う云ふのである。故に現在の世の中を完全なるものとは見ぬ。極めて不完全なる苦しみのある世の中であると見る。乍併何時までも斯うあるのではない、人の努力次第で完全なるものに改め得るのであると說くのである。故に此說は樂天說の一面は取つて居る。乍併樂天說の樣に呑氣には考へて居らぬ。又悲觀說も或部分は取つて居る、即ち今の世の中は不完全である、此世の中では滿足なる生存は出來ぬと見る點は悲觀說、厭世說に據つて居る。乍併之を改むることの出來ぬものと考へずして、吾々の努力で改むる事が出來ると考へる點は、悲觀說とは違つて居る。過去の說にも取るべき所は取るが、其說の誤は捨てるのである。之が今日倫理學の取つて居る世界觀人生觀(人生の將來に對する希望)である。

次に今日の倫理學と哲學との關係とに就て一言し之を明かにする必要があると思ふ。

前述の如く倫理學には三種類があるが今日倫理學として一般に研究して居るのは其の中の科學的倫理學といふ方である。哲學說に基つくものでも無ければ、又は宗敎より說くのでもない。道德現象即ち人間社會の道德人倫を材料として、それに科學的の說明を與へやうと企てゝ居るものである。此の

科學的倫理學なるものが宗教及び哲學と如何なる關係を有つかと云ふことを、爰に明かにして置く必要があらうと思ふのである。

科學と哲學と云ふものは判然區別の出來るものでない。科學の終點と、哲學の始點とは同じであつて、一方より見れば哲學の初めであるといふて宜いし、他方より見れば科學の終點と云ふて宜しいので、其の境目を明瞭には區別する事は出來ぬ。此方が科學で彼方が哲學であるとすれば其の眞中の點は何の方へ入れて宜いかゞ分らぬ。乍併大體から云ふと科學は經驗する事實、即ち社會狀態で云ふならば、吾々が見聞する人的事變。天然現象で言ふならば動物植物等の吾々が見たり觸れたりすることの出來る物的事變。精神科學で言ふならば、吾々の心の中に生起する事變で、宜いとか、惡いとか、滿足とか、不滿足とかと感ずる事、斯る事實を材料とし、それを部類分けして、倫理は倫理、宗教は宗教、美術は美術と分けて、而して其に一々說明を與へやうと云ふのが科學である。然らば其の科學なるものは何が根柢になつて居るかと云へば、則ち經驗特に自己の經驗する實驗が基本になつて居る。空想では實驗でない。所が科學が段々進むと、經驗では滿足に說明の出來ぬことが生じて來る。則ち其事實が斯うあるので、多分斯う言ふ原因があるので斯くなるのであらうと考へるより外に道が無くなつて來る。斯樣なるのは、今一つ深き所に多分斯くの如き理由が存するのであらうと說明するのである。斯く推察して說明するのは最早や哲學の領分へ這入つて居るのである。科學では「斯うであらう」ではいかぬ「斯くある」でなければならぬ。それより先へ行けば已に哲學の領分になる。倫理學でも段々深く研究して行くと、どうしても「斯うであらう」と云ふ所へ這入つて來る。前述の如くに人性には道德的可能性がある。道德的可能性は事實であるけれども、其の可能性は何れより來たかと云ふ點になると、「それは何れより來のであらう」と云ふ推察に達しなければならぬ。併しさうなるともう哲學の範圍である。今日の倫理學は哲學を排斥するのではない。最後になれば哲學の領分に這入つてくる。併し哲學を以つて出立はせぬ。古風の倫理學は哲學の原理より出立する、事實より說明するのでなく、哲學の原理より說明する。それが科學的倫理學では逆になつて居る。何故今日は科學的倫理學を取つて哲學的倫理學を取らぬかと云ふと、其れは必ずしも哲學的倫理が間違つて居ると考へる爲めではない。科學的倫理を取つて哲學的倫理を取らぬのは、今日は科學が流行して居るので、哲學的倫理では時勢に合はぬ。今日の學問は皆一定の研究法に從ひ、其の一定の研究法に依つて、何事でも其の形成に合はして研究する。例へば動物を研究するにしても、植物を研究するにしても、社會學を研究するにしても、皆科學的研究法と云ふものが其準則になつて、其科學的研究法に當嵌めて考へる。倫理に於ても其の形式を取つて行かぬと時勢に伴はぬ。他のものと並び進んで行く必要があるので、科學的研究法が倫理上にも採用されて居るのである。乍併學問が深き根本的問題に達すると到底科學的丈では足らぬ。今一歩進まねばならぬやうになつてくる。コントが言つた樣に宗教的より哲學的、哲

學的より科學的になつて來るのである。然し哲學的倫理學が間違つて居るとか、又宗教的倫理學は少しも眞理を含まぬといふのではない。今日の倫理學が研究上に科學的方法を用ゆるのは、恰度人が白い着物を着て居る時には、白い着物を着るのが當り前であるから、それと同じ理て、科學的倫理が今日行はれて居るのは、哲學的倫理を排斥するのでも無ければ宗教的倫理を排斥するのでもない。科學的倫理も最後まで押詰めると、是非共哲學的倫理にならなければならぬ必要に迫られて來るのである。然らば哲學とは何を言ふのかと云ふと、今日の哲學は科學の根本原理の研究である。科學は總て或原理を假定しての研究である。之を假定しなければ其の研究が出來ぬのである。一例を言へば物理學を研究するには、物質の存在を假定して居る。物質が斯う云ふ風に見える、あゝ云ふ風に見えると云ふことを假定して研究して居る。果して其物質と云ふものが正しくそうであるかと云ふことに就ては、迚も物理學では研究の出來る問題でない。物があると云ふ事を假定して物理學は研究を始めて居るのであるが、其假定が確實であるかないかと云ふことを研究するのは、哲學の問題である。之に定義を下すならば『哲學は科學の根本原理の綜合統一である』と見ても宜い。さうすると倫理學も科學であるので、最後には哲學の範圍に這入る。哲學の一方面にならなければならぬのである。

以上今日の倫理學と哲學との關係に就て、其大體を述べたのであるが、倫理學の研究は、科學として制限しても却々範圍が廣いのである。倫理學の研究問題は、前述の三問題即ち良心論、理想論、實行論の外に、此等諸問題を解決する準備として二個の重要なる事象を研究する。即ち、(一)は倫理學史の研究であつて倫理學說の變遷の研究である。古來倫理に關する思想が、何う云ふ風に變つて來て居るかと云ふ事を知るのは一つの大切なる研究の補助になつて居る。(二)は道德思想の變遷であつて、時代に依つて善と云ひ惡と云ふものが違つて居る。或時代に善であつたものが、或る時代には惡になつて居る。或る時代には惡であつたものが、或る時代には善であると見られる。野蠻人は今日でも吾々と同じ樣なる道德觀念を持つて居らぬ。吾々が善と思ふことを、野蠻人は善と思つて居らぬ。斯樣に文明の程度に依つて、道德觀念が發達して行く、此等を今日では重要事として多くの學者が研究して居る。即ち一は倫理學史の研究で、他は道德觀念の發達史である。それが前述の三問題の外に重なる研究題目になつて居る。乍併其れでも未だ第三の實行論には、滿足なる解決が與へられぬ。それて之を滿足に解決する爲めに、今日の倫理學者は經濟問題、政治問題、社會問題等を大いに研究いたして居るのである。其上に倫理學は最後には哲學に這入つて行くので、倫理學者は哲學も研究しなければならぬ。斯く今日の倫理學者の研究範圍は極めて廣いのである。夫等のことに就ては別段に詳論する必要はないから是丈けに止めて、次には現今の倫理學上の實際問題に就て述ぶる事とする。

第二回

第一項　經濟と道德

前回論じたる人格實現說に基づき、第一に經濟と道德との關係に就て、今後注意すべき事項を述べて見樣と思ふ。

世界何れの國でも今日一般の人々が感じて居る事は、生活難即ち暮しが難かしくなると云ふことである。日本では未だそれ程に感じて居らぬが是は段々激しくなつて來ると思ふ。其聲は今日でも餘程耳にするが、今後は一層强く感ずる樣になつて來るであらうと思ふ。然らば何故斯う云ふ風になつて來るか、富が足らぬが爲か、又は人口が激增する爲に衣食住に必要なる物品が供給不足になるが爲かと云ふに、必しもそうでない。人口は勿論增加する。近來醫術進步の爲に死亡率が減少するので人口は益々增殖するばかりである。又衣食住に必要なる物を作り出す新方法を漸次案出せらるゝので、野蠻時代又は其後の時代に比べて、人々に配當する食物の分量は決して減つて居らぬ。人口は增して居るが、從つて食物も增して居る。寧ろ一人の割當は殖えて居ると見ても宜い位であらう。然らば何故生活難が起るかと云ふと、是には二箇の重なる原因がある。

(一)は生活程度が高まる事。今日の生活程度は往時に比較して餘程高まつて居る。從つて費用が嵩

んで來る、贅澤に流れる、奢侈を競ふて來るに至るからである。生活の必要なものを得て、それで滿足して居れば、生活難と云ふ慨きは起こらぬのである。

(二)貧富の懸隔が甚しくなる事。近來貧富の懸隔が段々甚だしくなつて來た。或者は非常に巨額の富を有つて居るが、或者は極めて貧困である。富が都合よく全般の人々に分配されて居らぬ結果、多くの人が生活難を感ずるのである。何故そう云ふ風に富の分配が不平均になるかと云ふと、それは實業發達の結果である。或人は或特別の商業とか工業とかに從事して其結果非常に多くの富を獲得するが、或人はその分配には與らぬ。從つて或人は一向生活難を感ぜぬが、其商業工業發達の爲に直接利益を得ざる多數の人々は、生活難を感ずるのである。それで是は如何にすべきか、自然に任せて放棄して置くべきか、放棄して置けば益々甚だしくなつて來るに相違ない。然らば如何にすれば宜いかと云ふ問題になつて來るが、それには經濟の方面よりも、種々救濟の方法を考へて居る。乍併經濟だけではどうしても此困難を救ふ事が出來ぬと思ふ。例へば今日或人の主張して居る社會主義、或は共產主義と云ふやうなものは、經濟の方面より此困難を救ふとする一つの考であるが。若し今日の此生活難が、食物が足らぬと云ふ所のみより來て居るならば、或は之れに依て救へるかも知れぬ、乍併此問題の原因は食物の缺乏のみでなく、人間の生活程度が高まり、奢侈に流れて身分不相應なる生活をしやうとする。或人が非常に贅澤なる生活をするのを見て、自分の身分も考へず、能力も考へずに、其

富んだ人と同樣の生活をしたいと云ふ希望より來て居るのである。食物の缺乏よりは、寧ろ欲望が強くなつたと云ふことより起つて來て居るのである。故にどうしても宗教又は倫理上より之を救濟することを努めなければならぬ。經濟の方面のみではどうしても救ふ事は出來ぬ。即ち人は相當の富を得て、相當に快樂なる生活で滿足して人の本分を完ふすべきである。其處に精神が落付かなければ、どれだけ多くの富を分配した所が、それで滿足をして生活する事にはならぬのであらうと思ふ。

茲に於て宗教家、道德家、教育家が、如何にすれば此生活難を救ふことが出來るかと云ふ事を考へて見なければならぬ必要が起つて來るのである。今日斯う云ふ聲が世間に段々と高くなつて來たのは一方より見れば、教育に從事して居るもの、又は宗教を以つて世を導いて居る所の者の無能力を示して居るのである。斯く考へると實に耻しき次第である。吾々が今少し力があつて、彼等の精神に慰安を與へることが出來たならば、斯う云ふ聲は高くなるべきものではなからう。吾々が一般の人に慰安を與へ、身分相當の生活をして、足ることを知る精神を養ふことが出來なかつた爲に、這般の聲が起つて來るのである。之は實に教育家、宗教家の責任問題である。斯く考へると我々は誠に耻しく感ずる次第である。

乍併其事は別として、然らば是より教育家とか、宗教家とかゞ、社會一般の爲めに如何なる事に注意して行けば宜いか、と云ふことが問題になるのであるが、第一に教育家及び精神界を指導して行く宗教家は、人は皆各自に自ら働いて自から生活しなければならぬものである。一定の職業を有して忠實其業に從事しなければ、善良なる國民ではないと云ふ觀念を強く明にする事が、最も必要であると予は信ずるのである。即ち獨立自營。此獨立自營と云ふ事は、文明人には缺くべからざる事である。他人の產出したる物を食つて、自分では何等社會の爲に貢獻する事なくして暮して居ると云ふことは、人として頗る愧づべき事である。是を一家に譬へて云ふならば居候即ち社會の食客である。社會に居食ひして居るのである。如此事は人として愧づべきことであると云ふ精神を、何處までも今後の人には十分自覺せしめなければならぬと思ふ。昔には斯樣な考へはなかつた。一般下層の者は勞働して人の食するものを作り、或は人の著るものを作るのが天職である。上流の者はさう云ふことはしなくとも宜しいと云ふ如き考へが、或時代には盛んであつた。故に今でも何か一定の職業があつて、それに熱心に從事するのは、卑しき事の樣に考へて居る人が尙殘つて居る。從つて青年などにしても働くと云ふ事は高尙なる人のする事でないと云ふやうなる考へが、日本には餘程殘つて居る樣である。此思想は一日も早く取り去らなければならぬ。學校に於て教へるばかりでなく、學校を卒業した後にも、矢張り其精神を教育宗教其他の方法で養ふて行かねばならぬと思ふ。それは啻に社會を利するばかりでなく、約まる所己を利するのである。前に述べたる今日の倫理學說に於て人生の目的と云はれて居る、人格實現と云ふことは、自分が努力し、自分で働き、自分で一生懸命になつて、自分の業務に盡

すのが、人格を實現することになる。故に獨立自營は啻に社會を益するばかりでなく、同時に一身の人格を高尚にする唯一の方法である。今後は遊んで居たり惰けて居たりしては、どうしても高尚なる人格者にはなれないと云ふ事を以て敎ゆべきである。

次に文明の生活には、野蠻の生活と比較して、分業と云ふことが益々殖えて來る。種々違つた仕事をする、同じ勞働者であつても勞働の種類が違ふ。此分業と云ふことは、經濟の上では大切の事になつて居るのであるが、分業で世の中が進むかと云ふと、分業をすると人は自分の能力を一層完全に伸ばし得る。一人が多くの事に從事して居つたでは、何事も自分の得手とする所がなくなる、熟練すると云ふことがない。或る一事に限つて其れに專心從事するならば、それに熟練して普通人よりも二倍三倍の事が出來る樣になる。さう云ふ結果は社會全體が利益を受けるやうになる。又文明の生活は野蠻の生活と比較して、需要が多い、必要品が多い。野蠻の生活になる程簡單であつて、必要品が少い。文明人になるに從つて必要品が多くなる。其多くの必要品を得るには、どうしても自分で或る一業務に從事して、其事に熟達して十分の收入を得る道がなければ、多くの必要品を得ることは出來ぬ。故にどうしても文明の世の中に於ては、分業が必要になる。而して分業をしたならば、其自分の專門の事には、各々十分熱心に從事するやうに、奬勵して行かなければならぬのである。所が今日の社會にては、成べく自分で働かずに、自分の收入を殖やしたいと云ふ考の人が多くあるので、其結果一般の實業上に弊害が生じて來るのである。其事は後に詳說するが、斯う云ふ風に考へて來ると、此處に一大難問題（殊に地方に於て人民を指導する上に就て、困難なる問題）がある。それは何かと云ふと、凡て分業をするには、各々の人が自分の天性に最も適したる事をしなければならぬ。或人は勞働に健康が適して居る、或人は精神能力に富んで居るので學問が能く出來るので學者になる、或人は又事務の才に長じて居るので實務家になる、或人は官吏になる、こう云ふ樣に各々これ自身の長所に向つて分業は定まつて行かなければならぬ。分業が盛んになると、先祖代々の職業を爲るに恰度適したる人が出て來なくなる。親の家業が農業であつたからとて、其家に生れて來るものは皆農業に從事するのが最も適して居る人ばかりに限られて居らぬ。中には大政治家になれる人も、大學者になれる人も出て來る。斯の如き傾向が今日大分世間に現れて來て居るが、そう云ふ場合に吾々の困難を感ずることは、親は其子に對して先祖の家業を繼がせたいと思ふが、青年は之と反對にそれを好まぬ。斯る場合に相談を受けたる人々は、親の言葉に背いて宜いと云ふことは、出來ないい。それかと云つて國家に有益なる人材となり得る人を、親の家業を續けて、田舍で働いて居れと云ふのは、國家の上より云つても、非常な損害と云はねばならぬ。斯る場合に親の肩を持つ方が宜いか、青年の肩を持つ方が宜いかと云ふことは、敎育家としても宗敎家としても實に解決に困る問題であらうと思ふ。予の意見としては、斯る特別の天才と云ふべき者が出て來たならば、親を能く說き附けて、

お前の小供は非常に立派なる人であつて、國家の爲めに有益なる人になれると思ふから、都合が許すならば何か好む所をやらして見たら宜からうと言はなければならぬと思ふ。昔の流儀で云ふならば、矢張り親の言ふ所に從つて、家業を繼いで行けと云ふことを、何處までも言はなければならぬのであるが。今日は世が變遷せる爲に、どうもそればかりではいかぬ。特別の場合があると考へる。乍併親の命に背く事は善くない、親にその譯を能く述べて納得させ、而して其者に天才を發揮する機會を作つて遣るやうにすることは必要なる事ではなからうかと思ふ。尤も今日は其反對の傾向を示して居る。それはどう云ふ意かと云へば、天才でも何でもない者が無闇に學問をしたがつて居る、都會などへ出て來れば、墮落して不良なる人物になるであらうと思はれる青年が、都會へ出て學問をしたいと云ふ希望を起し、親の希望に背くやうなる事をして居るものが尠くない。斯る場合には親の云ふ所を青年に說き聽かせ、必しも都會へ出て學問をせずとも、國家の爲めに十分盡すことが出來るし、又そう云ふ事よりも君には斯うした方が却つて成功の途であらうと云ふ樣に能く話して、滿足して故鄕に止つて親の業を繼ぐやうに、諭さなければならぬ場合もある。敎育を受ける能力を有つて居らぬものが、無謀に志を立てゝ都會に出ると云ふことは奬勵すべき事でないと思ふ。一種特別なる天才者は別であるが、一般普通の者は、自分の生れた所の家庭に於て、家庭の人々が從事してゐる所の業務に從事するのが最も利益が多い。農家に生れたならば農事に從事するのが宜い。それが商業をして見やうと云ふ考を起すと却つて失敗する。又親が商業家であるのに、自分で學者になつて見やうと云ふ樣なことを考へる者には、成功する者が少い。乍併工業と云ふものが發達した結果、何れの國に於ても青年が皆都會に集まり、工場のある所に出て行つて、どうも自分の生れた所に一生涯暮すことを好まぬ。其結果農村が何れの國でも段々疲弊してしまふ傾きを生じて居る。

日本でも此の傾向は漸次甚しくなるであらう。青年の此の傾向の爲めに、今日西洋各國に於ても工業の發達した所では、成べく農家に生れた者は農家に、商家に生れたものは商家に止まるやうに奬勵して居る。吾國も今後は其方針を採らなければならぬであらうと思ふ。斯る困難の場合には、此問題の解決を、親と小供だけに任して置いたならば、どうしても滿足なる解決は出來ぬ。敎師とか或は宗敎家とか云ふ、親の信用のある人、又子供も信用を置いて居る人が仲に這入つて、其問題を解決してやるのが最良の方法であると考へる。

次に文明の生活は他の生活と違つて、共同して進んで行かなければならぬ。分業の結果は、甲の人のした事に乙の人が其上に仕事を附加へるのである。甲と乙と丙とが一緒になつて進んで行かなければ何事も出來ぬ。昔は一人で何も彼もしてしまふ方法であつたが、今日はさうでなくして、各々の人が或事の一部分をして、其殘りは他の人がすることになつて居る。分業に依つて共同して行かなければならぬ事が增して來るのであるので、自分の業務を怠るのは、自分が唯其働きの結果を得ぬと云ふ

のみでなくして、一人の人が不正直なる事をしたり、又は惰けると、それに聯關して居る他の總ての人に迄迷惑が起つて來る。不都合が生じて來るのである。故に今後の人は何の業務に從事しても、自分一人で仕て居るのではない、自分のする事が總て外の人々に直ちに利害の關係を及ぼして來ると云ふ考を深くして、總ての事務に從事するやうに導かなければならぬ。是迄は自分の仕事は自分だけの仕事で、世の中即ち社會とは關係がないやうに考へて居る者が多かつたのであるが、これは確に間違と云はねばならぬ。世の中は丁度鎖が繋がつて居るやうに聯關して居るのである。或處に缺目があれば、直に全體の連絡が破れる結果になるのである。吾々は各自業務を、唯自分の爲めばかりと思はず、社會全體の爲めと思ふて忠實に從事しなければならぬと云ふ精神を、今後は一層青年の頭に強く敎へ込まなければならぬのである。

次に文明の生活は人々が唯其の手や足で仕事をするのみでない。何れの業務にしても、其業務を營む爲めには相當の機械即ち道具と云ふものの使用を要する。之に相當の資本を掛けなければ十分に其仕事をすることは出來ぬ。例へば私が自分の宅より此處まで講演をする爲めに來るのにも歩いて來たならば、どうしても半日費さねばならぬ。然るに電車と云ふものを利用すれば一時間で此處に來ることが出來る。其代りに電車賃と云ふものが要るが如くに、總ての事がその通りである。人が十分活動する爲には樣々の物を使はなければならぬ。自力のみで何も彼もやつて行かうとすれば、非常に時間と勞力とを餘計に費さねばならぬ。それで今後の人は十分に活動するには、相當の資本を有つて居らねばならぬ。資本が無ければ活動が出來ぬ事になる。然らば其資本と云ふものは何であるかと云ふと、結局勤勉と節儉との結果である。勤勉と節儉しないならば、資本はどうしても出て來ぬ。故に今後の人は、此勤勉と節儉とに依つて自分が世の中に活動する資本を造らなければならぬ。それが無いならば、人としての活動が出來ぬ。資本其もの丈を人は求むるのでない、金を唯握つて死ぬと云ふのが人生の目的ではない。併し金が無ければ人は活動が出來ぬ。其活動を助ける爲には十分に働き、無益の費用を省いて有益の事に使ふ事を倫理上奬勵しなければならぬ。斯ゝる事は昔は倫理上餘り言はれなかつたのであるが、現今の倫理では、物を無益に費す事、何等の利益も生ぜざるに費用を使ふとか、自分の能力を無益に使ふとか云ふとは、一つの罪惡と見られて居る。昔の人は一向さう云ふことは罪惡とは見なかつたのであるが、現今の倫理に於ては、濫費は一つの罪惡と見る樣になつて來たのである。それで啻に自分が自分の持つて居る物を、無益に費さざる事を考へるばかりでなく、他の人の所有にも重きを置いて、之を尊重することを敎へなければならぬ。他人のものは其人が勤勉と節儉に依つて溜めたものである。吾々が其ものを猥りに費すことのない樣に注意しなければならぬ。勿論之は國の法律でも禁じてあるから、人の物を盜んで宜いと考へてゐるものはないであらうと思ふが。倫理上より今後注意を要する事は何であるかと云ふに、人に最も大切なるものは時間である。人の時間を無闇

に自分の便宜の爲に費す事は、道德上一の罪惡である。例へば用事も無いのに長く坐り込んで、人の貴重なる時間を無益に費させることは、恰も人の財產を費すのと同樣である。財產を盜まれたのは、或る方法に依つて取返しの出來ぬ事も無いが、乍併時間は一度過ぎ去つたならば、最早再び取返すことは出來ぬ。人の生命には五十年なり、八十年なりの限りがある。故に其人の一日なり半日なりを無益に費さしめたならば、それは其人に取つて一生涯の損失である。故に自分の時間を無益に費すばかりでなく、人に時間をも無益に費さしめることを一向構はぬ人が世の中に澤山あるが、是は今後の倫理道德にては、非常に注意しなければならぬ事である。殊に日本の社會では、人の貴重なる時間を無益に費すことを一向注意せず、極めて平氣である。例へば五時に來てくれと云ふので、五時に行くと、六時迄無益に待つ、或る場合には、百人二百人の人が、或一人の來るのを待つ爲めに、全體に時間を無益に費さしめる。一時間と云へば何でもない樣だが、一時間二百人三百人の人が無益に費すとすれば、茲に二百時間三百時間がまるで潰れてしまつたことになる。其二百時間三百時間を、善用したならば、如何に有益なる仕事が出來る時間である事を考へなければならぬのである。それを或一人が時間を輕視し一時間遲れて、五時に來るのが六時になつた爲に、頗る大なる損害を全體に受けさして居るけれども、それは別段人の物を費したやうな罪惡とは、現今の人は思ふて居らぬ。葬式などに貴重なる時間を浪費すること最も甚しい。次に注意すべきは、人の能力と云ふものには限りがあり、吾々の腦髓の働く力には限りがある。それで自分のした事が不注意であつたが爲めに、行き違ひ誤解を生じて人に迷惑を掛ける、或は夫が爲に大に心配させる。多忙なる多くの人が、其の爲に非常に心配をして、如何にせば宜しからうかと頗る考へさせる如き事をするのは、人の能力を猥りに費すのである。斯樣なる事は矢張り財產を費すと同じやうに、道德上批難すべき事である。現今では未だ自己の不注意の爲めに人に迷惑を掛けたり、心配を掛けたりすることは、恰も人の物を費す如くに罪惡であると感じて居る人は少いけれども、輓近の倫理上より云ふと、他の罪惡と同樣に之を避くる事に注意すべき事である。

次に世の中が段々分業になつて進んで行く自然の結果として、競爭と云ふことが起つて來る。元來競爭と云ふことは、事物の進步上一つの刺戟を與へて有益である。競爭が無ければ人は進步せぬ。聖人君子であるならば、競爭者が無くとも、其努力を怠らぬであらうけれども、普通一般の人は、何か競爭するものがなければ惰けるのが通常である。故に競爭と云ふことは進步の要件になつて居る。今後は如何なる業務に從事するにしても、競爭が必要であると云はねばならぬ。乍併此競爭が、場合に依つては正當の方法に由る競爭にあらずして、不正の方法で競爭するやうになつて來る。甚だしきに至つては、其競爭に一通りの競爭では勝を占めることが出來ぬ爲に、種々工夫を凝して一時に成功をしやうと企てるものが澤山生じて來る。それは云ふまでもない投機とか賭博とか云ふ如きことで、勞

せずして成功しやうと計略をする樣になる。此度歐洲戰亂の爲めに、日本に於ても、俗に所謂成金なる者が大分出來た。俄に財產を殖やした人がある。其等の人々が幸に善い人であるならば、有益なる事業に其財產を投ずるであらうが、若し平凡な人達であるならば、その金錢を社會の風儀を紊す如き事、自分の健康を害する如き事、總て有害なる事に費すやうになる。加之最も可恐は、多くの人々に惡例を示す事になる。此の一時に財產を增した所謂成金者の勢力と云ふものが、今日では世間全體の上に大なる力を以つて働いて居る。則ち世の中の事は正直に徐々やつて居ては詰らぬ、何でも一攫千金的にやらなければ迚も金が儲かつたり、成功など出來るものでないと云ふやうなる考が段々弘まつて、著實勤勉の美風は、それが爲に全く破られてしまう。是は今後最も注意して豫防すべき點である。それが爲に日本の將來が大なる迷惑に陷るが如き虞れが無いではないと考へられる。

又此競爭と云ふことの爲に生じて來る一つの弊害は、粗製濫造である。成丈け物貨を安く製造する樣に工夫する。於之乎物貨が粗末に拵へられ、而も之を高く賣らうとすることである。文明國で凡そ日本位粗製濫造をして居る國はないであらう。日本の多くの生產物には、眞面目に造つた物はないと言はるゝ位に、飴細工の如きものが多い。少しの間使へば、其物が使へなくなつて仕舞樣なる、粗末な造り方で物を拵へて賣つて居る。國內でそれを賣つて居る許りでない、今度の戰爭の爲めに多くの註文が來る、其の必迫に乘じて粗製濫造をして、中には實に言語道斷の物を送つて居ると云ふことを耳にして居る。或る國民が國を賭し命を懸けて戰爭をして居る時に際して、さう云ふ事をするのは、實に何と云つて宜いか、人道に背くの甚しきものではないか。それは恰も病氣に罹つて居るものを、その苦みを利用して利益を得るのと同樣である。戰爭して困つて居る時に、此方よりさう云ふ役に立たぬものを送つて、向ふの人を苦しめると云ふことは、國民として實に耻かしき振舞ではあるまいか。

加之過般南洋を視察に行つた人があるが、其人が南洋で日本製の品として賣つて居る物を皆買つて來たものを見た事がある。疑もなく日本で拵へた物である。それは實に酷しいものばかりで、日本國內では、迚も賣れる見込のない物、又如何なる田舍でも買ふ人も無い樣な、粗末な物を、南洋へ賣つて居る。さう云ふ譯であるから、一度で懲りて二度とは買はぬ。斯る粗製濫造を今日は實際にやつて居るのである。是は何より來るかと云ふと、則ち一時に金を儲けやうと云ふ不正の競爭より出て來て居る。斯う云ふことでは、迚も將來に國富の發達は難かしい。

次にいま一つ物貨の製造上今日では餘儀ないので默つて居るが、他日必ず一大問題となつて來るものがある。此は宗教家、教育家は十分に注意しなければならぬ事である即ち物貨を製造するに成る可く低廉にして而も多く利益を得やうと云ふ目的で普通の勞働者を使はず、給料が安くて使へる子供や女子を使ふ。其の女子子供を使用する樣を見ると、實に慘酷なる使ひ方をして居る、時間も仲々長く使ふ。夫が爲に彼等は、宅に歸つて何もする事が出來ぬ位に疲れてしまふ。其の爲めに普通の學校教

育も受けることが出來ず、志あるものにして辛うじて夜學か何かに通つて居るが、從つて體格が傷けられ、其人の將來の發展は殆んど見込がない。斯樣な取り扱ひを受けたる兒童は、完全なる國民に發達することは難かしい。又女を非常な薄給で使役するので、身體も弱つてくる。將來の國民は、皆弱い小供になる。女の健康を害することは、啻に女其者を虐待すると云ふばかりでなく、女が產む所の小供が直接其影響を受ける損失は、實に大なるものである。中には隨分慘酷なる事をして使つて居るものがある。而して其製造所を見ると、衞生上の不注意と、設備上の不完全とは、驚くべき狀態にあるものがある。又中には危險なる仕事を平氣でさせて居る處もある。或工場では、殆と每週一人は誰かゞ怪我せぬことはないと云ふ如き危險千萬な事をさせて居る。斯る危險な事をせずとも、少し費用を掛けて設備をすれば、其危險を除き得るのに、費用を惜んで、設備を怠る爲に、或は片腕無くなつたとか、足がなくなつたとか云ふ樣なる生命に危險を生ずるのである。斯う云ふ事は今日では未だ大都會のみで、地方などには無いのでありませうが、段々と地方でも工業が發達して來ると、斯る狀態を演出する。斯樣な悲慘な事が生じて來るのに、宗教家などが何等心配なしに漫然と看過して、唯死後極樂とか、天國とかに行けると云ふ話しのみで、此世の中に於て、實際人が地獄に墮ちて居るのを見て居るならば、教育家、宗教家の天職を完うしたとは言はれまいと思ふ。

次に又、今後段々經濟が發展して來ると、今一つ慘酷なる事が起つて來る、まだ日本では餘り甚しくなつて居らぬが、現に歐米などでは資本の多くあるものが資本少きものを壓倒してしまふと云ふ事である。例ば此處に二軒の靴商があるとするに、甲の方は多く資本を有つて居るが、乙の方は僅かの資本しか有つて居らぬ。さうすると多く資本を有つて居る方では、僅かばかりの資本を有つて居る靴商が邪魔になるので、それを潰してしまはうとする。其時には迚も小資本の方が競爭の出來ぬ如き値段で、自分の物を賣る、さうすると其小店では物が賣れぬ。皆安い方へ買に行く。そこでどうしても小店は閉店するより外に途がなくなる。その弱つた時に附け込んで、お前の店を買つてやらうと云ふて、自分の方へ取つてしまふ。隨分大なる損をさせて、小店を潰してしまつて自分の一手專賣になれば今度は値段を非常に上げて、安く賣つて損して居る分を取返す。斯樣になつて、資本の足らぬものは、資本の澤山あるものに壓倒されてしまふ結果になる。東京では其傾向が大分最早や見へる。さうすると倒された者は、一生涯倒した者に對して怨を忘れることが出來ぬ。啻に其一個人が苦しむばかりでない、家內一同が苦しむのである。又公衆も其れが爲めに損害を蒙る。其品を高く買はなければならぬ事になる、斯の如き事は此戰亂以後には段々多く現はれて來るであらうと思ふ。

然らば是等に對して如何にすれば宜いかと云ふのが、爰に起つて來る問題である。それには種々方法があるであらうが、第一に吾人のしなければならぬ事。是は殊に宗教に關係のある事であるが、人と云ふものは、唯だ金を儲ける爲めに此の世に生存して居るのではない。唯だ財產を作ることが成功

てはないと。人生成功の眞意義を明かにして、其の目的に到達せんが爲めに人道を實行するにあらざれば、如何に多くの富を積んでも、何等の價値を認むる事が出來ぬと云ふことを、兒童を初め青年に十分敎へ込むことが、最も大事であらうと思ふ。今日は成功と云ふことと、金を作ると云ふことが同意義になつて居るが、此は大なる誤謬である。是の點が今日充分に理解されて居らぬ。それから又前述の如き方法で、一時に財產を作つた所が、其人が決して永久に繁昌するものではない。一時は成功しても、必ず復失敗するに相違ない。他の人を慘酷な目に合せて搾へた富は、永久に其人に殘るものではない。世界は因果應報で廻つて居る。成功は唯自分の力のみで來たものでない。凡そ成功は周圍の社會より種々なる直接關係の援助を受け來るものであると云ふことを、明かに會得するやうに說き誨へなければならぬ。例を以て云ふならば吾人が如何なる事をして成功するにも、其成功に健康が要件である。健康は自力が作つた物でない。第一に親の恩がある。又危險なる疾病を豫防して、健康を保持して居るのは社會の恩惠である、吾々な壯健であると云ふことは、我が力のみで全く出來て居るものでない、社會が好く自分を保護し呉れたに依る。若し社會の保護がなかつたならば、如何に自己が注意しても無効である。又吾人が成功するのは、自分がそれだけの力があり、先見の明があつて總ての事を考へた爲めでもない。さう云ふ廻り合せで、機會を得て成功した迄であつて決して自分の力許りで出來たのでない。少しも誇るべきことでない。如何なることに成功しても、それは第一親の恩、第二社會の恩、第三國家の恩、さう云ふ總てのものが吾人の上に保護を加へて、始めて成功と云ふ結果が出來たのであると云ふ自覺を、現時社會の多くの人々に明瞭に持たせたいのである。故に成功と云ふことは、啻に自己が誇りとする許でなく、直に之を以つて親の爲め、社會の爲、國家の爲に盡さなければならぬので、其得たる實利を社會國家に有益な事業に貢獻しなければならぬと云ふ思想を、敎育及び宗敎の側より說かねばならぬ。斯の如くせば段々今後の劇甚なる競爭、不正な行爲を幾分制限することが出來るであらうと思ふ。斯くしたならば、單に社會國家が平和を保つばかりでなく、前述の生活難と云ふ聲も段々低くなり、少くとも今後は今日よりも甚だしくなる事がないであらうかと思ふ。現代の如くに社會に宗敎の權威と云ふものが衰へて居つては、將來の日本に於ても、西洋に於ける前述の慘禍と同じく、一大恐慌が起つて來るに相違ない。故に今より此方面に深く注意し、之が豫防法を講ずるならば、日本の社會は、彼の恐るべき地獄の狀態に陷らぬ前に、之を救濟することが出來るであらうと、予は信ずるのであるが、今日實際布敎壇に立たるゝ方は、此經濟の方面にも注意せられて、宗敎は啻に死後の往生安樂を敎ゆるのみではなく、此地上に於ても人が幸福に此世を送つて行くやうに、宗敎の强き力を以つて導いて行かなければならぬと云ふ決心で、國家の爲に盡力あらむ事を切望する次第である。

附言經濟と道德との問題に就ては書肆文陽堂より發行せる拙著「經濟と道德」(定價五六十錢)中に詳

細に此等の點を論じて置きました、多少參考になる事もあらうと思ひます。

第二項　家族制度の變動

現代世界の道德上の一大問題であるのは、家族制度の變動である。今日は家族制度の組織を幾分變更しなければならぬ狀況に迫つて來て居るのである。從來の如き家族制度では、どうしても今後は進んで行く事が出來ぬ狀態になつて居る。其一つの證據は、何れの國に於ても離婚の數が、年々非常に增す傾きを示して居る。此點には統計上日本が世界の第一位を占めて居る。文明國には日本位離婚の多い國はない。乍併日本ばかりでない、今日は世界何れでも增す傾向を有つて居る。然らば何が其の原因であるかと云ふと、(一)は經濟組織の變更の爲めである。經濟組織の變更と云ふのは、何であるかと云ふと、昔は何れの國でも女子は大概夫に養はれて居るものであつて、自分で職業をして自分で食ふと云ふことはしなかつた。所が今日は工業が發達したる結果、女子が自分で職業をして自分で生活が出來る樣になつた。給料は比較的に安いのであるけれども、兎に角どうか斯うか食つて行く丈のことが出來る。又男子が爲なければならぬ所の仕事が殖えた爲に、女子が澤山教育の職務に廻る。所謂女教員と云ふものが增加した。又或る意味で言ふと、或程度の教育に於ては、男子よりも女子の方が成功するのである。男子が教へるよりも、女子が教へた方が結果が宜い事がある。斯くの如き事理に由て漸次女教員が殖え、獨立をして生活し得るので、如何に虐待されても夫に從つて、家に留ると云ふ傾が無くなつて來た、若し虐待せらるゝならば直に出て行つて、獨立して自分で働いて食ふと云ふ樣になつた、此れが離婚增加の原因となつて來たのである。(二)に離婚增加の原因は結婚と云ふものが全く利己的になり、其眞の目的を誤解する所より起つて居る。それはどう云ふ譯かと云ふと、結婚は男女が互に自分の快樂を增加する道なりと考へて、互に利己心を以つて結婚をする。故に家の名義とか、國の爲めとか、先祖の名譽とか云ふやうな事は一向構はぬ。それで家柄などはどうでも宜い、成べく財產を餘計有つて居るもの、成たけ裕福な者と結婚する方が好いと云ふやうな考になつて來たので、自然不調和の家庭が多く出來る爲に離婚が殖える、(三)には教育が普及した爲に、人の個性と云ふものが發達して來た、個性が發達したと云ふのは、各個人が自己の考を有つて居るやうになつて來た。女子でも段々と自身の考へが明確になつて來た、品性が發達して來た爲に、男子が無闇に壓迫を加へ、我慢をさせて家庭に置くと云ふ譯には行かなくなつた。昔は女子は、餘り教育をせぬので、何れ家庭に行くとしても、其家庭に適應するやうに品性を造つたのであるが。今日の如く普通教育を與へて當り前の人にすると、品性が幾分固まつてしまふもので或る家庭に行つてはどうしても順應調和が出來ぬ結果になる。又離婚增加の一原因は、(四)に親子同棲問題である。日本では古來の習慣上親子が同居するのであるが、老人の思想と若い者の思想とはどうしても一致し兼ねる點が多い。そこ

で夫婦の當人同志は互に調和して行けても、兩親の氣に入らぬと云ふ理由の下に、離婚させることが近來多くなつた。西洋では、親子は大抵別居する制であるので此の弊がないけれども、日本に離婚の數が非常に多いのは、之が其一原因になつて居るのである。日本では嫁と云ふものは夫の氣に入るばかりではなく、親の氣にも入らなければならぬ。併し今後はどうもそれは段々難かしくなつて來ると思ふ。さればとて今俄に親子別居する事を敎ゆる譯には行かぬけれ共、將來は若夫婦と年寄夫婦とは、自然別居する事になると思ふ。乍併さうせずして調和して行けるならば、洵に結構なことである。勿論別居しても親に孝行をせずともよいと云ふのではない、同居して居るよりも別居した方が却て克く親に孝養を盡せるかも知れぬと思ふ。又今一つ離婚增加の原因、(五)に奢侈の增長を加へなければならぬ。人は誰も樂な生活をしやう、威張つて派手な生活をしやうと希望する。それが出來ぬと離婚する傾が近來增して來た。此れは殆んど滑稽笑話のやうであるが、或人が嫁を貰つた所が、二週間程して嫁が歸つてしまつた。何故歸つたかと聽くと、妾は自働車に乘れる積だつたけれども、彼の家には自働車がないので歸つたと云ふたと言ふ話を聞いた。恁樣になつて來ては實に際限がない、恐るべき奢侈虛榮の結果と云はねばならぬ。如斯きの狀態で何れの國でも離婚の數が近年非常に增加し、家庭が紊亂して來たのである。世界何れの國に於ても、之は何とかしなければならぬと考へて倫理學者及び宗敎家等は、大に心配をして居るのである。て此事を論ずるには先づ今日の倫理では、結婚の目的を、どう云ふ風に見るかと云ふ點を明にする事が必要であらうと思ふ。仍て其點を大體述ぶる事も、將來青年婦女を指導する上に、有益ではなからうかと考へる。凡そ結婚をする目的には種々の理由があらうが、其主なるものは、(イ)生理上の目的である。之は人類に正當の子孫が無ければ、家を繼ぎ、國を續けて行くことが出來ぬ。殊に日本は家族制度の國であるので、家を續けて行くことが一つの大切な務になつて居る。之には正當の夫婦と云ふものが無ければ、子孫を續けて行くことが出來ぬ。次は、(ロ)經濟上の目的である、大體男子と女子とは生來其才能が違ふ。凡て女子は家を治めて、男子は外に出て業務に從事するのである、男女は天職が違ふ。一方は外に出て働き、一方は家に居つて家を齊へる。斯樣にして行くと經濟上餘程利益である。男子のみで暮すよりも其方が家を整頓して行く上に便益が多いのである。次は、(ハ)男女相互の修養と云ふことである。人は皆各〻長所があり短所がある。男子と女子とは異つた性を有つて居る。故に此二者相集つて互に助け合ひ、其缺點を補つて行く必要がある。而して啻に缺點を補ふばかりでなく、更に進んで修養をする。知識の修養、道德の修養と云ふ側に於て、人が發達する爲に家庭を立てゝ行く方が便利であり有益である。そこで自然夫婦と云ふものが出來て來る所以である。次は、(ニ)は子孫敎養の爲めである。子孫を唯產むのが目的ならば、家と云ふものは無くてもよいが、子女を敎養すると云ふことは、どうしても親がしなければ滿足には出來ぬ。家を造つて其家で實踐躬行を以つて子女を指導するにあらざれば、善良なる子女を

育てることは不可能である。玆に結婚して善良なる家庭を作る必要が生ずるのである。加之其善良なる人物を家庭に於て育てると云ふことは、延いては、(ホ)社會國家及び世界人類の平和進歩の爲めである。斯樣の點を今日倫理では結婚の目的と見て居るのである。それで今後の青年婦女を指導して行くには、此五目的を眼中に置て、總ての事に注意して行かなければならぬと思ふ。此の中一を缺いても、完全に彼等を指導することは困難である。所が今日の家庭は、這般の目的に相應し又は之に達するやうになつて居るのは多くない。然らばそれが何故出來ぬかと云ふと、第一は經濟組織、實業組織の變遷と云ふことが、一つの主要なる原因である。何故かと云ふと、昔は大抵一般の人々は自分の家に居つて、夫婦が一緒に仕事をなし來つたのである。例へば靴師であるとすれば、夫は靴を拵へる、妻も出來るだけ夫の手傳をして靴を拵へて賣る。夫婦共に終日家に居つて、同心協力して働く、子女は夫婦が互に注意をして能く敎育して行くと云ふ風になつて居つた。所が今ては之を止めねばならぬ樣になつてしまつた。何故かと云ふと、靴を拵へるには大製靴所と云ふものがあつて、其處に職工が寄つて働くやうになつたので、家は妻だけになつて夫は終日内に居らぬ。昔のやうに總ての事を夫婦が相談して、斯うしたらば宜からうと云ふて、妻が夫の智慧を借り、其指圖に依つて總ての事を處理して行くことは出來ぬ。夫婦は終日別れて居る。夫は自分の家と云ふものには夜歸つて來る丈で、宿泊所の如き考へになつて居る。加之甚だしきに至つては、夫が受くるだけの給料ては食へぬので、妻まで外へ働きに出る。さうすると家は全くがら空きである。そこで子女はどうなるかと云ふと、唯だ打ちやらかしてある。子供は勝手次第の事をして遊び歩いて、惡事を覺えて成長する。斯くて殆んど家庭と云ふものゝ目的が、達せられぬやうになつて居る。日本では未だそこまで工業が發達して居らぬので、其實例が明に現はれて居らぬけれども、將來は必ず工業の發達と共に、斯う云ふ風になつて來るであらうと思ふ。又商賣をなすものにしても、現今の日本ては店を出して、その店に夫婦が暮して居るのであるが、西洋では大商店があつて、其所で物品を賣買するので、今迄の商人は凡て賣子になつて其所に出て行く、さうすると商人も家には居らなくなる。又は夫婦して店員に出るやうになつて來る。又學問をするにしても、昔は自分の家に居つて讀書をしたが、今日は學校と云ふものがあつて、朝より晩まで其處に出て居らねばならぬ。學者にしても研究所と云ふものがあつて、そこで研究をする。家に居るのは夜だけになつて、同居と云ふことが段々減ぜらるゝ。故に夫婦相助けて、家を齊へると云ふことが出來ぬ樣になつて來た。幸にして一家を支へて行くだけの給料を得る人は、妻が家に居つて總ての事をやつて行く。然し其家を齊へて行く所の婦人は、昔の樣に唯夫の命に惟れ從ふだけてはいかぬ。自分で整理して行くだけの智識の無いものは、家を齊へて行くことが出來ぬやうになつて來た。萬事を主人に相談する譯には行かぬ。大概の事は自分で處理しなければならぬ已ならず、子女の保育上の事は勿論、敎育上の事、德育上の事其他何にしても皆自分が敎

育者となつて、子女を指導して行かなければならぬことに、女子の地位が變化して來た。それで昔の樣に無智の女では、今後の家庭はどうしても治まらない。夫ならば今日女子が皆高等の教育を受けて居るかと云ふと、中々其處までは行屆いて居らぬ、のみならず女子と云ふものは、何れの國に於ても同樣であるが、殊に日本に於ては學校で、或程度迄は教育しても、一と通り教育が受けてしまふと、モウ發達せぬ。家では少しも書物を讀まぬ。適〻書物を讀めば詰らぬ小說位であつて、子女を教育する上に有益な物とか、家政經濟に關し有益なる書物を讀むと云ふ樣なことは一向せぬ。故に子供を教育する能力が、益〻無くなつて來る。加ふるに前述の樣に夫婦は始終別居してをるので漸次協同の精神が缺けて來る。甚だしきは虛榮心に驅られて、收入の少きことに對して不平を言ふやうになつて來るのである。從來の如き家庭では、今後はどうしても圓滿に家を齊へる事は出來ぬと思ふ。

そこで斯樣な傾向を如何にせば宜いかと云ふと、之には先づ現今の結婚制度が時勢に適せぬので、之を改善しなければならぬと考へて居るのであります。然らば結婚制度はどう云風に改むるかと云ふと、昔の結婚制度は親の意志で子の婚姻を極めて取り行ふて、當人は否でも應でも親の意志に從ふたのである。所がそれで個性即ち人と云ふ自覺の發達して居らぬ時代には、治まつたのであるが、教育が普及せられて、各々自己と云ふ觀念が明確になつて來ると、迚もそれでは治まりが附かなくなる。それを無理に實行すれば夫婦の間に不調和が起つたり、家庭が亂れて來る。今日上流の家庭に往々にして悲慘の事が惹起するのは、畢竟親が當人の意志を構はずに、昔風に勝手に極めて結婚をさするので、夫婦間和合が出來ぬ、甚しきに至つては互に不倫の行爲さへあるやうになつて來る。それは夫婦の氣が合はず互に嫌ひ合ひをするから、それが若いものであるので、飛でもなき事を演出するやうになるのである。又然らざるも時には互に氣が合はぬので、一夫一婦の家庭を作るとが出來ず、遂に家庭の不和を起す事となる。家庭不和の結果、其子孫に放蕩無賴の人が生じて來る。日本の上流社會、殊に有力なる人の家庭が今日亂れて居るのは、多くは之れに原因して居る。夫故に昔風の結婚制度ではどうしても今後改良しなければならぬ。今後は當人がお互に餘程趣味が合ひ、相互の感情が一致するものでなければ、無理に親の希望で夫婦として結び附けても完全の家庭は出來るものでない。夫で結婚の制度を何とか改善しなければならぬと思ふ。所が又それを極端に考へて、西洋の殊に英國や米國で行はれ居る自由結婚の制度を採用せよと主張する人があるが、是も亦弊害がある。是は西洋でも今日は弊害が多い爲に、改めねばならぬと論じて居る。日本では餘り自由が少ないので弊風が起つて居るが、歐米では自由が過ぎて却て弊風が起つて居る。何故かと云ふと若い者が勝手に自分の好きな者と夫婦になる場合には、血統も家柄も將た又將來に對する利害をも考へず、唯其時の感情に依つて結婚することになるので害がある。斯る結婚は當初一時は幸福であらうが、後に段々不幸福なる家庭を作ることが多い。夫故に歐米では自由が過ぎて却て困つて居る。それで英米などでも今少し中庸を得

なければならぬと考へて居る。日本でも亦中庸を得る物にしなければならぬ必要に迫られて居ると思ふ。結局親と云ふものは、子孫の爲には何うしても萬事に關して注意しなければならぬ。殊に結婚の如き大事に就ては、親が合理的に干渉をしなければならぬ。若いものに全然一任して置くと云ふ譯には行かぬ。全體結婚の目的の一は家を繼ぐと云ふことであるが、家と云ふものは抑も親の關係して居るものである。其家の爲を思ふて相談人夫婦の關係を考へなければならぬのである。今日日本で離婚が多いのは、是等の點を考へずに唯親の希望意見で無理に結婚をさせるか、否らざれば極端に自由結婚をするかに原因して居る。弊害は單にそればかりでなく、離婚の結果は多くの場合に子女を殘して女子が去るので、其子女は第二の嫁即ち繼母に依つて育てられねばならぬ事になる。繼母に依つて、育てられた少年には、非常に不良者が多い。是は感化院の統計に依つて實狀を調べると直ぐ判明する。感化院に收容せらるゝ者は繼母に育てられたものゝ數が非常に多い。これは人情上さうならざるを得ぬのである。故に離婚と云ふ事は啻に離婚された女子が不名譽なるばかりでなく、其子孫即ち家系の爲に甚だ好ましくない結果が起つて來る。

上述の次第で、此後斯る問題の起る時には、前說したる結婚の目的を能く考へて、一般の人々を指導せねばならぬと思ふ。殊に宗教家は夫々直接關係せる所謂檀信徒の間に、此事に就ての實際問題が屢ゝ起つて來るであらうと思ふ。親は親の意志で是非とも我子と彼女と結婚させやうとするが、子はそれを好まぬ。於是乎、如何にせば宜からうと云ふ實際問題は今後續々起つて來るであらうと思ふ。相談を受けた場合に此を敎誨し此を指導する標準は、上記の結婚の目的を考へて、成べく其多くの目的に合致するやうに指導することが、將來の日本の爲に最も必要な事ではなからうかと考へる。

次に之に關聯して最も緊要なる問題は乃ち貞操問題である。是は今後餘程愼重に考へねばならぬ。貞操と云ふことは東洋では從來多くの場合、妻が夫に對して守るべきものの如く考へて、夫が妻に對して守るべき貞操は餘り言はぬ。又貞操と云ふ事は、夫婦になつて後初めて起つて來る事のやうに狹く解釋して居つたのであるが、今日の倫理では、貞操を一層廣き意味に解釋にして、男子より女子に對しても、女より男子に對しても互に貞操があり。又結婚して後ばかりでなく、結婚する前にても貞操の道は守らなければならぬ。即ち男女の關係は猥りにすべきものでない、正式の夫婦に於て初めて其天然に與へられたる目的を實行するものである。それ以前のは不正なる男女關係等であると云はれて居る。所が結婚以前の貞操と云ふことは、段々と難事になつて來る。何故かと云ふと世の文明が進んで來たる結果、人は高等の敎育を受けねばならぬ樣になつて來る、其結果段々と晩婚になる。故に正式の結婚をする時期は先づ男子ならば三十近くになる。其三十近くになるまで、貞操を汚さずに淸淨潔白の生活を保つことは、餘程精神の淸き意志の鞏固なる人でなければ出來ぬ。然らざる人は何か不正なる男女關係を其間に結ぶ樣になつて來る。文明は晩婚を强ゆることになる。晩婚になつても淸

淨潔白に身を保つて居ると云ふとは難事である。女子にしましても、男子が結婚を早くせぬので永く待つて居なければならぬ、待つて居る間に貧困者は生活難の爲めに、職工になるとか、或は賣子になるとか其他の仕事をして男子と交際をする。其結果遂に誘惑に陷つて貞操を守るとの出來ぬ樣になる者が多い。甚だしきに至つては、虛榮心に驅られて美服が著たいと云ふ如き欲求などの爲めに自分が收得する給料だけでは此慾望を充たす事が出來ぬので、終に貞操を破ぶりて派手な身なりをしやうとするやうになつて來る。今日歐米の墮落女の多くは、此原因より來て居るのである。斯う云ふ譯で男子の方に於ても、女子の方に於ても、文明が進むに從つて廣い意味で云ふ貞操が難事になつて來る。乍併貞操と云ふことが、唯渴した時に水を飲むが如くに、何等惡結果のない事であるならば、心配する必要はないのである。所が男女の關係が猥りになると云ふことは、直に國民の健康を破壞することになる。乃ち今日の日本に於ても、花柳病が非常に蔓延して居る。之は單に大都會ばかりでなく地方にも此の病氣が次第に蔓延して、それが爲に其人が苦しむばかりでなく、直接其人の子孫となるものが其害毒を受けて、體質不良の子女、腦髓發達の甚だ不十分なる者、判斷力缺乏したる如き不完全なる子孫が出來る。加之若き婦人にして、夫の爲め病氣を受けて苦しんで居る者が甚だしく增して來るのである。斯う云ふ風になつて來ると、國民の健康と云ふものは、到底維持して行くことは出來ぬ。西洋でも其事は非常に憂へて、種々の豫防法を講じて居るのでありまするが、日本では一層大事であると思ふ。如何となれば、日本人は、歐米人と比較して一體に健康が非常に弱い、體力が弱い、それは統計局の調査に依つても能く知れるが、女子は殊に弱い。多く二十歲前後に病氣に罹つて斃れる。健康の强いものでなければ健全なる子孫を作ることは不可能である。世界中最大切なる時期に於て、女子の夥しく死ぬる國は我が日本である。日本の女子程二十歲より三十五歲即ち子孫を設けなければならぬ時期に多く死ぬる例は他國には無い。大體女子の體質が惡い、肺病になど冒されて斃れるのみならず、其上に前述の如き劣等なる惡病が段々廣まつて來るならば、益々國民の健康を維持し國民の體力を進めて行くことは出來ぬ。此上に日本人が弱くなつたならば、將來世界の强き人種、强き國民と競爭して行くと云ふことは、到底出來ぬことになる。尙此上に男女の貞操が嚴重でないならば、私生兒或は庶子と云ふ正當に結婚をせざるものゝ子孫の數が非常に增殖する。是も吾國にはお耻しい程多數である。而し其者の教育が如何かと云ふと、どうも教育がうまく行屆かぬ。夫婦總掛りになつても子供の教育は難かしいものである。して見れば私生兒又は庶子の教育は、どうしても完全に出來る筈はない。乃ち感化院に於ける不良少年中、私生兒の數が頗る多い事に依つても之は實證されて居る。將來の國民の品性上より考へても、斯う云ふ事は餘程吾人が今後心配しなければならぬ點であらうと思ふ。又男女の貞操が、嚴重に社會に定まつて居らぬと云ふことは、啻に直接其身及び其子孫の健康上に宜くないばかりでなく、其人自身の精神上に取つても非常なる損害を蒙むる事となる。何故かと云

ふと、一度誘惑に陷つて貞操を汚した者は、所謂(イ)薄志弱行にして鞏固なる意志が發達せぬ。堅固なる意志の發達は、此過ちのなき健全なる者でなければ十分には發達せぬ。加之(ロ)早く老耄れる。一體日本人は歐米人に比較して早老である。此れは全體々力が弱いためでもあらうが、一は此の男女關係が正しくないためである。假令其身自身は品行方正なる人であつても、其の祖先なり何なりに不品行者があると、漸次影響を蒙むつて、永く體力を維持する事が出來ぬ。此には從來の風習も關係して居るが、全く早老である。併し今後の國民は百二十五歲迄は或は生き得ぬかもしれぬけれども、少くとも八十歲位迄は元氣旺盛で働かなければならぬ。其理由は、所謂働き始むる時期が遲い。今日では昔の樣に十五歲位より働き始むることは出來ぬ。高等の教育を受るものは三十歲位にならなければ、實際社會に出て働く事が出來ぬ。働き始めが遲いので、遲くまで働かなければならぬ。早老早死は一個人に取つても、又國家に取つても、非常の損害を來す所以である。それのみならず貞操を守らぬ人は、(ハ)嚴格なる生活が出來ぬ。氣儘放逸の生活に流れて、過度に酒色をあさると云ふ事は、殆んど罪惡とも何とも思はぬ。のみならず總ての事に不規律不忠實になる、嚴正なる生活に興味を有たぬやうになつて來る。

貞操紊亂の結果は、直接個人に取つては品性上に大なる損害を受けるのみならず、體力にも又家庭上にも、共に害毒を受けるものであるから、此の貞操問題は、今後餘程嚴重に取締らなければならぬと思ふ。廣い意味で云ふ貞操は、凡そ今日の日本ほど紊れて居る一等國はない。一夫一婦の制が嚴重に行はれて居らぬ。それが爲に種々の弊風が生ずる事は洵に夥しい。扨て然らば如何にすれば宜いかと云ふのが問題であるが。之に就ては諸方面より研究して行かねばならぬ。乍併男女關係を嚴重にし、貞操を確立せしむる上に、最も大なる力を有つべきものは則ち宗教である。宗教の力が衰へては、救濟の出來る道がない。歐米でも三十年前に比すれば、今日は大に男女關係が紊れて惡くなつて居る。其原因は宗教が力を失ふた結果である。青年の腦裡に宗教が勢力を有つて居らぬためである。故に將來此方面に於て、改善を圖らむとせば、第一に法律を今少し改正しなければならぬ。今日は耻かしい次第であるが、我國では市街に於て公々然として這般の貞操を破る店を張つて居る。現に予の住所より此處へ來るには、斯る所を通つて來なければならぬ。あゝ云ふものが市街にあつては男女の貞操を嚴重にすることは出來ぬ。あゝ云ふ事を政府が許して居るやうでは、到底貞操の程度を高くすることは出來ぬと思ふ。それから今一つは貞操問題に對する世間の輿論である。今日の輿論は斯る破倫者に對して、全然排斥の態度を採らず平氣で居る。英國などでは或議員に不正の男女關係があることが知れた爲めに議員を辭し政治界より退かねばならぬ事になつた例があつた位であるから。さう云ふ事をする者は若き下等人で上流には殆んどない。高等教育を受けて國家の中堅になつて居る如き人抔には、公然さう云ふことはせぬ。然に日本は之と反對で堂々たる上流者が隨分甚しき事をして居る、夫を輿

論が一向咎めぬ。否却て偉い人には少々位の事は堪忍して置かねばならぬと言ふて居る。勿論斯樣な人ばかりではないが、斯る無節操に對して社會の制裁の存せざる所には到底貞操は行はれぬと思ふ。

兎に角日本では男女關係に於て破倫の人を排斥する傾が一向無い、是は我國民の弱點であると思ふ。是は是非とも改めなければならぬ、改むるには結局宗教家の力に依つて、宗教上より之を實行しなければならぬ。法律に依つて罪せられざる以上は、何をしても構はぬと云ふ傾が一般の風習になつて居る國民に於ては、貞操は到底守られぬのである。己で己を愼しむ、己が己に克つ、他人が見て居らなくとも、自分の良心に於てさう云ふことを耻ぢてせぬ。或は自分の信ずる所の神なり佛なりが見て居るので、さう云ふ事は畏れて出來ぬと、斯樣になつて自分で自分を制限する樣にならなければ、決して改まるものでない。宗教以外に此の力を求むる事は難いので、此點に就ては今後の宗教家に深く信賴するのである。勿論教育の方でもそれを努めぬでもない。乍併教育では唯道理を言うて聞かせるだけであつて、感情に訴へると云ふ事が少いもので、此は惡いと云ふ事を知つて居ながら、矢張り構はずに之を爲すのである。それで感情に訴へて、人の精神を支配する宗教の力に依らなければ、此點を充分に改善することは難いと思ふのである。

這般の問題に就ては種々講述すべき必要の事が澤山あるが要之歐洲の大戰爭が濟むと、日本と外國との關係が餘程是れまでとは違つて來る。而して歐米の善事も續々這入つて來る代り、惡事も非常に激しき勢を以つて這入つて來る。而して善事は中々行はれぬが、反之惡事の方は容易に行はれる。今日日本青年の男女關係を非常に案し、道德心を害して居るものは、活動寫眞である。あれが色々樣々の道德上批難すべきものを見せるので、それが惡の刺戟になつて居る。次は惡小說である。現今では中々多く外國の極端なる小說を翻譯して賣捌いて居る。而も秘密販賣であつて、吾々は全く知らぬのではあるが、予は一度さう云ふ物を澤山集めたのを見た事がある、實に見るに堪えぬ繪などがある。又其中には非常な事が書いてある。さう云ふ物が東京などでは秘密で賣買されるのみならず、其の甚だしきに至つては眼も當てられぬ寫眞が入れてある。之は何處の寫眞店でもあると云ふ譯ではない、或店で青年に極く內密で賣つて居る。これは政府に於ても見付けたならば直ぐに押收して發賣を禁止せしむるのであるが、中々警察では押へることが出來ぬ巧妙なる方法で賣つて居る。此方法は何れから來たかと云ふと矢張り西洋より這入つたものである。西洋の下等社會の者が喜ぶ物が、日本にも輸入される。日本にも昔から隨分惡いものがあるけれども、其上に西洋の惡いものを輸入して輪をかけて居るのである。如此今日は勢であるので、今後傳道に盡力するにも、這般の現社會狀態を徹底的に觀察して、深き注意を要する。此の貞操問題は單に個人の道德でなく、將來我が國民の健康上に夥しく影響することであるので、國家道德、國民道德として十分に論究して之を防止して實効あらしめなければならぬのである。此の問題は是丈として次回には學校教育に關し、學校と宗教とが如何に協同

して行く可きかを論述する積りである。

第三回

第一講　學校と教育との關係

學校と教育、我子を教育すると云ふことは、親としての義務で親としてなさねばならぬ事である。子の爲め、家の爲め、國家の爲め、人類の爲めに親として實行しなければならぬ務である。乍併世の中を見るに、正當なる動機に依つて子女を教育して居る人は誠に少い。何の爲めに教育して居るのかと云ふと、一つの自分の利益の爲に、子女を教育して居る人もある。子女に十分なる教育を與へて置かなければ、後に至つて一人前の金儲けが出來ぬ。一人前の金儲けが出來なければ、自分等も年寄つて世話になることが出來ぬ。それで何不自由しても子女を教育して十分に金儲けの出來るやうにして置きたいと、斯ふ云ふ考の人が隨分ある。斯く子女を教育する事を、何か一種の貯金でもして居るやうに考へて學校に子女を入れて居る。子女を教育する事は子女の爲めとか、家の爲めとか、國の爲めとか云ふことでなく、金儲けをさせて、自分が年寄つた時厄介にならうと云ふのが目的である。さう云ふ考へて教育を致して居るので、親が子女に教育を與ふるに當つて、如何せば將來立派に世に立てる樣になるであらうか、此の子には何が適して居るので、斯う云ふ教育を與へ樣、彼の子には彼の事業

が適するので如何なる學校に入れると云ふのでなくして、彼の學校に入れて置けば、收入が澤山あるであらうと云ふ樣な點に著目して、商業學校が好いとか、或は工業教育が得であるとか云ふて、毫も其子生涯の幸福とか發展とか云ふ事は全く考へて居ない。如此は全く下賤な考で、苟も子を教育するのは、親の務であるとすれば、甚だ忌むべき考である。其故に將來宗教家として布教に從事せらるゝ人は、深く此方面にも留意せられて、親として子女を教育するには其子女が個人として最も完全に發達して、生涯幸福な生活を送り、且又國家社會の爲めに有爲の材となる樣に教育すべきであると教へらるゝ事を望む。我が子を教育する事に依つて、何程の利益が擧がると云ふが如き思想は、嚴戒を加へて戒飭せられむ事を希望するのである。

次に教育と義務の觀念、今日日本では親が子を學校に出せば、夫で親としての教育の義務は盡きて居る樣に考へて居る人が澤山あるが、之は大なる誤謬である。親が其子を學校に入れるのは、親として子を教育する義務の極々一小部分に過ぎぬ。自家で出來ぬ所を學校教育で補ふだけで、親として子を教育する義務の中で最も輕い點を學校に委任するに過ぎぬ。學校で教育するより以上の事を、親は自身で實行せむければならぬと云ふ自覺が洵に乏しい。夫は唯に下等社會の人許りではない、隨分資産もあり、相當の教育を受けた人の間にも此考へが少くない樣である。故に子が學校に入れば、一切を學校に任してしまつて、一向に學校と共同して子を教育しやうと云ふ考へがない。義務教育をして

貰ふ間でも、夫より進んで中等教育の間にも、父兄が學校に行つて、自分の子は如何なる傾向があつて、如何樣に發達致しつゝあるか、如何なる點に特に注意する必要があるかと云ふ樣な事を教師に聞く人は日本では甚だ稀である。又我子が學校を卒業しても校長或は教師の所へ行き自分の子が永々御厄介になり御蔭で卒業する樣になりまして難有御座いますと禮を述ぶる人が幾人あるであらうか。よしあるとしても百分の一位ではなからうかと思ふ。地方ではさうでないかも知らぬが東京などは特に甚だ少い。是に依つて見ても、親たる人が自分の子の教育に就て、常に餘り心配をして居らぬ事が分る。自分が平常心配して居るならば、滯りなく學校を卒業した時位は、何はさて置ても喜んで禮に行くのが當然である。夫をせぬ所を見ると、子供の教育に對し實に冷淡である事が證明されるのである。斯う云ふ譯で教師として教育に十分骨折つても、誰も一言の禮を云はぬ、實に張合のない話しではないか。殆んと八百屋で青物を買ひ求めたと同樣で、學校へ出して少しばかりの月謝を拂ひさへすればそれで好い。謝恩も感謝も必要はないと云ふ態度になつて居るのは、實に冷淡であると思ふ。夫では相濟まぬ次第である。

凡て教育と云ふ事を種々の方面より考察するに、大體左の五項になる。(一)體育、即ち身體を充分發達させる事。(二)智育、即ち智識を磨く事。(三)德育、即ち品性を養成する事。(四)社會教育、即ち社會に適應せる樣に導く事。(五)職業教育、即ち殖產興業に身を立てる事。此等の五項が學校である主要の仕事である。中に就て其の二、四、五の三通りは學校で大概出來る。是は何故かと申せば、第一職業教育は仕事の仕方を教へるのであつて、特別込入つたものでない限り、普通必要の事は大抵學校で教へる事が出來る。既に智育に就ても、先づ人に必要なる算術讀書等に關する智識を學校で教へる事が出來る。今一つ學校でなければ出來ぬ事は社會教育である。之も讀書算術等を教へるだけならば、幵は家庭教師を傭ふて自宅で教へても出來る、又父兄が自宅で教へる事も出來るが、兒童自身が自分の生れて來た所の社會は如何なるものであるか、如何なる人にならねば其社會に適應して行く事が出來ぬかと云ふ事を知つて、其社會に同化して行くには、どうしても多くの兒童に接し、多くの兒童と交らして、其者の品性を養成するより他に途はないのである。英國では、貴族は多く自分の子女を學校に出さず其家庭で教育する。智育の方面に於ては良き家庭教師を傭ふて十分注意をして教へるので、學校よりも却つて好結果を得ることが出來る。乍併斯樣に家庭で教育せる子女は、どうしても社會と同化せぬ。社會に出て他の兒童と同じ樣に考へ、同樣に喜び、同樣な興味を有つ教育は、學校に出さなければ家庭では出來ぬのである。次に品性教育及身體教育の二事は、是はどうしても學校に一任出來ぬ。何故出來ぬかと云ふと、學校でも多少は出來るが十分の事は出來ぬ。何故と云へば生れ付きの體質と云ふものが兒童に依つて各〻違ふ。故に斯樣な事は此兒童身體の發達には有益であるとか、有益でないとか云ふ事は、其兒童各自に依つて定めなければならぬ。故に親たるものは精しく其事を觀

察して、其個人に適するやうに體育を施さなければならぬ。同じ家に生れても兄と弟との體育が全然同樣には行かぬ體質は兄弟姉妹各〻格別であるのである。況んや他の家の子供と同樣に取扱はれて、一般の法則の下に體育をして行く事は出來る事でない。殊に母親たるものは深く此點に就て注意しなければならぬのである。又德育即ち品性教育と云ふものは、學校で行ふは行ふけれども、學校に於て行ふ所の德育は一般的である。我國で言へば日本國民として忠良なる臣民となすには、如何なる事を心得て可然か、社會に對して如何樣にすべきか、又皇室に對して如何なる心得を持つて可然か位の事は敎へられるけれども、人々個々に就て此兒童は短氣であるので、今少し心を廣く有つ樣に躾けねばならぬ、此兒童は懶ける癖があるので一層嚴重に取り扱つて、勉强する樣に仕向けねばならぬ、此兒童は智力が働き過ぎて、善事よりも惡事を覺える方に鋭いので、成るべく惡事は見聞させぬ樣にせねばならぬ、此兒童には成る可く廣く事物を見聞させて精神智能を刺戟し、立派なる品性を作る樣にしてやらなければならぬと云ふ樣に、個人々々に就て各自品性を指導して行かなければ、一般の規則を拵へて、誰も彼も之に當篏めて行くのみでは德育は到底出來る事でない。德育は仕入れでは出來ぬ、即ち仕入れた著物を被せる樣な譯には行かぬ。人々個々に適するやうに各別に仕立てゝやらなければならぬ。是は親たるものが家庭に於て自分の子女一人々々に就て、よく觀察をし注意をして行かなければならぬ事である。所が前述の如く　今日日本の大多數の人々は、學校に子女を出して置けば、親として敎育の義務は盡きて居る樣に思ふて居るが、其實十分の一も盡きて居らぬ。殊に最も大切なる德育則ち品性敎育は、學校では充分に出來ぬのである。此等の事は矢張宗敎家の方面より父兄に敎へ込むより他に途はないと思ふ。西洋に於ては日曜日には必ず敎會に來つて禮拜をする。其禮拜後の說敎中に、宗敎家が是等の事に就いて、折々父兄兩親たる者の心得を說き諭すが爲めに、自然に此等の思想が擴つて居るのであるが、日本には不幸にして此便宜が缺けて居る。是は將來何とか一つの方法を講じなければならぬ點である。併し日本には佛敎があるので、たとへ日曜毎に寺々に於て說敎が無いにしても、月に一回若くは隔月に一回に行はるゝであらうと思ふ。斯る時には啻に宗敎上の法話ばかりではなく、時に依つては人の親として子に對する義務の觀念を、宗敎の方面より考へて、斯樣の事を子女に對して親はしなければならぬと云ふ說諭があつたならば、前述の思想を大に父母の間に普及する事が出來るではないか。勿論無信仰で寺などに來らぬ者は引張つて來て聞かせる事は出來ぬので仕方が無いが、幾分宗敎心があつて寺などに來る人には親の子に對する義務の觀念を說明して、之を實行すべく導かれむ事を切望する。

次に家庭に於て子女を養育する上に、親として如何なる事に注意しなければならぬかと云ふ事を特に示して置く必要がある。所は子女に斯くせよ、斯くしてはならぬと云ふ事を只口先で云ふた丈では實效が無い。之には實行の方法、即ち親として子女を敎育するには、其實行の方法を心得て居らなけ

ればならぬ。然し農家は農家、商家は商家、勞働者は勞働者、貧乏人は貧乏人、富豪は富豪等種々生活上の事情を異にするので、貧富農商工等の各階級を通じて一般的の法則を設くる事は、極めて困難であるが、其中で幾分輕重はあつても、何の家庭でも最も深く注意しなければならぬ事は何かと云ふと、(一)親の品行即ち親が道德を實行する事。所謂實踐躬行に依つて兒童に模範を示すと云ふ事である。親が子女に道德上の話をする事も善いが、併しさう云ふ折は極めて尠けない。故に兒童の前で力めて實行しなければならぬ事は、親の實例的教育である。例へば學校で約束を守れと云ふことを修身科で懇々と說いて置いても、兒童が家に歸つて父兄が約束を守らぬ手本を見せると其授業は何の益もない。學校で教師が正直にしなければならぬと如何に說いても、兒童が家に歸れば、親が人に嘘を言ふて居る事を知つては、教育は何等の力を持たない。實例に依つて子女を導く事が親の最も大切な務めである。次に注意しなければならぬ事は、(二)家庭の讀物である。親が種々の讀物をする。東京などで云へば、大抵の家では新聞紙を取る、さうして父兄が暇に之を讀む。其新聞紙が家にあれば子女も知らず〳〵讀む、又新聞紙にあつた事に就ては夫婦の間で、食時又は暇の時に話しが出る。其取つて居る新聞紙に依つて、非常に猥褻の事、犯罪事項、家庭の醜聞、風紀紊亂の事が夥しく書いてある。さう云ふ新聞を家庭でとつて居れば、唯之を一讀するばかりでなく、自然に其新聞に化せられて、之に依つて思想を亂す爲に、知らず〳〵猥褻な話をも子女の前でする。さうすれば其子女は自然に夫に化せられる事になつて來るのである、故に家庭に於て親たるものは、其家庭の讀物に就て特に注意しなければならぬは先づ此新聞紙である。書籍を買ふのは幾分か良い家庭であるが、さう云ふ家庭に於ても兎角小說等を餘計に買つたり、甚だしきに至つては罪惡犯罪等を細々しく記述せる書物が面白いので讀む人がある。さう云ふ家庭では子女に正當の德育は出來ぬ。次に家庭では親が自分の讀物に注意せねばならんばかりでなく、子女が如何なる讀物をするかに就ても、餘程注意しなければならぬ。親が子女の讀む書物を買つてやるにしても、是は彼等の爲めになるかならぬかよく考へなければならぬ。東京附近の汽車汽船中にて、行商人が風呂敷包を擴げ出して、樣々の繪本、小說、玩具抔を賣り出すが、其書物の中には子女が讀んで有害な物が尠くない。老人達は何も知らずに買ひ求めて、自分の孫達に讀ませるが、斯る物より子女が非常なる害毒を受ける事がある。夫は彼等には分らぬのであるので仕方がないとしても、宗教家、教育家は大いに此點に注意を要すべきである。(三)遊戲に就て、子女がどう云ふ遊び方をするかと云ふ事は親として餘程注意しなければならぬ。學校に於ては教師が監督して居るので滅法なる惡戲、乃ち品性上有害な事は禁ずるが、學校より歸つた後に郊外又は村落等へ行くと、多くの少年が集合して遊んで居るのを見ると、善事もあるが、中には許して置けぬ惡事を不知不識盛んに遣つて居るのを見聞する事が屢々ある。殊に將來に、非常に有害な結果を生じはせぬかと思はれるのは活動寫眞である。是は小部落には無いが、戶數が千軒以上もある所になると、直ぐに活

動寫眞の興行が這入つて行く。此は芝居よりも安價であり、又複雜なる變化に富む爲め、少年自體が非常に行きたがる、さうしてピカ〳〵して精神を刺戟し所謂催眠的感に掛るので、一度行くと面白くてたまらぬ。金の無い時には無理に人の足の下を潛つてでも這つて行く、切符を改めらるゝ時には、高い窓より飛んで出で、怪我抔をする兒童もある。夫位に活動寫眞は少年が見たがるものである。是が今の所では未だ全國に擴まつて居る譯では無いが、段々擴まるであらう。況して或地方に於ては、或資本家が活動寫眞館を拵へて儲けやうと考へたり、町に於ける有力なる人が活動寫眞館を拵へて方外に儲けて見やう。何れ丈有害であらうとも夫は構はぬ、只儲け樣と云ふ考で始めるので、段々擴まつて行くに相違ない。誠に危險千萬な事である。故に是は宗教家が監督者になつて、凡て映畫は如何なるものかを調へて無害のものでなければ、見にやつてはならぬと、父兄に注意する事が肝要である。又其地方に於て如何に風教を害しても顧みぬ、儲けの爲に活動寫眞の興行をすると云ふ人があつたならば、其土地の爲に非常に有害で、風教を害し、教育を破壞するから能く考ふべきであると云ふ事を、矢張り宗教家が注意を加ふ可きである。(四)家庭風儀、又親に於きましても、段々世の中が忙しくなつて來ると、一日全身全力を盡して働く爲に、疲れて家に歸り保養の爲めとは云へ、無作法な態度にて一杯飲むとか、又は娯樂の爲めに、何かの遊びを爲すと云ふ事もあるが。是等も親としては餘程注意しなければならぬ事である。學校で子女に、如何に修身上の話しをし訓誨をしても、親が事實上夫れと反對の事をしてをるならば、其訓誨は有害無益である。學校にては人と喧嘩をしてはならぬと教へ、又は人は互に助け合つて行かなければならぬものであると說いても、父が酒を飲んで夫婦喧嘩をして見せると云ふやうな事であつては、却て子女に疑惑の念を起さしむるに外ならぬ。學校の課業よりも親の是等の行爲が、一層强く兒童には印象を與へるので、學校の德育は全く是が爲に打毀されて仕舞ふ。此等の點に就ても、子女の親たるものは、常に愼まなければならぬと云ふ事を、宗教上より說き諭して然るべき事と考へる。

次に今日日本で能く云ふ事は、學校へ子供を上げてあるけれども、一向立派な人にはならぬ、學校教育の効果が乏しいと批難する。之には種々の原因があるので、爰に斯く〳〵の故にと斷言する事は出來ぬが、確に一原因と認むべきは、家庭と學校とが共同して兒童教育に從事して居らぬ點である。凡て親たる者は、時々自分の子を預けて居る學校へ行つて、其子が如何に發達しつゝあるか、如何なる缺點を有つて居るかと云ふ事を、教師より聞くべきである。教育上の正當の方法は、兒童を學校に出して世話になると同時に、親も屢々學校へ行つて、教師より其子の弱點を聞き、之を補ふ事を努め、學校と家庭と相侍つて始めて少年の教育が出來るのである。今日は十五年、乃至二十年前とは違つて、家庭と學校が共同して、互に少年の教育に當る事が出來なければならぬ時機になつて居る。何故かと云へば、三十年前若しくば二十年前までは、親たる人々は明治の教育を受けたる者ではなく、多くは寺子屋教

育で成長したが爲めに、學校の教育、學校の目的、乃至は國民教育の目的は何か分らなかつた。今日父兄と成つて居るものは、多くは明治の聖代に生れ、明治の小學教育國民教育の如何なるものか、所謂新しい教育とは如何なるものかと云ふ位は自分でも其教育を受けたもので、確に心得て居るべきである。故に今自分の子が學校に於て何う云ふ教育を受けつゝあるかと云ふ事は知つて居らねばならぬ。寺子屋の教育を受けた者に對しては、現今の學校教育制度の話しをしても分らぬも無理はないが、苟も自分が小學教育を受けた者であるならば、一二度學校へ行つて教師に就て聞けば直ちに能く分る譯である。さうして其れに基いて家庭で自分の子女を教育すべきである。現在は這般の時機になつて居るにも關らず、昔の親と子と全く違つた教育を受けた時代と同じ事をして居る。却つて其時代よりも今日の父兄は、子女の教育に對して冷淡ではなからうかと思はれる。

次に宗教と家庭教育との關係に就いて一言する。日本では今日學校に於て、特殊の宗教教育を施すことを許さぬ。特に小學校に於て宗教々育は禁じてある。乍併學校で宗教々育を許さぬと云ふ精神は、宗教を排斥すると云ふ意ではないと考へる。然るに學校で宗教々育をせぬのは、宗教はつまらぬもの、人に取つて不必要のものであると云ふ意味を含んで居る樣に解釋されて居るのであるが、夫は大變な間違ひであると思ふ。凡て宗教は家に依つて信ずる所を異にして居るので、學校の如き一般的の教育に於て強ては教へぬと云ふ迄で、宗教が不必要と云ふ譯ではない。之を日本では教員始め一般に誤つた考を持つて居るものがあるのは遺憾の次第である。獨逸では宗教即ち基督教を小學校で教へる。然し宗派が分れて居るので、父兄の好みに因つて其宗派々々の課業を受けるのであるが、米國では學校即ち國民教育には宗教は全く教へぬ、日本と同樣である。併し夫れ丈で教育は足るものではないので、教會が日曜學校と云ふものを設けて盛んに宗教を教へて居る。日本でも基督教は多少之を實行して居るが、佛教家の方では餘り實行されて居らぬと思ふ。故に寺院と云はゞ老人が參る所の樣に考へられて居るので、兒童の宗教觀念を育てる所が無い樣である。兒童にも宗教心は先天的に具へて居るのである。其を發達する樣にしなければならぬが、現今では發達の場所がない。却つて少年の間に宗教心の芽を出さうとするのを、抑へて仕舞ふ狀態である、之は大なる間違であると思ふ。少年にも矢張り宗教の信念、宗教の要求はあるので、其の時より其芽を社寺に於て養ひ伸ばしてやる樣にしなければならぬ。是非佛教家にも日曜學校を設けて、盛んに兒童の宗教教育を實行する必要がある。死際になつて寺詣りに來るのみでは足らぬ。少年の時より寺に往つて、神聖なる事を聞く樣にしなければならぬ。無論教理哲理の如き甚深の事は少年には分らぬのであらうが、教訓上の事は却つて少年には能く分るものである。

次に青年の指導に就て一言すれば、日本では青年が小學校卒業後に指導するものがない。日曜學校の如きものがあつて、前より關係が出來て居るならば、卒業後一層深く聯絡を保ち、教育を持續するこ

とが出來るが、日本では之れが無いので一向寺院に青年が寄りつかぬ。從つて青年を教育する適當の場所が無いのである。或人の調べに據ると、日本で最も青年が惡くなるのは、小學校卒業後より、壯丁檢査を受ける其間であると云ふことである。小學卒業後兵役に就く年齡に達する間の三四年間に最も多く惡くなる。何故かと云へば、適當に指導する者がない爲めである。家庭では學校でする如き指導が出來ぬ。然らば宗教家が之をするかと云へば、宗教家もしてゐない。全く放任してある。而も其頃は情慾の發生する時期で、感情に流れ易く、人生一代中最も危險な時である。此時期に放任して置くのであるから、惡くなるのも無理ならぬ。故に學校では同窓會とか、或は親睦會とかを開き、種々樣々の方法を以つて學校へ集める樣に努めて居る。近頃は小學校で同窓會の如きものを設けて居りますが、一方にさう云ふものを設けると同時に、宗教家布教家も、此の危險なる時期に身を過ぬ樣に指導してやらなければならぬと思ふ。所がそれが出來て居らぬ。何故出來ぬかと云ふと、多くの宗教家の中には國民教育を受けた方も尠くないであらうが、中には全く國民教育を受けて居らぬ方もあると思ふ。斯樣の方は、學校では何う云ふ事を教へられて來たのか、又現に教へつゝあるかを知らぬ。之を知らずして學校で得た所の教育を如何にして繼續し補習す可きかを知る事を得ぬ。要するに小學校の全教科書を始めより終りまで一通り見て之を知つて居らぬと、今日の青年は、小學校で國民教育として是丈の事を學んで來て居るので、是より斯く教へて行かなければならぬ。小學校を卒業した者を指導し行くには、小學校で何う云ふ事が教へてあるかと云ふ事を知つて居らずして、只無暗に宗教上の教理抔を教へたとても、迚も青年の指導は出來ぬ。高尚過ぎて青年の知識又は現實の要求とは食ひ違ふ。それで今後の宗教家及び布教家は、是非共一通り國定教科書、殊に修身に關係せる國定教科書を見て、是丈の事は學校で教へてある、斯う云ふ點が人の精神の要求にも不拘、小學校で未だ教へてない、是を斯うして授けねばならぬ、是を斯うして授けねば指導が出來ぬと云ふ點を研究し。學校卒業後、兵役服務の前に、正道を踏み誤らぬ樣に指導すべきである。今少し日本の宗教家布教家に小學校へ毎度行つて實際を見、實際を知らるゝ樣に希望する。從來の宗教家は學校を恐怖(コワ)がつて居るのか、又は避けて居るのかは知らぬが、全く無關係である。是では迚も青年の指導若くば教育は出來ぬ。自分自ら學校に行き校長とも話しをして、學校では何事をして居るかと云ふ事を大いに研究して欲しいと思ふ。日本の教育法は米國によく似て居るが、米國では村落部落の牧師は、大抵其村の學務委員になつて居る。而して其學校の事には、特別に關係する權利を有し、屢々學校に行きて授業を視察し、校長や教師より常に教育上の相談を受けて居る。日本でも尊敬を受けて居らるゝ寺院の住職は、其地方の學務委員位の役を務められて、其の村落なり、部落なり、町村なりの教育會に出席し、精神教育上又は、風教の指導上に、大なる感化を及ぼす樣に努られんことを希望する。

次に卒業後の教育に就て一言すれば、現今日本教育界の缺點は、總ての學校教育後即ち中學、大學を

通じて、卒後後に人が發達せぬと云ふ缺點を有してをる。卒業すれば、夫で學問が濟んだ樣に思つて居る。大學を卒業すれば、其以後は餘り書物を讀まぬ。小學は小學、中學は中學で此弊に陷つて居る。然るに他の歐米諸國では、凡そ學校を卒業するのは、將來發達する端緒を啓いた迄の事である。是より以後は獨立して勉强をするといふ覺悟で卒業して居る。故に學校を卒業する時の知識の分量を云へば、或は歐米の小學校卒業者は、日本の小學校卒業者丈の知識を有つて居らぬかも知れぬ。歐米の小學校では、體育に重きを置いて、運動に時間を費すので、獨習の時間も日本よりは少い。日本の如くに詰込み教育、注入教育はせぬ爲に、知識の分量は少いが、其代りに身體が强い。而して將來修業の出來る樣に教育してある爲に、段々發達が出來るのである。日本では學校時代に何も彼も教へるので、學校を出れば退嬰して更に伸びぬのである。是は今後速に改めなければならぬ。學校は學問を卒業する場所ではない。一定の課程を教授する丈である。然らば何故卒業後發達せぬかと云ふと、是亦指導者が刺戟を與へて是を指導し發達せしむる樣仕向けなければならぬのに、悲哉現代には其人を缺いて居る。されば此頃は、內務省、文部省の指令で、地方に青年會と云ふものを設けて、青年を修業する樣に導いて居るが、是は必要上より起つて來た事で、誠に結構な事である。幾分之に依つて卒業後にも有益なる書物を讀み、刺戟を受ける事が出來るであらう。乍併此青年會なるものが、內務省や文部省の斡旋に依つて出來、段々發達して行く樣であるが、夫れを一向平氣で傍觀して居る宗教家の心持が、予には分らぬ。斯くては宗教家の爲すべき事を取られ、領分へ切り込まれてゐるのでないか。夫を何とも感ぜずに居られるのは、實に分らぬことである。此事は我等が引受けてやりますと云ふ位の勢が宗教家になければならぬ。宗教家は葬式や法事など許りに從事して居て、青年會は學校の校長や村長が導いて居る樣では甚だ心細い次第である。西洋でも青年會と云ふものがあるが、それは皆基督教青年會であつて牧師や信者が寄つて建てゝ居るので、決して政府や學校で設けて居るのではない。西洋の基督教青年會でする如くに、日本の佛教家も青年指導の任に當らなければならぬと思ふ。政府の援助に依つて出來た青年會は要らぬと云ふ位にならなければならぬ。然るに今日では、夫を憤慨して居る宗教家は殆んと無いやうである。有るかも知れぬが予は未だ之を耳にせぬ。又政府でする仕事は、種々の制限があり、樣々の事情があるので、宗教家がする樣に感化力を有つ事が出來ぬのである。之は今日の青年會の施設に反對なさいと云ふのではない。乍併宗教家が其の仲間に這入つて、其將來の發達に宗教家の力を加へる事にしたい。直接宗教を說く事は出來ぬにしても、宗教的精神を以て是を援助して欲しいのである。丁度情慾が發生して、感情に鋭どく誘惑に陷り易い時であつて、宗教の力を最も多く要求する時であるので、宗教家の力を幾分其の中に加へられんことを希望するのである。因に一言するが、今日の宗教家は今少し世の中、俗世間の知識を養ふ必要があると思ふ。經文哲理の知識丈では不可である。俗界及び青年を指導し行くには、宗教より見れば或は卑しき汚れた事であるかも知れぬけれども、青年の實

際生活と交渉し、身體上及び精神上に適切なる感化を與へられんことを希望するのである。予は曩に故元良教授と共に『青年期の研究』と云ふ書物を譯して出版した。之には青年は如何なる弱點があつて、如何なる迷ひに陷る者かと云ふ樣な事がよく研究して述べてある。斯るものは宗教より見るならば、殆ど穢いもので、話しをするも憚る如き事が書いてあります。併し青年を指導する上には必要不可缺知識であらうと思ふ。次に寺院に就て特別に希望するものがある。开は寺院を今少し青年等の寄り集りに使用さして欲しいのである。勿論寺院は宗教上の建築物であつて、神聖なる所であるので、此處で飲酒や猥褻の話や寢轉んで遊ぶ如き事は宜しくないが、青年が修養上の集りをしたり、互に有益なる話をしたり、書籍を讀んだり、或は又講話を聞いたりする事に使用させて欲い。勿論多數の人が集まる事であるので、佛前で或は失禮の事が全く起らぬとは云へぬ。夫には相當に取締法を定めて、寺院の廣い場所を青年の修養上使ふ樣にして欲しい。予は或る地方に行き、寺院の前の家屋に青年會の札が掛けてあつて、少年青年が集まつて讀書會を開いて居るのを見た事がある。其時何故寺院を其用に當てぬのか、青年は普通の民家に集まるよりも、却つて寺院などへ寄る方が、猥らな事をしないで宜からうと思ふ。又住職の方としても、青年の實生活を見るやうになるので、斯くせよ斯くしては不可ぬと云ふ事を教へる事が出來る。他所よりは、可成其寺を貸した方が好からうと其寺の住職に話した事があるが、田舍には五十人以上の人が集まる場所は多くない。斯る時に寺を使ふのは、一は修養の爲にもなり、又宗教の力を青年の中へ弘むるにも都合がよい事ではなからうか。勿論神聖なる寺院であるので、普通の家でするよりも不行儀が少くなる樣な事もあるであらう。又日曜學校でも寺院にて毎に開かるゝ樣になれば、宗教心も自然に湧いて來るのである。葬式法事のみに寺に行く丈けでは、活ける青年の間に宗教が弘まらぬであらうと思ふ。

以上學校以外の教育に關して要項を述べたのであるが、兎に角日本では、教育なるものを全部學校に委して、父兄も之を十分に心配せねば、宗教家も一向心配して居らぬ樣に見受けらるゝが故に、將來は何うか父兄が其子女に對して、只學校に委して置くばかりでなく、父兄自身躬ら活模範を示して、教育しなければならぬと云ふ觀念を起す樣に宗教家の指導を請ひ、加之宗教家自身も出來る限り常に青年に接し、且つ學校教育に就ても研究をして、卒業以後進むべき方向を示し、實踐以つて導かれたならば、現今教育上の弊を除去し、深く國民教育上に好結果を見る事になるであらうと考へる次第である。

第一一講　國家に對する道德

之より國家に對する道德に就て一言する。

歐洲の大戰亂は言ふ迄もなく有史以來の大戰爭である。如斯戰爭は何處にも曾て有つた事がない。

此戰爭が他日如何に片附くであらうか、何う云ふ終結になるであらうかと云ふことに就ては、確に云ふ事は難い。乍併諸種の事情より綜合すれば、到底獨逸が最後の勝利を得ることは出來ぬであらう。獨逸の執つて居る軍國主義、侵略主義は、一般文明國が到底許さぬであらうと思ふ。畢竟如斯主義は遂に人類の發達上に大なる害毒を及ぼすものであると皆感じて居る爲に、到底之を貫徹する事は出來ぬであらうと思ふ。然らば獨逸が將來何うなるであらうか、又何う云ふ風に獨逸を抑へて行くであらうかと云ふ事に就ては、想像も逆睹も出來かねる。乍併如何にそれが片附くにしても、歐洲全般總ての狀態は餘程變化して、再び戰爭以前の狀態に歸る事は、何うしても有り得べからざることで、確に大變動を來すに相違ない。其大變動が起つて來る結果は、東洋殊に我帝國には、必ずやそれが影響して來るに相違ない。我帝國に對する西洋諸國の態度は、既に日露戰爭以後一變したのである。簡單に之を云はゞ、日露戰爭以前には、多くの人は日本を輕く視過ぎて居た。小なる帝國何等恐るゝに足らぬものとして居つた。文明の程度に於ても、何もさう恐るゝ樣な國民ではないと考へて、商賣の言葉で云ふならば、所謂安く見過ぎて居つた。乍併日露戰爭後は、丁度之と反對に、稍々日本を重く視過る樣になつて來た。日本は歐洲の一等國をさへも抑へた、將來日本は世界的大活動を始めるであらうと、彼等の間に思ふて居るものがある。中々我帝國には、今彼等が想像して居る丈の實力はない。吾々は未だそこまでは來て居らぬ。富の程度に於ても、智識の程度に於ても、其他何れの方面に於ても、我帝國には、夫れ丈の事をする實力は今の處備つて居らぬ。けれども彼等は確にそう見て居る。併しその想像の結果は、必ずや日本將來に餘程影響して來るに相違ない。一例を云へば、以前には吾々日本人が歐洲諸國に研究に行けば、何も彼も吾々が尋ねることを先方で敎へてくれ、話して呉れる爲めに、尠からず其利益を得て歸ることが出來た。然るに今日は中々敎へて呉れぬ。反つて反對にさう云ふ事は貴國の方より敎はりたいと云ふて、彼等の秘訣は容易に敎へぬ樣になつて來た。勿論日本帝國が過去五十年間に於て、非常なる發達を爲したのは、一方に德川幕府三百年間に、吾々が蓄へたる所の能力が一時に勃發して、爰に偉大なる速力を以つて國民が進んだのである。と同時に他方には、西洋各國に行いて其文明を研究し、何事でも自由に彼等より敎はつて歸ることが出來た事が、一大進步の原因をなしたのである。若し吾々が西洋に研究に行くも、彼等より容易く敎はることが出來なかつたならば、如何に日本人が奮發したとしても、如斯大なる進步を速になすことは不可能であつたであらうと思ふ。然るに今日は已に吾々の聞きたい事でも、容易に敎へて呉れぬことになつてゐるので、今後は餘程の大決心を以つて掛らなければならぬ。過去に於て容易く進步した如く、將來に於ても速に進步するであらうと思つて居つたらば大なる間違で、到底其目的を達するとは出來ぬであらう。要するに、日本の將來の進步は、過去の五十年間に比較するならば、總ての方面に於て、甚だ困難になつて來るであらうと思ふ。況んや彼等の間には近來斯樣に思ふてをる、日本と云ふ國は獨逸と同じく軍國主

義を採つて居る國である、世界を支配しやうと云ふ野心を有つて居る國である、彼等には滅多に大切な事は言はれぬ、何う云ふ禍が世界に起つて來るかも知れぬと云ふやうなことを云つて居る。予は日本帝國は軍國主義で建つて居るとは考へて居らぬが、兎に角彼等は日本をさう云ふ風に見て居る。將來は有益なる事は愈々敎へて呉れぬであらうと思ふ。故に此戰後には、必ずや大變動がある。又其大變動の影響を吾々が直接に受けなければならぬと云ふ樣になつて居るにも關らず、彼等よりして新智識を自由に得ることが出來ぬ樣になるので、何うしても吾々國民自身が、確固たる覺悟を持つて進んで行くより他に途は無いと思ふ。然らば將來どう云ふ點に注意すれば宜いかと云ふ事に就て、二三所感を述べて見やう。

第一、國民の世界的自覺の喚起。此戰爭後は日本人全體が、今一層明なる世界的自覺を持たなければならぬ。日本國民は未だ殆んど世界的自覺がない。それは無理のない事である。僅か五十年前に於て初めて開國主義を採り來つたのに過ぎぬ。勿論其前には和蘭と若干の交際はして居つたが、其他の國とは殆んど交際せぬ。支那が有るけれども、之れとても餘り深く交つては居らぬと云ふ狀態であつたので、國民自身が、他國と自國との比較が出來ぬ。比較の出來ぬ結果は、世界に於ける日本の地位と云ふものを自覺せぬ。日本國の行動が世界に如何程の影響を與ふるであらうかとか、世界に向つて吾々が何程の事を爲し得るか、將來日本の力が、世界に如何樣に顯れるであらうかと云ふ如き事を考へて居る人は實に少い。爲めに何事に就ても日本國民は極めて小規模である。天下と云ふ言葉は使ふけれども、开は唯日本全國と云ふ意味の天下であつて、世界を指しての天下とは考へて居らぬ。斯樣に是迄は島國的に小さく進んで來たのであるが、今後は之れでは足らぬ。何處までも世界的に總てのものを考へて行かねばならぬ。宗敎にしても、學術にしても、商業にしても、其他何事にしても、凡て世界的に考へて行く樣にならなければならぬ。然るに夫が今日も尙ほ殆んど現はれて來ぬと云ふてもよい位である。上流の人々とか、他國に長く滯在して居た人々の中には、斯樣に世界的の考へを以てゐる人もあるけれども、それは國民全體に比較したならば、極めて小數であつて、外國の事は一向知らぬ人の方が大多數である。斯る狀態であるので、國民に世界的自覺の無いのも無理はない。併し將來尙斯の如き有樣では、世界の列强と競爭して、後れを取らず進んで行くと云ふ事は、到底出來ぬと思ふ。

第二、世界的智識の普及。夫で今後は今少し日本國民に、世界的智識を普及しなければならぬ。我が國民は世界の事は餘り知つて居らぬ。西洋人を見れば何國人も同じ樣に思つてゐて、英人、佛人、露人、米人殆んど區別されて居らぬ。所が何れも異つて居て其特色を有して居るのであるが、米人と英人とは何う云ふ風に違ふか、佛人と獨人とは何れ位違ふか、獨人と英人とは何れ程違ふかと云ふ如き區別の出來る人は百分の一位もないであらう。多數の世界各國人の差別は分つて居らぬ。我々は斯くの如き長所、斯くの如き短所があるが、彼には斯の如き長所があり、斯の如き短所があると云ふ事

の云へる人は甚だ少い。是では不可ぬと思ふ。斯る狀態では一等國たる地位を長く占め居ることは六ケ敷い。其れ故早く國民が世界的智識を持たなければならぬ。然らざれば將來歐米の列强即ち一等國と云はれる國と、商業に於て學術に於て將亦富力に於て到底競爭して行くことは出來ぬと思ふ。

然し合茲に世界的智識を我國に普及する必要があると云ふ事に就ては、豫め誤解の無い樣に希望するとがある。それは何であるかと云ふに、過去四五十年の間我國が、西洋の文明を輸入した態度が誤つて居つた樣に思はれる。吾々は先輩のされた事を批難するのではない。是には餘儀なき事情があつたので、彼の時代には致方がなかつたのかも知れぬ。乍併總て外國の事を採り用ゆるのは、外國の眞似をする爲めではなく、外國の長を採つて我が短を補ふのが目的である。外國の樣になる、外國人の樣にする、外國人を眞似るのはよくない。然るに過去に於ける歐米文明の輸入は、凡て舊來の日本の風習を忘れて、只外國の事を眞似る。何も彼も外國風にすると云ふ傾向が多かつた。夫は本末を誤つて居ると思ふ。其取るべきものは取るも、取るべからざるものは之を取らぬ樣に取捨選擇を誤らざる樣に、批評的眼孔を以つて凡ての事を定めて行くべきである。只丸呑みに何でも彼でも外國の事を受け納れるのは大いに間違つて居る。之は今後深く注意しなければならぬ點である。外國では斯うして居ても、我國にては其れであるか、又は然らざるかを考へ、善事ならば取り惡事ならば取らぬと云ふ目的で、今少し外國の事を詳細に考究しなければならぬと思ふ。此缺點は啻に明治維新の際活動された先輩の方々許りではなく、日本古來の歷史は皆そう云ふ傾向になつて居る。例へば或時代には支那の文物を入れて、殆んど支那思想の奴隷になつた樣な事もある。日本人て佛敎に於ても佛敎に心醉せる結果、日本の事を殆んど忘れた人も無いては無かつた。外界より文物の這入つて來る時には、多少極端の傾があるのである。明治維新の時代に、西洋の文物を入れられた方が、大失敗したとは考へぬ。夫は儒敎にしても佛敎にしても始めは同じ傾があつた。後に氣が付いて止めれば宜い。又何所でもさう云ふ樣になり易いのである。段々と今日は分つて來て、もうそう云ふ考への人は無いてあらうと思ふ。過去に於ては西洋文明に心醉した爲に、只西洋人のする通りにすると云ふ時もあつたが、今日は餘程分つて來たので正當の態度を誤る惧れは無いてあらうが、予の所謂世界的智識を普及しなければならぬと云ふのは、西洋に模倣せよと云ふのではなくして、西洋事情の是非をよく心得て置かねばならぬと云ふ意味である。

次に、國家に對する國民の義務に就て述べたき事は、我國民には公共心即ち國民全體の爲めに盡すと云ふ觀念が乏しい事である。是は國民が未だ立憲政治に慣れて居らぬ、士農工商と云ふ階級に別れて居つた封建時代即ち、治者は治者、被治者は被治者と分れて居つた時代、國家の爲とか、社會の爲めとか云ふ樣な事は、町人や百姓の考へることでない、斯樣な事は高等の學問をした人々が考ふべき事で、そう云ふ事に心を向けるのは宜しくないと云ふ樣に仕向けられて居つたためかも知れぬが、兎

に角實業家等の公共心が他の一等國と比較して餘程薄弱である。實業を以つて國家の爲め社會の爲に盡すと云ふ考へを有する人は誠に少い。商賣は私利を營むを以て目的とするものである。自分さへ良ければ良いと云ふ考へで堂々たる實業家が業を營んで居るが、夫では困る。勞働者の樣に何も分らず、人の指揮を受けて働いて居る人ならば致し方もないが、比較的大なる資本を持ち、或意味に於ては日本を代表する工業なり貿易なりに從事して居ながら、其事を以つて單に私利を營む業務の樣に考へ、毫も社會公共の爲め、國家の爲めてある事を自覺して居る人の少いのは、誠に嘆かはしい次第である。之は今後速に改善しなければならぬ。

又日本人が頗る愛國心に富んで居るのは事實である。が併し唯だ之れが戰爭と云ふ樣な時にのみ熱して來る計りでなく、平常業務の上に於ても、愛國心は常に現れなければならぬのである。所がそれが甚だ薄弱である。然るに今後は各ゝ國と國との競爭が激しくなるに相違ない。日本人も矢張り其競爭の仲間に這入つて行かねばならぬ。其競爭の場合に毎に國民の利益、國家の利益と云ふ事を自覺して居らねばならぬ。其激烈なる平和的競爭をして居る時に、唯自己の職業を營むと云ふ目的で事業に從事されては甚だ迷惑である。是は一日も早く改めて行かなければならぬ點であると思ふ。之は布教に從事せらるゝ折には、教理を說かるゝ序に、此日本人の弱點に就ても、時々教誨あらんことを希望する。本宗の開祖日蓮上人は隨分國家の事は御心配になつた方で、國家を顧みず只宗教の事丈で滿足しては居られなかつた樣に予は承知して居るが、其の精髓を繼承せられて、法を說くと同時に、國家の現在及び將來に就て適切に指導せらるゝ樣に希望する。

次に爰に述べたいと思ふ事は、日本には兎角愛國と云ふことに就て誤解があるので、其の誤解が無い樣に、人々に穩健なる智識を授ける樣にして欲しい。愛國心に就ては明治二十年頃より、西洋崇拜思想の反動として排外思想なるものが現出した。此排外思想なるものを愛國心の樣に考へて居るものが在る。何でも西洋の事を憎み、西洋の風を斥けるのが愛國心の樣に思ひ、西洋の事を贊成する者は愛國心が不足して居る樣に考へて居る人がある。斯る思想が今尙ほ存して少なくない。斯る考へを愛國心と云ふならば、是は日本の爲には大なる害でこそあれ、決して眞の愛國心ではないと考へる。前述の如く總ての國は各ゝ特色があつて、長所もあれば從つて短所もある。故に他國の長所を取り、善を用ゐて、我れに短所があれば之れを補ひ、過ちあらば之を改めるのが當然の事である。吾々一個人にしても、他人の長所は成る可く尊敬して夫れを學び、品性を高むることに努力すべきである。善人に交際して善き感化を受け自己の品性を完全に作り上げる樣に、國に於ても亦然りで、他の長を取つて我が短を補ひ、彼の善を容れて我が惡を捨てる、斯くして國民は益ゝ進步して行く事が出來るのである。他國の長所を學ぶと云ふ事は、例へば身體で云へば滋養分を取る樣なもので、滋養分を取らずに身體を成育させる事は無理である如く、國に於ても亦然りで、自國の事許り見て居つたのでは滋養分

が足りなくなる。古來日本と云ふ國は採長補短を實行して來た國であつて、支那印度等とは餘程性質を異にして居る。日本は日本固有の民族精神を有つて居ると同時に、支那の文物を入れたり、印度の思想を入れたりして、或は之を參考とし或は之を同化して、今日の文明に進んで來たのである。故に外國の思想を取る事は、西洋であらうが東洋であらうが、別段に其を遠慮する必要はない。日本に有益なものであるならば、採つて以つて我國發達の滋養物としなければならぬ。戸を閉ぢてしまつて外部より一つも光線を入れぬ樣になつたならば、其家は衞生上甚だ不適當のものになる。夫と同じく、國家としても外部より光線を入れず、全く戸を閉ぢて仕舞つたならば國家の衞生は惡くなるであらう。排外と云ふ事は決して愛國と云ふことにはならぬ。國は自分の特色を失はない樣に注意する事が必要であるけれども、他より善影響を受くる事を排斥する必要は毫もない。

次に更に愛國と云ふ事に就ての誤解は、今日の世の中には軍國主義、又は侵略主義と云ふものを以つて愛國の樣に考へる傾がある。是も亦確に間違つて居ると思ふ。云ふ迄もなく、一國には一國相當の國防と云ふものがなければ、何時如何なる國辱を受けるか分らぬ。一個人としても其通り、一人にも一個人としての力が無かつたならば、如何なる場合に如何なる人より侮辱を受けるかも知れぬ。人は各々自己防衞力を持つて居らなければならぬ。乍併國防と云ふ事と侵略と云ふ事は全く違つて居る。獨逸が今日誤つて居るのは此點である。獨逸が第十九世紀の始めに國家主義を唱へ、ナポレオンに反對して獨逸國民の統一を圖つたのは、獨逸國防の爲めであつた。所がそれが段々と變化してから、今日の侵略主義となり、他の國の領土でも何でも取らうと云ふ傾になつた。夫れが現今の大戰爭を起し、將に大失敗を招かんとして居る原因である。國防を說くのは決して侵略の目的ではない。又國と云ふものは段々人が進んで來ると、昔の樣に小國では不可ぬ。汽船鐵道其他電信電話等が出來ると、往來が自在になる、其の場合は互に合同した方が利益であるので、丁度日本が朝鮮と合同した樣に、一國になつて將來進んで行く事になる。之は決して惡事でない、互に好意的にするので、無理に奪ひ取るのではない。斯くして行く方が將來の利益であらうと云ふので合併するのである。合併主義と併呑主義とは勿論違ふ。然るに或論者は、大いに軍國主義を唱道して、唯兵力さへあれば國家は安全である樣に論じて居る。無論さう云ふ說を主張する人も其れが國家利益と思ふて其れを主張するのであるけれども、それは餘りに偏した考へではなからうかと思ふ。國には國防も必要であるけれども、其他に必要のものは澤山ある。政治も學問も商業も宗教も教育も無論必要である。其他にも必要のものが頗る多い。只兵力許り强いとて決して完全なる國家と云ふとは出來ぬであらうかと思ふ。唯だ力さへあれば宜いと云ふ獨逸主義で言へば、人としては强い力士が最も完全の人であらねばならぬ。誰も力士を以つて最も完全の人格とは考へぬであらう。彼等は力は强いが他の方面に於いて缺けてゐる。夫と同じく國も兵力ばかり强くても他の方面に於て整つて居らなければ、完全の國家と云ふ事は出來ぬ。

けれどもさう云ふ事を主張する人もある。現に獨逸のトライチユケーと云ふ學者は國家は力である。力さへあれば良いと云ふことを主張して居るが、之は偏見であると云はねばならぬ。

次に愛國心と云ふことゝ極めて混同され易いのは、國民の自重心である。自重心は云ふ迄もなく必要である。個人に取つて必要である如くに、國家にしても國民に自重心がなければならぬ。乍併自重心と自負心とは譯が違ふ。丁度一個人が、自分は智識が廣い、自分は斯う云ふ藝術に達してゐる、俺に及ぶ者は無いと思ふのは、それは自重心以上である。自重心の深い人はそんな事は思はぬ。國民と云ふものにも自重心は必要であるが、自重心が過ぎると慢心になる之は必要でない。慢心は却て禍を招く元である。所が今日の日本には餘程その傾がある。是は非常に危險な傾であると思ふのである。古人が云つた通り「勝つて兜の緒を締める」と云ふ決心は何時でもなければならぬ。日本は今日迄は何事にも稍々成功して來た。成功はして來たが、其代り今日は他國より妬まれて居る。將來は日本に對して隨分眞劍の競爭をする國が無いでもなからうから、昔の成功を自慢する樣ではならぬ。是迄の成功に依つて益々兜の緒を締めなければならぬ。此時に當つて我々日本人は偉いものだ、西洋人が數百年掛つて造つた文明を、日本人は僅々五十年で仕上げたと云つて慢心したらば、是程國家將來の爲めに危險なることは無いと思ふ。所がさう云ふ考への人が多少ないではない。是れも或は一つの反動であるかも知れぬ。一時は餘りに外國を崇拜して一も西洋二も西洋と云ふ樣になつて、我國には殆んど採る所がない樣に考へ、甚だしきに至つては、日本語を廢して英語にしたら良からうと思ふた人もあつた位である。斯る極端なる事を考へた結果、日露戰爭其他に於て成功したので、一足飛びに他の極端に走つて、一部の人士の間に斯ういふ考が起つたのではなからうかと思ふけれども、之は確に宜しくない。我國の少年迄が、「日本は一等國である。」抔と云ふのは大いに考へものである。未だ吾國は國力に於ては一等國でない。一等國とは何う云ふ國を指して云ふかと云ふに、或何か一つの點に於て世界に敵なしと言ひ得る國が一等國である。英國の海軍に於けるが如き、米國の富に於けるが如き、露國の領土に於けるが如き、獨國の學術に於ける如き、世界に及ぶものが無きものを備へて居るのが世界の一等國である。吾々にはそれが無いではないか。吾々には何か世界に於て我に及ぶものなしと云ふ點があるか、何物も見付からないではないか。只日本特有の長所として他國と違つて居るのは、日本は萬世一系の皇室を戴いて居るのが優つて居る。吾々國民は其考を持つて經濟力に於ても兵力に於ても亦其他の力に於ても劣らざる域に進んで行かなければならぬ。只其精神丈で滿足して居てはならぬのである。此の尊き國に吾々が生れたとは、吾々の深く感謝しなければならぬ所である。けれども吾々は之れを賴りにして一等國であると思ふて努力せぬならば、將來果して世界の列强國と競爭が出來るか何うかは頗る疑なきを得ぬのである。少年迄が小學校の卒業式に日本は一等國であると高調する樣になつたのは、日本人の卑屈なる精神を退ける點に於ては賀すべきの至りであるけれども、之を以つて

慢心したならば、實に危ぶない事であると思ふのである。

次に之に關聯して述べたき事は、斯樣に世界が段々變化し、亦日本の地位も段々高まつて來るので、國民內部に於ても種々の改良を加へて行かなればならぬ。世界に於ける日本の地位が高まつても、內部に於ける日本人の風俗習慣が、德川時代の風俗習慣と同じて進まぬならば、國民は發展して行く事が到底出來ぬ。吾々の世界に於ける地位が變るに從つて、吾々の風俗習慣も時勢に適應するものに改良して行かなければならぬ。然るに未だに吾々は多くの事に於て、德川時代の風俗習慣を其儘に持つて居るではないか。勿論此中には永久に續くべきものもあるので、變へる必要はないものもある。けれども中には大いに改めなければならぬものが、未だ十分に改まつて居らぬ。又啻にそればかりではない、日本の過去に於ては種々の變化があつた。其變化の多くは武士の習慣及び思想が平民の上に及んで、平民が大いに武士風に變つて來た點が多かつたのである。是は頗る善い事である。上階級の者の持つた風俗習慣が、下階級の者の風俗習慣になつて引上げたのである。之は世界の歷史中に於て例の少い事である。日本は維新以來餘程之を實行して來て居る。農工商者が武士風に大分化せられて餘程善くなつた。外國の學者も是は克く認めて居る。則ち日本は世界歷史に例の少い事をした。其一は諸侯が永年自分で支配して居つた所の領地を朝廷に返還した、此事は世界の歷史に例の無き麗はしき史實である。斯る精神が他の文明國にあつたならば、今日の如き社會問題は一朝にして解決が出來たであらう。然るに外國は皆其反對であつて、自分のものは鑑一厘でも人に讓らぬ考を持つて居るので難問題が起つて來るのであると云つて、日本の明治維新の際に於ける、諸侯が喜んで領土を奉還した事を、世界に類例の無い美事として賞讃して居るのである。それと並んで日本では下等社會の者迄に、上流社會の風俗習慣が移つて來たと云ふ事は、世界に例の少い事であると云ふて、是亦大いに賞讃されたものである。所が最近十年以來の傾向を見ると、全く其反對になつて來る樣である。今日は武士の方が却て商人化されて、武士の精神が段々消えてしまつて、昔の町人根性が段々勢力を占めて來てゐる。此では西洋人の讃めた事はもう過去十年程前に逆轉して、今日は世界にありふれてゐる下級社會の風俗習慣が、逆に上級の者に及ぶと云ふことになつて來て居る。斯樣な譯で多少は國民內部に變化を來したけれども、今日は寧ろ段々退化して居ると云ふて宜い位である。其中で變化せずに其儘やつてゐる事も隨分ある。例へば葬式に就て云へば、東京などで三時間も四時間も又は半日も車に乘つたり、澤山の生花造花などの行列をして式場に行く事をして居るが、之は改むべき事と思ふ。近頃は葬式に途中行列廢止と云ふことが始まつたが、是は餘程簡便である。之で多忙の者でも會葬することが出來る。前の流儀であつては公務を缺いて迄も葬儀に行くことは出來ぬので、止を得ず友人の葬儀にでも自然斷ると云ふ事になる。斯樣の事は改むる方が結構である。田舍などに行くと未だ〳〵改まつて居らぬ。加之隨分飲食する事が盛んである。飲食が決して惡いとは云はぬが、不幸のあつた家に行つて、二

日も三日も飲食する、少し裕福な家になると、二日も三日も大勢の人が寄つて大騒ぎをする。悲んで追悼の意を表して居るのか、唯だ飲み食ひに行つて居るのかが分らぬ樣な有樣である。斯う云ふ事は或時代では良かつたかも知れぬが、大正の忙しき現代に於ては少し時勢後れてはないかと思はれる。是は一例であるが、將來何とかしなければならぬと思ふ。次に之れは維新後に始まつた事であるが、徵兵適齡者の入營又は退營に際して、其家で大騒ぎをして、其家を飲み倒し食ひ倒す如きことが流行して、其弊風に困惑されて居る。或家で倅が兵隊に行つて歸つて來た爲めに、借財を起して貧乏したと聞いた事がある。是は著しい惡例ではないけれども、斯う云ふ暢氣な風俗習慣を續けて居つては、將來西洋人の樣な國民と競爭して勢力を張ることは困難ではなからうかと思ふ。古來の習慣風俗でも美風ならば何も改めなければならぬ必要はないが、時勢に合はぬ事は將來早く改良せぬと、國家の發達上損害が少くないであらうと思ふ。此等の事に就ては、玆に拙著『戰後の變動と國民性の敎育』中に、此の點は日本人の長所であるから保存すべきである、此の點は日本人の短所であるから改善しなければならぬと云ふことを、大分詳述して置いたから或は參考にせられたい。

次に政治上の事に就て一言する。丁度今日は總選擧が近いので新聞紙上には選擧に關する議論記事が多く、又多くの人も其事に就て考へて居る。此選擧權と云ふものは吾々に憲法に依つて附與され、有り難く此權利を得たのであるが、扨て其事が國民大多數の人々には平に分つて居らぬ。西洋諸國では此權利を得る爲めに、多年の間多くの人々が多くの血を流し、苦艱を經て得たのである。吾々は實に難有い事には、　明治天皇の御代になつて吾々に此權利を賜はつたのである。西洋諸國の如く悲慘流血の經驗を知らぬ。外國の如くに戰爭をして帝王に迫つて此權利を獲たのでない。此大切なる權利義務に就て、一般人民には未だ難有味が分かつて居らぬ。西洋の樣に困難と犧牲とで得た權利であるならば、いくらか難有味が分るかも知れぬが、餘りに偉大なる賜物で、餘りに貴重なるものであるので、其の貴い事が多くの人々に今以て分らず全く無感覺である。啻に政治上の權利義務を持つて居ると云ふ事に無感覺である已ならず、之を濫用する人があるばかりでない、其有權者を利用して自分の利益を得やうと云ふ樣な人もある。否な、選擧權を濫用する人があるばかりでは爲めに使ふ可きものではない。虛心平氣に專ら國家の利益を考へて行はなければならぬものである。然るにそれを濫用し、其甚だしきに至つては、自己將來の事業とか、將來の利益とか、或は更に甚だしきに至つては、僅少の報酬の爲めに、自分の心にも無き人に投票する事も、隨分ある樣に聞いて居る。此の總選擧にはさう云ふことを嚴重に取締まられて檢擧になる人が有る樣であるが、是は兎に角權利の貴重なる事が分つてゐないので斯る事が起るのである。又此國會議員を選ぶのは、專ら國家の爲にする事であつて、決して自分の地方の爲にする事ではない。則ち帝國の爲に善良なる適任者を擧げなければならぬのである。所が此人を擧げて置けば、自分の地方に何々の利益があるとか、此人を擧げねば、

此の地方に何う云ふ損があるとか云ふ自分の利益、自分の地方の利益を目的にして選擧することが有る樣に聞いて居るが、斯う云ふ弊害の有る事は、皆此權利義務が、如何に貴重なるもので、如何に難有きものであるかと云ふ事が分かつて居らぬ爲めであると考へられる。宗教家諸君が法を說かれる際には明治天皇の難有い聖旨を說き話されて、此の神聖なる權利は決して吾々が自分の利益の爲めとか、自分の地方の利益の爲とか、又は自己の精神に恥づるが如き事に使用せぬ樣に諭されんことを希望する。

次に納稅の義務に就て一言する。隨分或地方には此義務の觀念を感ぜぬ人々があると聞いて居る。政府より種々の保護を受け、政府の恩惠を受ける事は遠慮なく受けて居る。加之少しでも自分の不便が有れば直ちに運動するとか建議をするとかして、些かでも自分の利益を失ふ如き事があれば八釜敷云ふ人が、一方に於ては、さう云ふ恩惠を受くるも而も納稅の義務を感ぜず、納稅を怠つたり脫稅したりすることを圖る人があると聞く。是は國民として實に申し譯のなき事である。其の甚だしき實例の一としては、本年一月頃の新聞紙に現はれた事がある。或る小學校に於て、「國民には納稅の義務がある、是は國民として大切なる事で、兵役の義務と同樣に、是非共盡さなければならぬ所の義務である、」と云ふ事を敎へられて深く感じた少年の一人が、自分の家では親が種々樣々に僞りの口實を設けて脫稅するのを見て知つて居るので、其少年は親に向つて、學校の先生が、吾々は皆深き國家の恩惠を受けて居る、國家は之が爲に種々の施設をなして居るので澤山に費用も入る、それで國民たるものは義務として稅を納めなければならぬのであると云ふことを敎へられて居るので、脫稅することは宜しくない事であると云ふて諫めた所が、其親は非常に立腹して叱り付けた。其結果其子供が自殺したと云ふ事が、新聞紙に出たのを見た。實際隨分かゝる惡例はあるであらうと思ふ。それ程に感じた少年は少いかも知れぬが、學校に於て納稅の義務と云ふことを聞いて心得て居る子供が、親の脫稅するのを見て居つて、而も良心に安きを得て居る小供は無からうと思ふ。斯る例は隨分あることであらうと思ふが、是等の事に就ても、人に宗敎と云ふものがあつて、人の見ざる所でも正直を守る、自己の良心に對して耻づる所がないと云ふ道義の念を起させることは、宗敎の力に依らなければ一般の人々には出來るものでないと思ふ。宗敎家布敎師は特に此點に注意を切望する。

最後に一言したき事は國家に對する義務と云ふ事を論ずる場合には、是非とも忘れてはならぬ事であるので一言する必要があると思ふ。其は何かと云へば、我日本の國體が世界に無比であると云ふ事である。言ふ迄もなく日本の如き國體は世界に例が無い。我國の如き建國の意義は世界に例は無い。我國では唯だ力の有る者が人民の上に立つて力を以つて人民を抑へ付けて主權者となり、君主となつて來て居るのではない。日本の國は力に依つて建てられた國ではない。日本の國は道德に依つて建てられて續いて居る國である。故に敎育勅語に於ても『德を樹つること深厚なり』と仰せられてある。日本では古來道德を以つて人民を御導きになつて居る。即ち君主と云ふ點より云へば、吾々は君主として崇

敬致さなければならぬのであるけれども、今上陛下の御即位の御勅語にも宣せられた通りに、人民と皇室の關係と云ふものは、父子の關係になつて居るのである。斯の如き國は他には全く無い。陛下に於かせられては、『日本人民の富は即ち是朕が富なり』とは昔より御考へになつて居られる。斯かる國は何處へ行つても他にはない。西洋は勿論である、又支那を見ても其通り、現に支那では人民を治めることを「牧民」とか「統御」とか云ふ樣な言葉を使つて、恰も動物を扱ふ樣な言葉で、帝王たるものが國を治むる方法が記してあるのを見ても好く分るが、日本では斯樣な御考へをなされた事は決してないのみならず、恰も親が子を思ふ如き慈(イツクシミ)を以つて吾々をお導きになつて居るのである。此處に於て始めて吾々には忠孝一本と云ふ事がある。所が斯う云ふ有難き國體であり帝國であると云ふ事を知つて居る者は極めて少數である。高等の教育を受けて立派なる人でなければ知らぬのが多い。併し高等の教育を受けた人の中にも、さう云ふ事を感じない人がないこともない。甚だしきに至つては、日本の國體を法律的に、權利義務の關係で見る人も無いではない。日本の國體は決して法律的に解釋する國體ではありませぬ。道德的に解釋せねばならぬ國である。此の重要なる點が教育のある人の間にも明に分らぬ位であるので、一般の人々の間に分つて居らぬ事はないではないと思ふが。宗教家布教師は特に此點に就て一般人民に丁寧に說明されたい。殊に最近是れが必要である譯は、世界何れの國民も民主的の傾向を帶びて來て、近く露西亞は帝政を廢して共和政體になつた。世界の大國は殆んど共和政體になつてしまつた。獨逸は帝國ではあるけれども、吾が帝國とは全然性質を異にして居る。露國の帝室も違つて居た。カイゼルは獨逸國の皇帝ではない。プロシヤ王に過ぎぬ。獨逸はプロシヤ或はサクソン其他種々の國が寄つて成立して居る聯邦を以て一の帝國と稱して居るのである。プロシヤが其聯邦の頭になつて居るに過ぎぬ。獨逸帝國は日本の如き帝國とは全く意味が違つて居る。帝國の性質を備へて居るものは英國だけである。米國は共和國、支那も共和政治、佛國も共和政治になつて居る。斯る際に我國體に對して誤解があつてはならぬ。日本の皇室と人民との關係は、他の國とは全然趣きを異にして居る事を懇ろに說明し、此點に就て萬一にも誤解の無き樣に注意せねばならぬ。而して我御皇室に對しては深厚なる謝恩の念、尊崇の念を起して、此の甚深の御恩を忘れざる樣に敎へ導かれることを希望するのである。謝恩の念は人格の高下を知る標準である。謝恩の感念が強いか強くないかの程度に因つて、人格の高下を計り得るのである。謝恩の念の弱きものは人格が低い。人格が高くなればなる程、謝恩の念は強くなつて來るものである。世界に無比の皇室を戴いて安全に生活し、先祖代々其皇室の御恩を受て居ながら、而も謝恩の念が無いと云ふことであるならば、是程劣等なる國民は無いと云ふことを說明して、益々忠愛の心が我國民に充實する樣に一般人民に敎誨せられん事を特に希望する。

以上甚だ不十分なる講演に過ぎなかつたが、何分にも時間が僅少である爲めに、意を盡し得なかつ

たのは極めて遺憾に感ずる次第である。

（完結）

近代文明と宗教問題

東京帝國大學文科大學教授文學博士　姉崎正治講述

近代文明と宗教問題

帝大文科大學教授　文學博士　姉崎正治講述

今日は母の不幸に際して、諸君が御回向を下さいましたことは、生殘つて居りまする私の悅びは勿論、去りました母も定めし諸君の御志を有難く戴いたことゝ存じます。

此不幸がございませんければ、此會には私が上つて多少自分の考へて居る所を申上げる積りでありましたが、右の仕儀で豫定の通りに諸君にお目に掛ることが出來なかつたのは、甚だ遺憾でありますが、今日諸君のお志に依つて御回向を下されましたのを深くお禮を申上げると共に、少しく前に豫定して居りました事の一端を申上げて、諸君の御參考に供しやうかと思ひます。

諸君は布教に從事してお居でになる方々でありまして、常に世間に接し、殊に今後青年を導いてお出でになり、殊に將來の日本に對して此日蓮主義の廣宣流布には重大なる職務を帶びて居らるゝ方でありますから、現代の青年及び將來世界の趨勢に就て、私の觀る所を申上げて御參考に供することは、必しも無益でなからうかと思ふのであります。

此事柄に關しては隨分色々の方面もございませうが、概略に二つの點から申上げて見たいと思ふのであります。其一つは近代思想と稱するものゝ特質が歸納的であると云ふことであります。即ち總て事實に基いて、事實から歸納して行くと云ふ思想が、全體に勢力を占めて居ると云ふ事。尙ほ一つは社會組織の上に於て民衆の勢力が增して居ると云ふこと。此民衆の勢力と云ふことの中には色々の點が含んで居りませうが、殊に宗敎に關係した方面から申しますると、何事でも所謂權威を先にするのでなくして、民衆の意思を集めて事物を大成しやうとする傾向が現はれて居るやうに思ひます。此二つの傾向は果して人間天性の圓滿な解決になるべき傾向であるか、又は尙ほ之に補ふべきものがあるか、語を換へて申しますれば、近代思想即ち近代文明が、此百年或は百五十年の間に段々發達して參りました此趨勢は、尙ほ續いて發達は致しませうが、モウ一つ進んで何ものかそれを補ふべき、若くはそれに代るべき思想傾向が將來の世界を支配すべきか否か、茲には非常に大きな問題があらうと思ひますが、其點までは私一箇の考は未だ纏つて居ないのでありますから、現在斯う云ふ傾向がある、少くとも現在並に餘り遠い將來でなく、近き將來に於ては大體に於て此二つの傾向が勢力を占めて進んで行く。故に夫に對して諸君の御事業が如何なる關係を有つか、宗敎の信仰が如何なる關係を有つべきかと云ふ點に就て、私の觀察を少しく申上げて御挨拶の辭に代へたいと思ふのであります。

第一事物の考へ方が歸納的になつて居ると云ふことは、之を日本だけで考へて御覽になつても、德川時代と現在とは、人々の事物の考へ方が非常に違つて居ると云ふことは著しい事であらうと思ふ。何となれば德川時代ならば人間の道德の敎、或は社會の事柄は、劃然と何ものか定まつた定則即ち原理原則があるものとして、それは萬人が等しく認めて居り。其原理原則から割出して、日常の事柄、或は社會の事情等を觀察して往つて居た。例へば曆の上で云ふと、支那の陰陽五行の說が日本に傳はつて、それは殆ど定まつた定則になつて居つた。そこで五行と云ふものがあれば、其五行を總てに配當する。則ち一年の四季に五行を配當して、春は木、夏は火、秋は金、冬は水と云樣に分ける。そこで木、火、土、金、水の中の土だけが殘ると、其土と云ふものを四季の間に當嵌めて、四季の眞中には土用があると云ふやうな工合に定めて居る。所が今の氣象學或は天文學から見ますれば、さう云ふ木、火土、金、水と云ふが如き種類の根據は固より定まつたものとは見ない。日々の氣象を觀察して、氣壓の變化、溫度の變化、濕氣の變化等を研究して、さうして夫等を集めて、大體日本の氣候はどの時季にはどう云ふ工合になると云ふことを綜合して行く。其結果は場合に依つては昔も今も同じやうになりませう。所謂『夏は暖かに冬は冷たし』と云ふことは少しも變りはないであらうが、併し其定め方は、大に異なる。何とならば、昔は陰陽五行說で申せば、夏は火の德が盛であるから暑い、冬は水の德が盛であるから冷たいと云ふやうに原則があるから、其原則から割出して說明をして居る。然るに今日の氣象學で申しますれば、天文の方の觀測や何かを併せて、夏は是れ〳〵の事情が集まつて居るから暑

い、冬は之れ〳〵の理由に由るから冷たいと云ふ説明をする。斯の如く物を一定の原則から割出して演繹するのと、之と異なりて事實を色々集めて來たつて其點から歸納する事との相違は、僅か斯る時候の變化に對する考へ方、或は説明の仕方にも現はれて居るのであります。是は僅かな事のやうでありますが、斯う云ふ種類の事實が總ての方面に亙つて説明され又は推論されて居る。そこで例へば物事を研究すると申しましても、近世の教育を受けましたものと、昔風に研究された方の考とは、研究と云ふ事一つでも、大變意味が違つて居る。例へば日蓮聖人を研究すると云ひますと、多くの人は日蓮聖人の長所を如何に組立てるかと云ふことを研究するやうに考へて居られますが、所が近代の研究方法にては、日蓮聖人を研究するには先づその時の時代から研究を始めて、然して聖人の御書或は其他傳説等の其等各種の材料に基き、其中かち拾ひ出して段々と歸納して、さうして聖人の一生に於ける周圍即ち外側の事情と、聖人の御精神との關係が如何に發達し、若くは變化したかと云ふことを推理斷定して見たいと考へる。玆に近世の研究は在るのである。例へば傳教大師に對する日蓮聖人の解釋又は態度に就ても、今までの研究法ならば先づ天台の宗義の上から定める。さうして本迹二門の議論などに就て、傳教大師と日蓮聖人との異同若くは關係を定めてお出でになるに違ひない。是も勿論一つの方法ではありますが、私共の方から研究即ち近世的研究法よりして行きますれば、聖人の御書の中で傳教大師に關する説を先づ第一に集めて、例へば先づ二百箇所ばかりを拾ひ出す。さうしてそれをカードに作つて分類して、其間に現はれて居る思想を纏め、且つ前後の聯絡を取つて見ると云ふやうにやつて行くのであります。(其結果は『宗教研究』第三號に出しますが、)是も矢張り私共の思想の進み方の所謂歸納的方法を、聖人の研究の上に一つ試みたのであるが。斯う云ふ風に何事を研究するにも、先づ物事に當つて材料を捉まへて、さうして其中から歸納して行かうと云ふのが。總て現代の進み方になつて居る。凡そ物事の定則を初に定めて、さうして此の定則から割出して行く方法は頗る不安心であらねばならぬ。何となれば、定則が正しかつた場合は正確であるが、定則と云ふものは要するに廣く總てに應用しなければならぬ事柄であるから、其中の一部分にでも缺陷があつたならば、其缺陷のある定則を今度當嵌める場合に、細かく當嵌めて行く時に非常な誤りを來すことが尠くない。然るに之に反して著々事實を集めて、其中から歸納して行き、其中に誤りがあつたならば之を除く、除いても後の大部分は其儘で研究の結果が成立つて行くと云ふ利益がある。斯う云ふ考からして近代の學問は昔日の演繹的の研究を止めて總て事實を集める歸納的の研究に進行して居るのであります。

尚ほ例へば社會の事柄にして見ますれば、殊に此の布教傳道の上に於ては、慈善或は社會救濟の事柄は非常な大切の事柄になりませうが、今までの慈善事業は日本でも外國でも、人間が貧苦に沈んで居る者、或は病苦に惱んで居る者を憫れむと云ふ心、是が慈善事業の根本である。さうして其心から割出して行く、尤も人が自分の同胞の中に不幸に沈んで居る者のあるのを憫む心、是は少しも變らな

い人情である、人情の粹である、是は尊ぶべきものである。併し其心があるからと云つて、唯其心を原則として、其人を愍む心を滿足せしむるやうにと云ふ意味の慈善を行ひますれば、其弊害の極端になりますると、例へば淺草に行つて、善男善女が唯其處に出て居る乞食に金をやると云ふやうな慈善になつてしまふ。金を遣つて其乞食が助かるかと云ふと、成程金を貰つて乞食は一時の安逸を貪ることは出來ませうが、それが慣ひ性となつて、乞食を營業にしてしまふ、是は何處でも同じ現象を見るのである。外國でも日本でも此點は變りはない。此間私が母の遺骸を送つて火葬場に參りましたが、火葬場に行く數町間の田圃道は全く乞食が一杯になつて居る。さうして人の後から附いて來て金を貰はんとする。貰ふではない否殆ど車を捉へて强請るやうにして金を貰はうとするのであります。乞食の何十人か、恐らくは數十戸の乞食が火葬場だけで生活して居る。乞食を營業にする者が出來てしまつて居る。今までのやうな慈善には此弊が非常に多いのであります。現に又モッと大きな組織に致しましても、例へば東京市の中には慈善病院が幾つか出來て居りますが、其慈善病院の醫員の話によると、慈善病院では貧民の病人を助けると云ふので、病院へ入れて治療をして遣るが。然るに此の種の病人は病氣が治れば又原の貧民窟へ歸らなければならぬ。けれども病院の方が總ての設備が整頓されて結構であるから、又モウ一度病院へ行きたいと云ふ樣な考を貧民が有つさうである。而して又有つ丈でなく、實際貧民窟の衞生狀態と云ふものが尤も甚しく、斯る個所即ち貧民窟には一種特別の病氣が伏在してをるから直ぐに又夫に罹つて、元の慈善病院へ這入る。斯くして二度三度と這入るに從つて、病院へ這入つて來るのは自分の權利だと心得るのみならず、尙夫以上に進んで居るのがあるさうである。或慈善病院が創立以來既に十年になつて居るが、其病院の患者の中には看護婦に對し斯う云ふことを言ふ者があるさうです、「君等初め醫員でも、俺等貧民と云ふ者があつて病氣をやつて此病院に這入るからして、雇つて貰つて居るのぢやないか、吾々貧民病者は助けて貰つて居るから有難いと思へと云ふのは間違つて居る。俺等が居るから此病院と云ふものも成立ち、さうして看護婦でも醫員でも皆給料を貰つて生活をして行くことが出來るのぢやないか、さうすれば吾々はお客樣だから大威張だ」と言ふ者が出來て居るさうであります。此點は序ながら申しますが、淨土門の中にも多少さう云ふ一つの傾向が生じて居る。即ち眞宗では勿論之を異端邪義とは致して居りますが、淨土門の中にも此傾向の者がある。即ちそれは惡人正機の信心であります。吾々は惡人である、惡人であるから極樂往生が出來るのだと云ふ考であります。極樂の方だけで惡人正機を言つて居るならば宜いやうであります、大した弊害は無いかも知れませぬが。併し今のやうに現在に於て、病院でも、或は監獄でも同じ考への者が夥しく出來て此世界で直に惡人正機を行はうとする。其結果はどうなるかと云へば、矢張り貧民をしてさう云ふ慈善事業に狎れしめてしまふ。自分自ら貧の苦痛をも若くは又貧の耻辱をも考へないやうになつてしまふ。貧民若くは病者を救はうとする精神は結構であるが、唯其心か

ら割出してさう云ふ慈善組織を拵へますと、却つて元來の目的に背くやうになつてしまふのであります。

此弊害は何處の國でもあることでありますから、そこで夫等に對して如何なる救濟をすべきかと云ふことの研究を、殊にイギリスやアメリカでは、慈善事業に對する考が餘程違つて居るのであります。即ち慈善事業を爲すには、社會的に救はなければならぬ。一人々々の貧者或は病者は救ふのが先てなしに、社會的組織的に救はなければならぬ。社會的組織的に救ふのには、どうしても貧民それ自身を研究しなければならぬと云ふことになつて居るのであります。勿論總てを研究して後に初めて慈善事業に著手すると云つて居つたならば、仕事は上がる氣遣ひはありませぬから、研究しながら而かも事業をやつて居る。事業をやりながら同時に研究をして行くと云ふ方針になつて居る。其主義が非常な重要なことになつて居る。其研究の仕方は、例へば貧民窟に行つて、衞生狀態を研究する爲には、其排水の狀態、便所の狀態、又部屋の空氣の流通など、それ等の點を總て調べる。さうしてそれ等の統計を取つて、どの位の程度までならば貧民窟の衞生狀態は保つことが出來るかと云ふやうな點を研究する。又貧民窟は勿論非常に穢い、其穢くして居るのは清潔思想が無いからではないか、然らば其清潔の思想の缺乏して居るのは何處から來て居るかと云ふことを調べて見る。そこで例へば——其原因は色々ありますが、例へばアメリカなどでは各國から移住して來て居る者がありますから、其移住民の元と來た國の生活の狀態をも調べて見なければならぬ。其後には移住して來る者の本國へ人を遣つて、移住する前に先づ以て教育を施すやうな方法も講じて居るのであります。或は又家政經濟の事も考へてやらんければならぬ。唯經濟を能くせよ、節儉せよと言ふ丈ては駄目であります。そこで慈善會に於ては婦人の巡回教師を派遣する、其教師は教へるのであるが、同時に研究をするのである。貧民窟に參つて一家の經濟に就ては收入がどれだけある。それをどう云ふ按排で支出して居るか、經濟を維持して居るかと、一々それを調べ上げる。さうしてそれに對して缺點を指摘して、帳簿を整理させる。帳簿の記け方を教へるやうにしておいて、それ等の結果を又集めて、何處の國から來た者にはどう云ふ缺點がある、帳簿の整理が惡いとか、若くはペンの使ひ方が粗末であるとか、バタの使ひ方を知らないと云ふやうな事を、歸納的に事實を集めて研究して、さうして其結果何國から來た移住民に對しては、特に此點を注意してやらなければならぬと云ふやうにして行くのであります。さう云ふ工合にして先づ家庭の經濟を整へてやる。即ち貧民の出來ると云ふことは、社會的の原因もありますが、家庭の原因も非常に多いとすれば、其家庭が事實どう云ふ工合になつて居るかと云ふことを能く調べて、それに基いて指導をして行くと云ふやうになつて居るのであります。即ち純粹の學問の物理學、乃至心理學でも、さう云ふ種類の學問に於ける研究は勿論、それ以外の謂はゞ應用的の研究の方に於ても、總て歸納的に研究する。事實に基くと云ふことを非常に重んずるやうになつて居るのであります。

さうして其結果は著々として擧つて行く、例へば物理學は最近十年ばかりの間に殆ど大革命を經たのでありますが、今までの物理學が或る原則に於ては覆つたやうでありますけれども、全體の結果としては元の結果を纒めて發達させて行くことが出來る。即ち先程申上げた通り、或る一定の原則を立てゝそれから割出して行く場合に、原則に缺點があればそれから出た後の結果が無益になる虞れがある。然るに歸納的の研究で參りますれば、一部分間違つて居つて修正を要しても、其處だけを補正して行けば全體の結果は崩れない。加之學問の研究の結果を段々仕上げて行つて、益ゝ眞理を深く知ることが出來る。さうして之を應用する場合にもそれだけ安全である。原則を定めてそれに依つて總てを支配しやうとすると、其原則が間違つて居つた時には、社會全體を顚覆しなければならぬやうになりますが、著々歸納的の研究に基いて社會を指導すれば、一部分違つて居れば其一部分だけ省いて、段々進んで行くことが出來る。近代思想の歸納的傾向、事實に基くと云ふことは、ザッと申せば百五六十年來の文明の特色である。それが學問の上に於て、或は社會の利用厚生の上に於て、頗る大なる結果を擧げて來て居るのであります。

そこで此點は、世界全體の文明とか、思想とか云ふ方丈で考へないでも、試に吾々が子供と老人とを比べて見れば、此差別が明かになると思ふ。老人は何事でも自分が今まで得た經驗に基いて、さうして其處に何等かの原則を持つて居る。其原則に依つて物を割出して人を導かう、若くは命令しやうとする。勿論老人の經驗は貴いものである。永い間の一生を經て來た人でありますから、貴いものでありますが、其經驗が纒つてさうして一つの原則、定則となつて、動かないものになつて居る。所謂元老と云ふものが到る處に在つて、元老の巾を利かせる所は其組織が固定して、動かないやうになり、其爲に色々の紛擾を來たすと云ふとは、現に吾々が眼の前に見て居る出來事であります。所謂元老氣質と云ふことは色々の方面にありませうが、一言にして盡せば或る原則、定則を立ててそれに依つて萬事を支配しやうとする。總て自分の接して居る事實を觀察しないで、自分の原則を押立てやうとする傾向があると思ひます。例へば現在教育社會に於てもさう云ふ氣風がある。現在の青年が我儘である、自己の權利ばかり言つて恩義を知らない、自分等の若い時には青年は皆愛國の精神に燃えて居つた、今の青年は利己主義ばかりに富んで居る、それであるからいけない。斯う云つて頻に警戒若くは命令するやうな風が、隨分教育社會にありますが、其言ふ事の內容は結構であるにしても、又さう云ふ原則を出す元の經驗は結構であるにしても、現在の青年の精神がどう動いて居るかと云ふことを見て、それに基いて社會を導かないで、所謂頭から命令を下す樣に青年を叱咤する。併し其結果はどうかと云ふに、青年の方では概して多くの青年は、頭から學校の先生若くは校長に對して、時代遲れ、若くば時勢知らずと云ふ輕侮の念を有つて居るから、外側は唯その命令に服從して居るやうであるが、內面では却つて反抗すると云樣な結果を生じて來る。斯樣な現象は青年が惡いと云へばそれだけであ

るが、惡いにしても現代は殊に其傾向を激發して居るやうな傾向が多いのであります。色々の雜誌に或は小學校教員、或は中學、高等學校の生徒の投書の參るのを見まするとと、今申したやうな種類の學校の長上に對する輕侮の念、馬鹿にして居る風が實に歴々として顯はれて居る。勿論さう云ふ投書を出すやうな人は、不平家であるから出すのでありませうが、是は單に輕侮して居るなら宜いが、之に伴ふて反抗心が頗る强くなつて來る。是は實に社會全體に對して餘程危險な點であると思ふ。要するにそれは元老氣質とでも云ふべき老人の精神と云ふものは、頑として固よりそれが規則的になつて居る。斯樣な規則を以て萬事を割出し而も之を以て後輩青年を押付けやうとする所から、爰に衝突が起るのであらうと思ひます。

之に反して子供の、殊に六つ七つ乃至十二三歳頃までの子供の精神を御覽になれば、非常に違ひがある。能く物を知らない母親が、此子はどうも無闇に根問ひ葉問ひして嫌だと云つて叱り付けますが、あすこが即ち子供のズン〳〵發達する所である。何事を見ても唯は逃さない。其場にぶつかれば其物に關して問を發する。あの『お月樣いくつ』と云ふ歌が其精神を示して居ると思ひます。子供が月を見る、さうするとお月樣が段々大きくなつたり小さくなつたりする。それを觀察して、お月樣は幾つになるかと云ふ問題が一つ起る、「お月樣いくつ」から「それから先き」、「それから先き」と色々考へを及ぼして行く、勿論あの『お月樣いくつ』の歌は空想で出來て居りますけれども、さう云ふ風に一つの何物かを與へれば、夫に就て先づ物を觀察し、さうしてそれを段々分析して行かなければ止まないのであります。昨日私の小供に小さな顯微鏡を與へて、さうして牡丹の花の花粉を見せてやりまするとと、其の花粉がどうして出來て居るか、又花粉を眼で見た時には綺麗であるが、顯微鏡で見た時には綺麗に見えない、それはどう云ふ譯かと、一つ〳〵にそれを問ふて參ります。さう云ふ場合に說明を與へてやるのも勿論でありますけれども、自分で工夫させて見ますと、自分で色々の物を夫から夫と工夫して行く。さうして自分が顯微鏡で見る。僅か六つ七つの子供でありますが、牡丹の花粉を見せてやりまするとと、夫から後色々の物を拾つて來て、一つ〳〵自分で見て居る。其間に適當の指導を與へさへすれば、子供は一人で事實を觀察して行くのである。又例へば言葉一つにしても同樣である。吾々少し年取つた者は、言葉を當り前に斯う話すものだと思つて、議論なしに話して居るけれども、子供に取つては夫が新しい事實であり、新しい經驗であるから、一々夫を聞きたがる。私の友人の子供が四つかの時に、親が朝眼を覺ました時に「あゝモウ夜が明けた」と言つた。吾々は夜が明けたと云へば夫で其事が分つて居ると思つて居るのでありますが、其子供が「夜が何をあけた？」と問ふたのであります。「が明けた」と云へば、何かをあける事だらうと考へるから、玆に斯樣な疑問を惹き起すことになる。さう云ふ種類の疑問はモウ子供は言葉一つに就ても、一寸の音（オン）の違ひでも何でも一々氣を附けて居るのである。例へば日本語には ra, ri, ru, re, ro, の音が無い、少し大きくなつた子供に英語を敎へる時

に、此 ra を言はせやうとすると非常に骨が折れる。所が小さな子供に言はせて見ますと、親なり教師が ra と言うと ra と云ふ音を聞いて居ると同時に、又眼を以てこちらの口の工合を見て居つて、さうして直き眞似をする。物を學ぶ精神即ち眞似をする精神、さうして物を探る精神、それ等が始終働いて居りますから、自分の周圍の事柄に對しても少しも眼を離さないで、注意して事實を研究して居る。それから或る場合には多少歸納的に物を纏めて行くことも出來る。それを適當に導きさへすれば、子供の精神がズン〳〵發達して居る間には、物事に直接に接して事實を觀察して行かうと云ふことに進んで來るのであります。

此點から考へて見ますれば、例へば德川時代の如き、文明が爛熟に達して、二百有餘年の間社會の事柄が總てチャンと整つてしまつて、動きの附かないやうになつた當時は、人間の思想も矢張り同樣に總て原則定則に支配されてしまふ。所謂相變らずで總て運んでしまふ。然るに明治維新後社會の狀態が變つて、進取の氣象の出て來た時には、總て經驗を應用して色々の方面に求めやうとして研究する精神が起つて來たのである。世界の文明も矢張り同じやうな經歷を經て、此凡そ百五六十年來殊に歸納的研究が盛んになつて來たのであります。即ち此對照は人間の一生の上から見ますれば、丁度世界の文明が或る時期には老年の狀態に達して、總てを定則原則から割出すやうな、固定した狀態に居つたのが、夫を打ち破つて、今度は新たなる若い精神が出來て來て、今の歸納的研究となつて居るのであります。是が段々進んで世界の文明がモウ一度老年期に入るや否や、此處にも一つ大きな問題がありませうが。兎に角現代の文明は其點に於て、最早兒童期ではないかも知れぬ、少くとも青年期に達して居る。新たに物を開拓し、事實を發顯しやうと云ふ方面に進んで居る。此精神の中には或は缺點もありませう、併ながらどうしても現代の文明は此方を主として進んで行かなければならぬと云ふことは、殆ど不可抗力とでも云ふべきものであらうと思ふ。

之に對して諸君の殊にお考へを願ひたいのは、宗教も矢張り同樣ではないか。或時には段々に固まつて、さうして原則定則が出來て來て、總て事物を基本から割出して來る時代がある。一つの教を立てるにしても總て演繹論法で立てゝ行く、日本で申しますれば天台學にしても中古の天台學と云ふものは總て今まで學問の仕來りの定則があり、而してそれを應用するだけであつたのであります。西洋の所謂スコラ哲學も同樣であつた。然るに何か動搖變化が起つて、新たなる意義精神の起つて來る時には、何時でも宗教の精神はさう云ふ元から支配して來た原則を場合に依つては無視し、若くはそれに餘り拘泥しないで、さうして自分自身の精神、自分の信仰の滿足を得る方に進んで行く、日本で申しますれば、即ち平安朝四百年の間天台と眞言との定則に依つて固定した型で固めて來た宗教が、社會の變化と共に壞れて、鎌倉時代に新に起つた宗教、殊に淨土門と日蓮主義とは鎌倉時代の新なる宗教の機運を示したのでありませう。即ち淨土門は直接自分の信念に訴へる方の、謂はゞ經驗を重んず

る方で眞宗の清澤氏一派の精神主義は、精神的經驗即ち信念の有難いと思ふ心があるから其經驗を重んじて行く、故に他の所は構はないと云ふ方面に進んで來たものと。今一つの日蓮聖人の宗教は、殊に其前後に亙たれる永遠の抱負は姑く別にしまして、兎に角鎌倉時代の宗教として重要な點は、あの時代の社會の動搖、殊に內に在つては北條氏に對する政治上、社會上の不安があり、外からは蒙古の難が脅しつゝある。其動搖した社會否其動搖に乘じたと云よりは寧ろ動搖を捉まへて、而して其活きたる社會の潮勢に對して警告を與へる。其警告を與へるには矢張り聖人としてはあの時代に於ける研究があつたのであります。建長八年以來の色々の地震、天災、疫癘等の災難に關して、一方には經文の研究があつたのでありますけれども、單に經文の上に於て見てそれを當嵌めるだけでなく、其時の地震彗星などの變化のあることを親しく觀察された。唯然のみならず又夫に伴ふ人心の動搖を餘程剴切に觀察されて居る。所謂『安國論』の初の文句は、明かに其點を現はして居る。人々が色々飢饉疫癘等の起るに就て心が迷ふて、或は五大力を祭り、或は天地の神を祀るなど色々して居ると云ふ事を細かく觀察して、而して斯う云ふ精神的動搖の起るに就ては、之には何物かを與へなければならぬと云ふ樣に進んで來たのが、日蓮聖人の當時に於ける活動の大なる點であつたのであります。即ち其時の活きたる事柄、活きたる現象に對して觀察を爲し、而してそれに對して或る研究を施して行く、此點に於ては鎌倉時代の思想と今の思想と、歸納的研究と云ふことに就ては勿論多少の違ひはありますが、兎に角平安朝時代の宗教に比べて見まして、其處に固定したものを轉じて、活きたる事實に接して動いて行くと云ふ氣力が、餘程盛に動いて居つたと云ふことを見るに足ると思ひます。

然らば今日――宗教の方は姑く別にしても、學問の方即思想の全體が歸納的に活きた事實を根據として進んで行かうと云ふ樣になつて居るのであるから、其間に處して殊に宗教をお傳へになる方は、自分自身の各々の信仰が根本に据つて居ると云ふ事は最も主要であるが。併し信仰があるから唯それを人に與へ樣としても、所謂命令的の原則を本にして進んで往かれたならば、夫は却て勞して效の少い場合が多くはないか、人間の心が事實に基くことでなければ承知しないと云ふ現代になつて居る其場合に方つて、舊來の儘の旗を立てゝ唯原則を敎へて行くのでは、迚も人の心を動す事は出來ない。人心にピッタリ當嵌つて、其思想感情の根本を動かすと云ふ事はどうしても出來ないと思ふ。玆に於てどうしても活きた事實に接する必要がある。即ち先程申しました慈善事業をするにも、貧民の生活の事業を能く研究して進まなければならぬと同樣に、傳道をなさるならば其傳道の相手である人々、青年は青年、婦人は婦人の其精神狀態――全體としては現在の社會の精神狀態、又各々相手になる各個人の精神狀態、是等を研究して進んで行くと云ふことをしなければ、布敎の效果が擧らないと云ふことは明かな事實ではないかと思ひます。要するに歸納的研究と云ふても、全く諸君の御信仰と別なものではないと思ふ。法華經の所謂諸法實相の精神を本當に行つて往くならば、どうしても歸納的研究

てなければならない。一方に根本原則即ち法華經の世界觀は有つてお居でになりましても、其世界觀を唯原則として押立てゝ行くだけでなく、其根本の世界觀が事實に動いて居る事を觀察して、其事實に當嵌めて行くには、即ち諸法實相の本當の活用が其處に必要であらうと思ふのであります。又傳道の上に於て相手の心理狀態、精神狀態の總てを一々觀察して進んでお出でになると云ふのも、要するに敎、機、時、國、序の中の機を察すると云ふことであらうと思ふ。機を察すると云ふことも、平安朝の末から鎌倉に掛けては末法惡世の衆生であると云ふことを機と思つて居りますが、此點に就ても唯さう云ふ概括論でなしに、今日の社會に處して居らつしやる十界十如の理である。今日の社會には惡鬼もあれば善鬼もある。有ゆる種類の者があると云ふことを先づ頭に置いて、さうして其機を研究して行く、此處に本當の所謂敎、機、時、國、序の五綱の活用も存在するのではないかと思ふのであります。

歸納的研究と云ふことは概括して是だけに致しまして、第二の民衆の勢力と云ふ事に就て申上げます。是も亦意味の取りやうに依つては色々になりませうが、之を事實の上から申しますと、現在社會に色々の變化が起つて居ります。其中で一番有力な原因は、要するに工業組織の發達であると思ふ。即ち今から百三十年ばかり前に蒸汽機關の發明があつて以來、總ての生產事業が非常な變化をなして來た。則ちそれまでは各々の人が自分の道具を以て仕事をして、物を作つて居た狀態である。然るに機械が出來るに從つて總て大仕掛にやらなければならぬ。そこで所謂資本主として大仕掛なる資本を集めなければならぬ。勞働者は勞働者として又澤山の勞働者が分業をして、互に助け合つて行くと云ふ樣になつて居る。此勞働者と資本主との關係に就ては、段々色々の困難な問題も出て來て居りますが、兎に角さう云ふ生產機關の變化、即ち工業組織が非常に變化した結果、又それに伴つて交通の便が開けた爲に、昔日では奢りであつた事柄も、今日に於ては大多數の人民に取つては當り前の事に段々なつて來た。近い例が德川時代には硝子のコップ一つでもあれば、所謂ギヤマンと稱して非常に尊んだものであるが、今日は日常の道具になつてしまつて居る。昔しでは襦袢の下に毛織の襯衣を着るなどと云ふことは勿論夢にだもしなかつた。然るに交通が便利になつて大規模の工業が出來るに從つて、毛織の襯衣などは容易く得られるやうになつて來た。段々さうして往くに從つて、昔は毛織の襯衣を着るのが一種の奢りであつたのが、今日は毛織の襯衣でなければ冬は凌げないと云ふことになる。さう云ふ工合に總ての物が全體に及ぶやうになつて居る。勿論一方には貧富の懸隔も甚だしくなつて居りますけれども、併し全體として見れば、社會全體は何處の國でも生活の程度が進んで居る。生活の程度が進みますと同時に、矢張り色々欲望と云ふものが生じて來る。又勞働者に致しましても、其生活の程度が進むと共に、單に物質の欲望が進むだけでなく、精神上の欲望も餘程進んで居る。例へば此社會全體が進んで來た結果として、敎育の普及が最も著しい。そこで如何なる勞働者て

あつても大抵書物を讀むことが出來るやうになり、或は娯樂機關も出來るやうになつて來る。殊に日本でも漸次工業の組織が進んで參つて、さうして勞働者の爲に利益を圖るやうになりまして、休暇の如きもモット定期的にするやうになる。そこで時間の餘裕が出來る。時間の餘裕が出來れば其間或は活動寫眞に行く者もありませうが、又は書物を讀む者もある。或は又教會へ說教を聞きに行く者もあれば、又圖書館で書物を見る者も出來る。兎に角單に物質上だけでなしに、精神上にも色々な方面に於て、今までは一部分の人間にしか得られなかつたものが、社會の大多數に普及すると云ふことはどうしても是は免れないことである。勿論或る一部分の批評家から申せば、さう云ふ工合になつて下層人民が生意氣になるからいけないと言つて、憤慨する人もあるやうであります。勿論物質上並に精神上の欲望が進むに從つて、其中に弊害も生じて來る。書物を讀むことが多くなると云ふ中には、危險な思想を傳へる書物を讀む者も出て來る事ではある。是は固より免れない。併ながら全體として見たならば、其結果は矢張り社會の大多數の人民の進歩と云ふことになつて來るのであらう。例へば宗教の上で申しますれば、彼の基督教では聖書會社と云ふものがありますが、聖書の賣れる高と云ふものは實に年々何百萬になるといふ事一つでも明白であらうと思ふ。それ以外に、又小冊子を頒つて居りますが、其小冊子の出る高と云ふものは非常なものである。今日日本でも矢張り同樣でありませう。例へば日蓮聖人の御書の如きも、或は御書が難しいならばモツとそれを簡易に書いたもの、若くは書直ほしたもの、さう云ふものが出ると云ふことはどうしても多くなる。一方には危險な若くは惡思想を傳へる書物も一般には傳はりませうが、又一方には善良なる感化を與へるものも多く傳はるのである。例へば彼の小川泰堂氏の『日蓮大士眞實傳』の如き、德川時代ならばあの木版本を得るには大分な金が要つた。所が今は輕微な小さい活版本で出來て居る。私が其輕微な活版本を得たのは、本所のステーションで買つたのでありますが、一寸ステーションを通る時に其處にあつたから買ふ氣になつたのでありますが、此頃本所の停車場の本の賣場を見ますと、所謂活版本が盛んに賣れて居ります。其處に恐ろしい危險の點もあるが、併ながら又同時に善いこともある。或は四十七義士物語にしても同時に出て居て、僅か拾錢か貳拾錢で買ふことが出來る。兎に角危險もあるが、危險があるからと云つてそれを恐れて壓迫することは到底出來ない事である。一方に物質上にも精神上にも、多くの人の欲望が盛になつて來る。さうして其生活が進んで來る。或は同時に奢侈も進んで來るであらうが、併し其狀勢を巧く指導して進んで行くのが、即ち宗教家或は社會指導者の責任だと思ふ。

惡い物があるからと云つて總てそれを壓迫する——例へばさう云ふ安い出版物には危險の物があるからと云つて、さう云ふ安い出版物を壓迫して出版禁止を命じやうと云つても、それは到底出來ない。惡い物も幾らも出て來る。極端の物は何かの方法で之を制しなければなりませぬが、中々是は容易に制する事が出來るものでない。例へば現今では非常に肺結核が殖えて行くが、今日は直接結核菌を撲

滅するに安全にして且つ確實なる方法は無い。そこで之を豫防するには體力を盛んにし衞生狀態を好くして、結核菌と競爭しやうと云ふのが今の結核の治療法である。社會にしても矢張り斯う云ふ點が隨分ある。恐ろしい危險の物も出て來る代り、それに對抗する善良な力も出て來るのである。此間殘くなつたメチニグコフの研究になれる――人間の衞生狀態に對して非常に大切な影響を與へた發見は、一番初は膿の研究であつたのであります。吾々が傷をして洗はずに置けば膿が出來ます、此膿と云ふものは何だと云うと、傷があると其處へ何物か外部から黴菌が這入つて來る。黴菌が這入つて參りますと、血液の中にある白血球が其黴菌を攻擊してそれを捉へてしまふ。人間の身體の生活力さへ旺盛であつたならば、それを捉まへて外へ出してしまふ。其白血球の運動は非常に盛んなもので、外から來た黴菌があれば、白血球が捉まへてそれを覆ふてしまふ、さうして自分も死んでしまふ、それが膿である。此點が明かになつて、そこで病毒に對して非常に大きな仕事が出來るやうになつたのである。さう云ふ工合に人間の身體には何物か害のある物のあるのは、どうしても是は已むを得ない。幾分は已むを得ないからさう云ふ危險に接しないやうに出來れば結構であるが、人間の身體と云ふものが生きて居る限り、又黴菌が其處等に一杯滿ちて居る限り已むを得ないのである。然らば夫を唯恐れてはいかぬ。恐れるのみでなく、黴菌が來ても捉まへてそれを殺して吐き出す方法を講ずる、即ちそれに對抗するのである。惡が盛んになれば盛んになる丈、夫に對抗する所の善の力を殖やさなければならぬと云ふことになつて來るのであります。即ち現代の社會の狀態が色々に進んで變化をして來て居ると云ふことは、工業組織の發達の結果、一般人民の總ての點に於ての欲望が盛んになつて來て居ると云ふことであらうと思ふ。

然らば其欲望の盛んになつて來たと云ふ事に就ては、恐るべき點は之を成るべく制止しなければなりませぬが。消極的に唯制止すると云ふ方法でなしに、積極的に其惡を制止する所の善の力を先づ增して來なければならぬのである。所謂煩惱即菩提と云ふのも此處ではないかと思ふ。惡いものであるからと云つて、徹頭徹尾何處迄も惡いと云ふものではなからうと思ふ。例へば人間が身を誤るのは男女の間の痴情でありませう、併し痴情が身を誤るのは其痴情の濫用である。夫を正しく導けば則ちそれが人間世界の根本になつて來るのである。もつと簡單に言へば、食慾と云ふものは人間に無ければならぬ。併し食物も餘り食慾ばかりに馳せると胃弱を起すと云ふやうになつて來る。惡い物であるから夫を無くすると云つて、例ば硬い物を食べると惡いからと云つて、軟かい物ばかりを食べて居つたならば人間は弱くなつてしまふ。硬い物を食べてもそれに對抗し、それを消化するだけの力を增して來なければならない。煩惱即菩提である以上は、煩惱が一方に於て盛になれば、其煩惱の中にも矢張り菩提の光はある。所謂煩惱の中にも佛の慈悲の光は輝いて居ると云ふことを知る。其處は即ち根本の信仰でありますが、其信仰に依つて全體を導く、社會全體に對して指導を與へると云ふ。茲に殊に今

日以後の諸君の御布教の上に於て大切なる點はありはしないかと思ふのであります。

即ち要するに民衆の勢力が殖えたと云ふことは、言葉を換へて言へば今までの如くに一部分の、若くは一階級の人だけが、物質上にも或は精神上にも特權を占めて行くと云ふことは出來ない。社會民衆が共々に進んで行くと云ふ方針でなければならぬ。此點は申すまでもないことで、即ち鎌倉時代の宗教も矢張り此處に在つたのであります。平安朝時代には宗教上の惠みに與らうと思へば、所謂尊き僧を澤山集めて、大仕掛の御祈禱をする。經を讀むにも非常な貴族でなければ經を讀むことが出來ないと云ふやうな狀態であつた。さう云ふ貴族的宗教が社會の變化と共に壞れて、さうして鎌倉時代に出た淨土門にしても、日蓮主義にしても――禪宗は姑く別でありますが、此二つは日本に出た宗教であります。さうして殊に日蓮主義は平民的宗教として出たのでありますが、丁度それと同じやうに、而してそれがモット其以上に一層大きな大仕掛の變化が今日の社會には起つて居るのである。今までのやうに一部分だけで滿足したり、又は社會が互に分れ、或は一般の階級の上に於て、或は信仰の上に於て分れてしまつて、德川時代のやうに分離割據して滿足をして居る狀態ではなしに、現今は社會一般の勢力が起つて來て居る。又同時に總ての方面の階級の差別又は區劃と云ふものが段々破れて、其間の融通が盛になつて來て居るのであります。階級の區別も、又は思想信仰の區別も、一般の聯合や或は融合を生ずる狀態になつて居るのであらうと思ふのであります。

然らば今後此點に應じての傳道或は宗教問題としては、矢張り宗教運動が殊に宗派的でないやうに段々なりつゝあると云ふことは、殊に御考慮を煩はしたい點であると思ふ。此點に就ては申上ぐべき事は澤山あるが、今は唯外國の例を述べますが、基督教は御承知の通り幾つもの宗派に分れて、其弊に苦しんで居つた。そこで宗派が一つ分れると云ふのは、どう云ふ理由であるかと云ふことを尋ねて見れば、二百年前に出來た宗派、三百年前に出來た宗派、若くはイギリスで出來た宗派、又フランスで出來た宗派等、各々其時には分れる理由と必要とがあつて分れて一派を成したものであるが。乍併今日になつて、果して其點が尙ほ存在して居るや否や、其宗派の特色を何處までも立てゝ、何時までも守る必要があるや否やと云ふことは、此十年或は十四五年來、基督教の思想家の中の大問題で、今日も問題でありますが、どちらかと云へば今日は餘程融合の方に進んで居るのである。例へば日本に參つて居りますバプテスト教派、あの派の主張する所は、基督教の信仰を得る印しとして、他の宗派は洗禮に水の露を頭へ垂らす丈であるが、夫はいけない、水に漬つて洗禮をしなければならぬと云ふ理由で、其點を主張して三百五十年ばかり前に一派を成したものである。然るに今日になつて見れば、水を頭から一滴落すのと水に漬るのとが、信仰を得る印しとしてどれ丈違ふかと云ふことを考へて來て、其點に於て今日はどちらかに一つにしてしまふか、若くはさう云ふ違ひがあつても、どちらでも構はぬ。兩方共其他の方面に於ては基督教として聯合して進んで行つて宜いてはないかと云ふ方に、

進んで參つて居るのであります。此問題は教會聯合の問題として、十數年來の問題である。今日は色々の點に於て聯合の形勢に進んで參つて居るのである。さうして宗派としては各々舊の形を保ちながら、其宗派間の聯合運動と云ふものが餘程進んで居る。即ち基督教青年會の如きはその一つである。どの教派の者でも青年會を組織して、青年間の教育事業、社會事業並に宗教的感化を與へるやうになつて居る。或は日曜學校の如きも同樣である。各々の教派はそれ〳〵多少の特色は有つて居りますが、日曜學校の聯絡としては皆世界中一致の聯絡を取つて居る。さうして先程申しました研究を基にして『宗教教育』と云ふ雜誌を出して、日曜學校の教授に關する研究をして居るのであります。子供の精神の發達、それに對する宗教の教へ方、それらの色々の教師の經驗、或は方案、それ等を大成して其結果を全體に供給する。教科書から方法から總て其研究に基いたやり方をやつて居る。各教會或は諸所で日曜學校の教育に從事して居る者が其結果を貰つて、夫を實際に當嵌める場合に、又自分が色々研究し且工夫して、又中央に報告するやうにして聯絡を取つて居る。それであるから日曜學校大會と云ふものは、毎年世界全體の大會を開いて居る。戰爭が無ければ一昨年も日本で開くやうになつて居つたのでありました。斯樣な種類の聯合運動、其聯合運動は單に或る目的を以て金を集めて、或る主義を宣傳すると云ふ目的の聯合だけでなしに、精神を同じくする者が共に力を協せて研究もすれば、組織按排も共にすると云ふやり方の聯合が出て來て居る。即ち宗派は舊の形で、各々會計或は制度は別にして居つても、其間に一つの纏つた精神が出來、又其事業が出て居る。此點は今申しましたやうに、どうしても社會が變化して社會の方面では色々の階級とか或は信仰などの差別が、今までのやうに割據的でないやうになつて來た。それにも拘らず宗教のみが獨り、今までどれだけの必要があつて分れたとしても其の固有の型を取つて、それを墨守して居つて自分だけで各々固まつて居つたならば、恐らくは宗教と云ふものは全く社會から退け者となつて其の一つの階級があちらこちらに居殘てしまふことになるであらうから。さう云ふ工合でなしに、宗教家は社會の一部分として働くばかりではなしに、宗教が社會全體を指導をして行かうとするには、どうしても此社會全體の機運に乘ずると同時に、又其の機運を今一歩進めて行つて、謂はゞ今申しました平民主義或は平等主義——と申しては語弊があるかも知れませぬが、私は之を稱して假に結合主義と申して宜からうと思ひますが、總て社會の色々の區別を打破し、社會の勢力を結合して進んで行くのが尤必要であると思ふと。現今は斯る方面の精神と活動とが盛んになつて居るから、此の精神活動に後れたならば、何れの宗教にしても何れの教派にして全く社會の落伍者となつてしまふと云ふ覺悟をしなければならぬことゝ考へます。

尙ほ是等の點に就ての事柄を色々申上げる點がありますが、今は唯だ一寸御挨拶を申上げると共に、前にお約束を申上げて置いたことが出來なかつた點を謝し、而して豫て諸君に申上げたいと考へて居つた事の一端を申述べた次第であります。

尙ほ最後に重ねて諸君に厚くお禮を申上げます。母の今度の不幸は不幸でありましたが、其不幸の結果として諸君から斯う云ふ御厚意を頂戴して、今日殊に母の爲めに御回向を頂いたと云ふことは、私に取つて又母に取つても實に世間の通常の悅びでない悅びでございます事を深く感じまして謹で謝意を表する次第であります。

（完）

宗教意識の發達

日蓮宗大學講師　高島平三郎　講述

宗教意識の發達

日蓮宗大學講師　高島平三郎講述

宗教意識とは、普通に云ふ宗教心であるが、此の宗教心と云ふものが本來誰にても有るものか、或は生れてから後に發達するものかと云ふことに就ては、所謂宗教家又は哲學者の間には自ら一定の說があります、今日の科學から之を研究すると、樣々な說が出て來るのであります。或學者は、

『宗教意識即ち宗教心と云ふものは一種の本能である。恰も鳥が巢を作ると同じように、人間が生れながらにして皆持つて居る、教へずして現はれて來る本能である。』

と稱してをる。かやうな說を主張する人は澤山ありますが、最も名高いのは佛國のルナン(Renan)である。此人はもう餘程以前に故人になりましたが、耶蘇傳を書いて名を成した人であります。併し是はもう昔の人でありますが、今日も矢張り宗教心と云ふものは生れながらにして持つて居る本能であると、云ふ樣なことを唱へる人があります。それは米國のカーク、パトリック(Kirk Patric)と云ふ學者。是は兒童心理などを研究して居る學者で、未だ世間に知られて居る程の大學者ではないが、一種

の科學的な立場から心理を研究して居るが。此人も矢張り宗教心は一種の本能であると云ふ說を唱へて居ります。併しながら此本能と云ふ言葉、並に宗教心即ち宗教意識と云ふ言葉の意味に依つて、生れながらにしてゞあるか、ないかと云ふ議論が色々に分れて來ます。それ故に今それを漸次に說明して行かうと思ひます。

文明國に於て一定の發達を遂げた所の成人、即ち大人が持つて居るような、所謂成立した宗教、即ち成立宗教に對する信念、絕對の信念、さう云ふ宗教心が人間全體に生れながらにしてあるとは、今日にありましては學術が認めないのである。然るに古にあつては、生れながらにして神を崇拜し、佛を尊信する念が何人にも、野蠻人の間にすらあるように考へて居りました。大概の範圍に於て調べて見ると、「成程野蠻人の間にも、或は石を拜むとか、或は木を崇めるとか、或は天地山川を拜むとか云ふようなことがあつて、宗教心があるように思はれる。」然るに十七世紀から十八世紀にかけて、世界の隅々まで段々航海が進んで、地球上のあらゆる國に棲んで居る人間を調べて見ると、それは甚しい間違であつた事が發見されました。中には宗教心どころではなく、さう云ふ人間以上のものを信ずるなどゝ云ふ心がまるでない、拜むなどゝ云ふ心の絕對にない、少しも動物と違はないような下等な人種をも發見しました。それ故に今日では、文明人の持つて居る成立宗教に歸依すると云ふような複雜な心は、生れながらにして人間が持つて居るものでないのであつて、それは後に至つて段々に發達して來るものであることが分つて參りました。

然らば其發展して來るのには、如何なる順序に依るのであらうかと云ふと、それは約說原理と云ふことがあつて、宗教心はこの原理に從つて發達して來るのである。宗教心のみならず、あらゆる我々の精神は、皆この約說原理に從つて次第に發達して來るが、宗教心も亦全體に於て此順序を採るものである。然らば約說原理とはどう云ふものかと云ひますと、今日の自然科學即ち進化論、生物學等の說く所に依りますと、吾々人間が發達しますのには、一番始めに下等の生物、例へば單細胞の生物、單細胞の生物と申しますと、溝などに居る殆んど肉眼では見えない、卵の白味即ち蛋白質のやうな物質のみから出來て居る「アミーバ」のやうなもの、「アミーバ」の中にも色々の種類があつて、病氣の原因などになりますものもありますが、かやうな肉眼では見えない、顯微鏡でなくては見えないものが、矢張り一種の生物であつて生活、即ち活動して居ります。それが次第々々に進んで來まして、此單細胞の生物が複細胞の生物になります。即ち一つの細胞から出來て居たのが、澤山の細胞が集つて出來る生物になつて來ます。此複細胞の生物の中には又澤山の種類があつて、或は進んでは魚となり、更に進んで兩棲類即ち蛙や龜のやうなものになり、更に進んで鳥類となり、鳥類が更に進んで獸類となり、獸類が更に進んで人類となると云ふように、段々と極めて下等な生物から高等の生物になるので、最も上が人間になつて居るのであります。然るに其人間に至るまでの間に進化の順序を、人間は

各個人の生涯に於て一通りすつかり繰返すのであります。極めて簡單に此處に脊髓動物に就て其順序を示して見ますと、一番下をナメクヂ魚と致します。これは極めて小な蛞蝓(なめくぢ)によく似た蟲でありまして、海中の砂の中に居りますが、極く下等な蟲であります。それが一番下てその腦髓は、殆ど平て紐のやうになつて居ります。が、魚になると、大腦が餘程膨れて來ます。兩棲類になると更に膨れて來るが、次に鳥類になると一層進んで來ます。獸類から人間となると更に非常に腦髓が發達して參ります。

かやうに一部分だけの發達をとつても、下にはナメクヂ魚があり、それから魚があり龜があり、鳥があり獸があつて、最後に人間に至るのであります。此有樣は丁度人間の心に於て十界互具——是は私が皆樣に申しますのは所謂釋迦に說法でありますが、十界互具の說に比較することが出來ます。吾吾の心の中には魚の心もあれば、蛙の心もあり、鳥の心もあり、獸の心もあるのであります。人間の心は皆一樣ではありません。同じ人間の中にも大體別けると、極めて野蠻な種類と、半開の種類と、文明の種類とがあります。無論吾々は一番高い發達を遂げた、即ち文明國に生れた文明人てあつて、然も最も高い宗敎をもつて居る人間であるから、一番人間の中で高いとします。さうすると約說原理に依れば高いには高いけれども、是だけのものは皆含んて居る譯て、それを皆包容して居るのであります。即ち文明人も一代の中に野蠻人から半開人、さうして文明人と云ふ進化の階段を繰返すのであります。かやうなことを十九世紀の末に至つて見出しまして、獨逸のヘッケル(Hecker)と云ふ、今も未だ八十六歲を以て生きて居りますが、此學者が此事を說きました。さうして今日先づ一般に自然科學者の間に認められたるようになりました。即ち自然科學の中にも此約說原理と云ふことを應用して居るのであります。

宗敎心も矢張り同樣で、始めのナメクヂ魚や、魚や、蛙に宗敎心がある譯はないけれども、鳥の階級、獸の階級になつて來ると、幾等か宗敎心の萠芽、或は種子、學術上の言葉で云へば「エレメント」(Element)即ち宗敎心の要素が出來て來ます。後に段々お話致しますが、獸の階級になれば尙更であります。況や人間の階級になれば、野蠻人、半開人と雖も、今吾々のもつて居るような宗敎心はなくとも、其宗敎の要素と云ふものは確にあります。さうしてそれが野蠻人・半開人と進んで行くに從つて、段々と纏つて來ます。他の道德心や美術心と同樣に、宗敎意識と云ふものの要素があつて、それが段々と纏り、最後に眞の信仰を得た時に、確定したものになつて來るのであります。

私の此度お話を致します事に就て、此約說原理と云ふことを御承知を願つて置きたいことは申す迄もありませんが、それのみならず、今後總て精神の發達と云ふことに就て、諸君が何か必要があつてお考へになる場合に、常に此約說原理を基礎に置いてお調べになりますと、少くとも今日の科學者の說く精神の發達と云ふことが、よく分るのであります、無論十界互具と云ふことは所謂主觀的のこと

で、科學等を超絶した哲學も哲學、大乘の哲學で、非常な宏遠な學説でありまするから、此處に説くようなことに直ぐ當嵌めることは出來ませんが、其道理は少しも變らないのであります。吾々人間の中に皆斯う云ふ階級が包含されて居ります。事が少し滑稽に亘るようでありますけれども、其中に確に眞理が含まれて居ります。であるから反對に人間が段々墮落して來ると、次第に最も上のものから取れて來ます。道德、宗教、科學等色々のものを持つて居るのが、最後の發達をした高い、一番上の文明の階級の人間でありますが。それから人間が墮落すると、先づ第一に道德心、宗教心の如き高いものが無くなつてしまひます。それで丁度半開人のやうになつて、唯小才が利いて自分を利するようなことばかりやります。それも壞れてしまふと今度は野蠻人になります。野蠻人の階級になると人を殺したり、或は人の物を奪つたりして、それを何とも思はずに酷い事をします。それも遂に破れると今度は、獸類の階級になつて喰付き合つたりしてまるで人間の型はなくなつてしまひます。終には生きて居ると云ふだけだ、殆んど人としての存在の意義が無くなつて來るのであります。是は此處から近い巢鴨へ行つて見ると幾等も御覽になれます。此文明の階級を取去つた半開の階級に居る者もあれば、野蠻の階級の者もあれば、又獸類の階級になつて、嚙付いてしようがないから一室に入れて置くと、木を嚙る、戸でも柱でも何でも嚙ります、まるで野獸と同じな、哀れ果敢ない人間が居ります。是は病的の人であるが病的でなくとも普通の人でも時にかやうな風になる場合があります。即ち非常に酩酊した場合などがそれで、酩酊すると一番始めに道德心や宗教心等が無くなつて來ます。さうして分らぬことを云つて、自分勝手のことばかりやるようになつて來ます。終には喧嘩をしたり、喰付き合ふようなことまでもやり出します。これは一時的の發狂であり、一時的の墮落であります。それが翌日になると又、自分でもどうしてあのやうなことをしたかと思ふようになります。丁度今の十界互具の理屈から云つても、畜生界や餓鬼などが出て來ると同樣に、人間の高い所が次第に崩れて來ます。是は餘程面白いことであります。進んで行くのに順序を經て進むと同樣に、墮落して來るにも段々上から落ちて來ます。吾々の頭の中には或部分には猿も這入つて居ようし、或は鳥も這入つて居ようし、或は蛙も這入つて居ようし、色々のものが這入つて居ります。而も最後の吾々の道德・宗教・科學・哲學など云ふような精神作用が、ちやんと是等を抑へ制して居ります。所謂管制――管理を受け制裁を受けて居ります。お互に高いものがあつて管制を受けて居るので、其管制が取れると滅茶々々になつてしまひます。それで此順序が分れば、諸君が子供に、或は子供でなくても子供同樣精神の發達しない者に、道をお説きになる場合、突然難かしいことをお説きにならないが宜しいので、それでは迚も彼等には分らないのであります。矢張り次第に――かやうな野蠻人・半開人と云ふ順序に、分る範圍に於て要素を養つて行つておやりなさると其要素が纏つて次第々々に導かれて、最後に本當の宗教心が起ることになつて來るのであります。

然らば其宗教意識の要素となるものは何であるか。是も昔からの學者に色々の說がありまして、色々に說かれて居るのでありますが、粗ぼ一致して居る點もあります。今此處に申上げる四・五の精神作用は、如何なる宗教にも之を省くことの出來ない要素であります。而もそれが幼い子供、或は更に進んでは動物に至るまでも存在して居るのであります。

一、恐怖

其宗教要素の第一は、申すまでもなく恐怖と云ふことであります。古から恐怖が宗教の基であり、驚きが哲學の基であると云ふことを申します。即ち

『驚きが哲學の基である』。

とは遠く希臘の昔にプラトン（Platon）が云ひ、續いて其弟子のアリストートル（Aristoteles）も亦云つて居ります。それから羅馬に行きましてヴェルゲリウス（Vergilius）ルクレシウス（Lucretius）などは

『恐れが神を造つたのである。云ひ換へれば恐れから宗教が出て來たのである。』

と云ふことを述べて居ります。是は非常に面白いことで、詰り驚くと云ふことゝ恐れると云ふことゝは殆んどくつ附いて居て、分けることが出來ないものであります。今例を以てお話しますと、生れて數ヶ月にしかならない嬰兒が見つけない人を見ますと、暫く其人の顏を見詰めて居ります。さうしてそれから泣き出します。是は諸君が試みて御覽なさい、必ずさうであります。一寸顏を見たばかりで直ぐ泣くと云ふことはありません。暫くの間眺めて居て、さうして泣き出します。其眺めて居る時は即ち恐れた時であります。驚くと云ふのは、自分が平常見馴れたり聞き馴れたりして居らぬ者、平常馴れないものに出遇ふと精神の狀態が急に變化します。一體人間の精神と云ふものは始終進んで止まないもので、始終變化して居ります。

是は佛敎でも申しますように、所謂『心は無常なり』で心と云ふものは常無きものでありまして、絶えず變化して止まないのであります。其變化して止まないのが、普通の場合、即ち當り前に始終見たり聞いたりして居るものであれば、心の流れは振動しつゝずつと平均して行つて居ります。それが驚いた場合には急に下ります。詰り是の下る場合には驚くのであります。或は又進んで居たのが驚く時に急に上ると云つても宜しいのであります。此上つたり下つたりする場合には何時でも驚くので、子供が母に抱かれて何も變つた刺戟のない處へ突然變つた人が來ると、急に心の狀態が變るのであります。其時が即ち驚いた時であります。驚いて能く見て居る中に何だか恐しくなつて、非常な不安な狀態が起り泣くと云ふことが起つて來ます。其處で驚くと云ふことゝ恐れると云ふこととは、人間の天性として元からくつ附いて居ります。非常に面白いことで、宗教と哲學とが離れることの出來ないと云ふことは、心の發達の最初に於てちやんと極つて居ります。哲學を離れて宗教根底を十分に說く事は中中出來ません。又哲學は宗教を離れてしまつたならば、其始めの唯驚いたと云ふ時ばかりであつて、

恐れと云ふ活動の力になるものが無くなつて來ます。今まで說いて居たような哲學ばかりでは幽靈のやうなものである。骸骨のやうなものである。と、云ふことを古人が申しましたが、實に其通りであります。血や肉が出て來るには、必ず宗教でなくてはいけません。即ち恐れでなくてはいけません。恐れと云ふものが出て、信仰の基礎が出來て來るのであります。かやうに恐れと云ふ心的作用が宗教意識の要素の根底となります。

然るに恐ればかりでは決して宗教は出て來ません。恐れた許りでは怖い〳〵で引込んでしまつて、少しもそれから發動的のものが出て來ないのであります。然るに此處に恐しいと云ふことがあると共に、今度は其恐れを逃れることの出來ると云ふ望み、希望が之に伴つて、始めて宗教と云ふものが出來て來ます。其事は之を前に致しましては、英吉利の哲學者でヒユーム(Hume)と云ふ名高い唯理論者が云つて居ります、即ち

『昔の人は恐れが神樣を拵へると云ふけれども、唯怖いばかりでは迚も神樣に對して拜むとか、佛樣に對して拜むと云ふことは出來ない。或は神に願ひ或は佛に願へば、其恐れを取去ることが出來ると云ふ希望、即ち恐れに望みが加はつて、宗教心と云ふものが出來て來るのである。』

と、云ふことを說きました。又最近には佛蘭西のサバッチエー(Sabatier)と云ふ學者が、是は宗教哲學に就ては權威(オーソリティー)(Authority)となつて居る人でありますが、矢張り同樣の事を云つて居ります。即ち

ヒユームと同じやうに、

『宗教心と云ふものは恐ればかりでは出來ない。恐しいと云ふのは怖いことである。怖いと云ふことは自分が害せられる、自分の生命なり或は自分の精神なりに威嚇を與へられるのである。驚かされて自分が思ふように出來ないから、其怖いものを退かして取去つて貰ふと云ふ、其處に願が出來て來て始めて宗教心になる。』

と云つて居ります。處が其恐れと云ふものは子供の精神的要素の中最も早く現はれる感情の一つであります。一體人間の心の中には七情が現はれますが、其七情の中最も早く現はれるものは何であるかと云ふと、即ち恐れであります。先刻申しましたように、未だ生れて間もない子供が、少し强い音がしても、變つた物を見ても、直ぐに泣出します。子供は多くは恐れに依つて泣出します。それで此恐れを利用し、之を適當に保護して行くことが非常に大切であります。此恐れの利用から人間の性格を害するようにもなり、又人間の心に基礎を與へて立派な宗教心を造つてやることにもなるのであります。

實は此恐れの取扱ひ方に就てお話しても、餘程の時間を要するのでありますが、極めて簡單に申上げて見ますと、此取扱ひ方を誤つた爲に宗教心が出來ないどころではなく、人の性格を害してしまふようなことが少からずあります。現にかやうな例がありました。一昨々年になりますが、德島縣で商

業學校の教授をして居る人の子供に、當年十二歳になる少年がありました。それが徳島市のことであります、郊外の山か何かへ遊びに行つたのでせう、すると知らずに歩いて居て蛇を踏附けたのです。何かよい物があるかと四邊に氣をとられながら歩いて居たので、蛇が路傍に出て居たのを知らずに踏附けた。蛇は驚いて足に卷き附く、何か足に當つたと思つて見ると、蛇であつたので非常に驚いて、驚くと同時に恐しさに殆んど氣絶せんばかりになつて、眞蒼な顔をして僅かに意識を保つて逃出しました。處がそれが原因になつて其翌日から其子供の性格(キャラクター)(Character)が全く變つてしまつたのであります。人間の性格と云ふものは、例へば非常に元氣で自分が爲さんと決した所は何處迄も進んで爲して行くとか、或は非常に怯懦で僅かな事にも直き恐れて意志が弱いとか、色々に現はれて來るものでありますが、其少年は元來大變活潑な元氣のある子供で、學校でも勇氣がある子供だと云はれて居りました。處が其事があつて以來、即ち非常に驚き、非常に恐れた其一つの打撃があつた爲に、整日から丁度女で申しますと「ヒステリー」(Hysteria)のやうになつて、學校に行けと云つても行きません。どうしても行かないで一室に閉籠つて坐つて居て動きません。さうして蛇のことを考へて非常に沈鬱になつて居て親がもう蛇は居りはせんから學校に行けと云つても——お父さんが附いて行つてやれば漸く學校へ行きます。教場では稽古をするが外へ出ると沈んで友達と一緒に遊びもしないので、親が大變心配して是は信心の力で治すより外仕方がないと、親が自ら佛に念じどうか子供の病氣を治したいと云つて居ると云ふことを、徳島へ行きました時親しく其親の友人から聞いたことがありましたが、かやうな例は未だ外にも幾らもあります。であるから此恐れと云ふものを適當に使はないと、宗教心が出るより先きに精神が萎靡してしまひます。それ故是は大變大切なことであります。併し又此恐れと云ふものを全く無くしてしまつて、一切恐れと云ふものを無いようにすれば、人間の性格はまるで崩れてしまひます。總て吾々の固い人格の基礎或は性格の根底が出來るのは、適度に恐れと云ふ心があるからであります。何も恐しいものが無いと、詰り人が見さへしなければ、或は警察が咎めさへしなければ、裁判所へ訴へられさへしなければ何も恐しいものはないから、神も佛も何も見て居る者はないから、何でも惡いことを平氣でするようになつてしまひます。富豪の家庭に育つた者などは、少しも怖いものがなく、親は大變可愛がつて少しも小言を云はないし、先生も遠慮して餘り叱らないから、勢ひ我儘一杯に育つて何も怖いと思ふ者がありません。從つてかやうな者に宗教心を養ふことは、非常に困難なことであります。是は皆樣が御經驗でありませう。却つて宗教心は何時でも恐しい經驗に出合つた者、神や佛に臨むことは非常に難しいのであります。さう云ふ者が眞に畏敬の念を以て、非常に怖いことに出合つた者に起り易いのであります。從つて西洋でも難船に出合つた者は大概神に歸依します。無神論等を唱へて居る者も、船に乘つて長い航海の間に暴風雨に遇ひなどして何にも頼る所がない時には矢張り跪いて神を拜むようになつて、それがやがて宗教心を起すことになるのであ

ムヤーム、ラメーウィ
ハ神、

ります。御承知の進化論を唱へた英吉利のチャーレス、ダーキン(Charles Darwin)は無神論者であると云ひますが、實は無神論者でも何でもなく、唯神とか宗教とか云ふことに就て、殆んど心を寄せる暇もなく、自分の研究する學問に沒頭して居た人であります。然るに彼が「ビーグル」號と云ふ軍艦に乘つて、地球を一週して研究して歩く中、南亞米利加に行つて大森林——日本の全體の領土を三つも四つも加へたやうな大森林がズーッと續いて、眞に人跡未蹈、人間の這入つた事もない、斧や鉞で木を伐つたと云ふ事の曾つて無い所へ行きました。そして見る限りズーッと林で、何處まで其が續いてゐるのか分らないような中に立つた時には、流石のダーキンも覺えず大地に平伏して、「おゝ神よ」と云つて祈つたと云ふ有名な話があります。是はダーキンばかりではなく、私の知人で裁判官を長くして居た人がありますが——かやうなことは却つて事實の方が宜しいと思ひますから、其人の名も出してお話しますが、岡崎延正と云つて、長らく長野に檢事をして居りました人であります。私共よりもつと大きな身體をした、眞に古武士の風のある人でありまして、物を云ふにも音吐朗々鐘の如しと云ふような、非常に大きな聲を出して、實に活潑で如何にも强い人でありました。平常別に大變深い信仰も持つて居なかつたが、人情には厚い人でありました。其人が或時友人と一緒に富士山に登りました。登る時には一緒であつたが、歸りには別々になつて友人は甲州の方へ降りて歸つて行く、自分は信州の方へ降りて來ました。其時にもう大分遲くなつて、殊に友人とは別れ天上天下唯獨り、自分ばかりになつてしまひました。絶頂に登つて淺間神社の前に來て見ると、仰げば茫々たる青天、下は雲煙渺茫の間に山々が見えるだけで何にもありません。眞に孤獨の悲哀とでも云ふのか、何とも云ひ知れない心持ちになつて、平生淺間樣は何の神樣だかも知らない、お辭儀も何も碌にしたことのない氣の大きい男が、鳥居の前に平伏して何と云ふこと無しに拜んだと云ふことであります。是は本人自ら私に告白した話でありますが、かやうに年寄つて少しも宗教心が無いような人でも、何か恐しいとか或は一種の感に打たれるとかすると、其處に宗教心が出て來ます。それ故恐れの心を幼少の頃から全く無くして置くと、宗教心を養はうとしても中々養へないのであります。何かの機會に出合ふのを待つて居ねばならぬと云ふことになります。であるから宗教心を起させるには、恐れの心を適當に養ひ指導してやることが、大變必要なのであります。

處て此「おそれ」と云ふことを、此處に少くとも二つに區別せねばなりません。即ち如上申述べました恐れは是を要するに所謂消極的の感情で、恐れとは自分の身を護る所の消極的感情を云ふのであります。然るに積極的と云ふと進んで攻擊して行くとか、或はものを壓服して行かうとする强い感情であります。それ故同じ身を守る感情でも、怒り——憤怒は積極的の感情であるが、恐れは消極的の感情であります。此二つの感情が相寄つてこゝに自分を守る土臺となつて來ます。恐れの方は消極的に避ける方であり、怒りの方は積極的に進んで攻擊して行くと云ふ方であります。此兩方が寄つて己れ

を守ると云ふ心が起つて來るのであります。是まで說いて來たのは概括して消極的の恐れと云ふことに就て申上げたのであります。所が同じく子供が小さい時に變つた物を見て驚いたり、大きな音を聞いて驚いたり、不思議なことに出會つて驚き恐れると云ふ此恐れも、段々進んで醇化されると、初めには極く簡單な頗る幼稚な恐れてあつたのが、次第に畏れと云ふ方になつて來ます。此畏には必ず敬が伴つて來て、畏敬と云ふことに醇化されて來ます。恐怖と云ふことゝ畏敬と云ふこととは、心理學者でなくとも普通の人でも、成程「おそれ」には違ひないが何處か違つた所があると云ふことが、お分りになるであらうと思ひます。

其違つた所はどう云ふ所であるかと云ふことを研究するのが、吾々心理學者の職分でありますが、概括して申しますと、恐怖（Fear）の方は具體的のものであります。即ち何か形のあるものであります。且つその上に客觀的のものであります。外に表れたもの、例へば子供が雷を恐れるとか、或は大きな目玉のものを恐れるとか――大目玉を子供は恐れるものです。是は矢張り動物の本能が表れて來るのであります。それから始めて川を見ると恐れるとか、海を見ると恐れるとか、大雨が降つて來ると恐れるとか云ふようなのは、具體的に其雨なら雨と云ふものを見て、客觀的に其處に物を見たり聞いたりして恐れるので、斯う云ふのを恐怖と云ふのであります。所が畏敬（Awe）と云ふ方はどうかと云ふと、それが段々抽象されて來ます。即ち抽象的であります。抽象的と云ひますと、何處に何があると云ふことを恐れるのではないので、何處に何があるとも云ふでもなく、形に見えないもの、其處に形に出て居らないもの、さうしてそれが又主觀的、即ち心の內部のものであります。是が即ち恐怖が漸次畏敬と云ふ心になつて來る土臺であります。それで子供を幼い時から敎育して行く者、或は道を說いて行く者は、常に此狀態を觀察して、是に向つて進めて行くようにせねばなりません。何でも恐しいものを見せたり、唯ぶる〳〵頗へさして恐れさすと云ふだけでは、迚も宗敎はいけません。今申したような心から段々導いて行つて、畏敬の心を養はねばならぬのであります。然らば其畏敬の心とはいかなるものかと云ふと、例へば佛壇のやうな一種特別なものがあり、其堂へ這入ると平生嗅ぎつけない香が匂つて來、又平生見つけないような實に立派な色々のものが置いてあります。さうして有難い面容を具へられた佛樣や、或は一寸分らないが、さて一種何となく有難い氣のする御本尊、即ちお題目ならお題目が眞中に掛けられて居ます。さう云ふ所に這入ると、自然と人間の心が引締るようになります。心が引締ると勢ひ身體も引締つて、其處へ這入つては眞逆に居住ひを惡くしたり、行儀を惡くして寢轉んだりすることは出來ません。其處へ這入ると自然と身體が引締り心が引締るようになつて來ます。それが畏敬の畏の元であります。御承知の通り日本では是を「かしこい」と申します。婦人の手紙の終に「かしこ」と書きますが、是は此の畏（かしこ）が轉じて「かしこ」となつたのであります。是は皆樣御承知の通り、男子方の手紙の「恐惶謹言」と同じことで、此「畏」の字を書くのが當り前であります

す。宮中にあつても「かしこ所」と云ふのがあります。是に漢字を當てゝ今は「賢所」と書いて居ります。さうして宮中でも今日では便宜上賢所(けんしよ)々々と稱へられて居りまして、「賢所に御參拜になる」などと云ひますが、「賢所」と云ふのは當字であつて、實は「畏所」が本當であります。其處へ這入ると人の心に自ら畏敬の念が起つて、自然と引締るようになつて來ると云ふ謂であります。

何事のおはしますかは知らねども
有難さにぞ涙こぼるゝ

と、西行法師が伊勢に參つた時に詠じたと傳へられて居ります。無論諸君も御承知でありませうが、果して是が西行の歌であるか否かは存じませんが、其『有難さにぞ涙こぼるゝ』と云ふ有難さの中には確に畏敬の念が這入つて居ります。て、此の畏敬の念を養つてゐることが非常に大切でありまして、是が無ければ到底宗教心は起るものでないのであります。

然るに諸君のお力にどうしても俟たねばならぬと云ふのは、現代を御覽なさい。畏敬の念と云ふものは段々と無くなつてしまつて――近頃又多少芽を吹きかけては來たが、一時は全く畏れと云ふものが無くなつてしまひました。八人殺しとか五人殺しとか、又最近には俘虜の家内を虐殺した者がありますが、かゝる悲慘なことを敢てするのは、人情頽廢し人心の荒んだ結果であるけれども、其基く處は幼少の頃から畏敬の念と云ふものが無い爲であります。維新以前には兎も角も『今日樣』とか、『天道樣』とか云ふことを、何も知らない無智な者も信じてゐたのであります。それ故古はよし自分に深い信仰はなくとも、お寺へ泥棒に這入る者はなかつたのであります。從つてお寺では明放して置いても、物を盜まれるようなことはありませんでした。何故かと申しますと彼等には畏敬の念がありました。『佛と云ふものは尊いものだから、佛樣に何かすれば罰(バチ)が當る。』と、かやうな事を信じて居りました。『天道樣が見てござる』。『人は知らなくとも今日樣が見てござる』。『天道樣に對して濟まぬ』と云ふ心があつたから、皆多少の宗教心から惡い事をせぬと云ふ心掛けがあつたのであります。處が今日では『ナーニ太陽などといふものはあれは火の珠だ。あんなものを拜むと云ふ馬鹿があるものか』。『佛とはなんだ。あんな木像に向つてお辭儀をしても何になる』。と云ふ風に、無茶苦茶に科學的に說いてしまつて、人間の大切な性格の基礎になる畏敬と云ふ念を打毀してしまつたのであります。是は私共にも確に罪があります。學校で餘り科學ばかり說いて、さう云ふことを云はなかつたから、さう云ふ風になつて來たのであります。それでは私共もさうなつたかと云うと、私共は有難い事に矢張り昔の教育を受け、昔の家庭に育つたから、よし强い信仰はなくとも、何とはなしに、人が見て居なくとも惡いことが出來ないと云ふのは、佛樣なり神樣なり人間以上の力があつて、吾々は其支配を受けて居ると云ふことが、明かに意識には出て來なくとも、根底にはありました。幾ら科學を研究して居る時でも、潛在意識として始終それがありました。それ故人が見て居らぬから何をしてもいゝと云ふ心はどうし

ても起りません。今から考へて見ると私共には矢張り宗教心の根本とも云ふべきものは始終消えずにあつたのであります。唯科學が盛んなためにその影に覆はれて居りました。所が可哀相に其科學萬能時代に育つた子供は、さやうなことは家庭でも學校でも、誰からも少しも教へられなかつたから、其時代に育つた者が今日あのやうな惡いことを敢へてする事になつたのであります。八人殺しや五人殺しを調べて御覽なさい。決して五十・六十の爺さんではなく、大概二十五・六歳から三十四・五歳までの科學萬能の時代、即ち恐しいと云ふことを教へられなかつた時代の者ばかりであります。

かやうに恐れと云ふ感じが、宗教の基礎として大變大事であります。そして其恐しさを何に依つて取去る事が出來るか、どうしたならば無くすることが出來るかと云ふ基礎を與へるようにする事が、宗教心を導いて行くのに大切な條件なのであります。

二、祈　求（欣求）

『次に祈り求めると云ふこと、佛教の所謂欣求、その他宗教上には特別な言葉もありますが、求めると云ふことが無ければ宗教心は起るものでありません。求めると云ふことが非常に大切なことであります。』世俗にも

『緣無き衆生は度し難し』

と云ふ言葉があるが、緣と云ふと、何か其處に一つの結合――結び付きが出來て、自分から求める心が出來て來なければ幾ら法を說いてやつても、仕方がないのであります。それ故此祈り求めると云ふ心が宗教心の又一つの土臺になるのであります。而もこの心的作用も亦丁度恐怖と同樣に、非常に早くから子供に表れて來るのであります。極く幼い時から盛んに表れて來ます。是は俗に要求と云ふのがそれで「あれを呉れ」「之を呉れ」と云ふ要求であります。大概子供の表出（Expression）の中で、一番早く表れるものは泣くことであります。泣くと云ふ表出は生れると同時に現れます。一體子供の泣くのは先刻も申しましたように恐れて泣くことが多いのでありますが、恐れて泣くのは何かと云うと、詰りどうぞ恐れを取去つて呉れと云ふ要求であります。が、子供は口が利けないから總てを泣いて現すのであります。泣くと云ふことは、子供が自分の意志を表し、自分の心を表す基となるので、悉く要求なのであります。

皆樣にかやうなお話をするのは、或は必要のない事かも知れませんが、私は子供の心理を研究して居りますので、具體的にお話致しますが、子供の泣くのは、大體三つの種類に分つ事が出來ます。細く云ふと幾らもありますが、大體三つに大別されます。即ち其の一は饑えて泣くので。飢餓であります。第二は退屈して泣く、第三は苦痛に依つて泣くので、この苦痛と云ふ中に恐れなども這入つて居ります。何か怖いものが見えたと云ふようなこともこの苦痛の中に這入ります。子供の泣くのは大概この三つで、最後の苦痛の中には針が刺さつたとか、蟲が喰付いたとか、又は腹が痛いとか云ふようなこ

ともあり、或は何か恐しいものが見えたとか、聞えたと云ふのも、皆苦痛であります。かやうに苦痛と云ふ中にも色々の種類がありますが、詰りこの苦痛で泣く時には泣き方が非常に緊張して強い泣き方をします。退屈をして泣く時には、丁度吾々が退屈をして「あゝ退屈だ」と云ふのと同じ狀態で泣きます。聲が長く且つ弱くて、強い聲は出しません。それから飢えて泣く時は丁度この中間で、苦痛で火の附くように甚く泣くのと、退屈して緩かに泣くのとの中間であります。是は注意深い親ならば直く聽分ける事が出來ます。母親は能く聽分けますが、父親でも分ります。私などにも分ります。赤ん坊の泣くのはどうして泣くのか大抵分るもので、諸君も試みて御覽なさい、皆要求であります。飢えたから乳を飲まして呉れと云ふ代りにオギャー〳〵と泣き、又退屈で堪らないから抱いて呉れとか、何處かへ出して呉れとか、どうかして呉れと云ふ事が云へないからその代りに泣くのであります。或は痛い〳〵、何か刺さつた、どうかして呉れと云ふ代りに烈しく泣くのであります。之を能く子供のことを知らない親は、泣きさへすれば乳をやりますが、これほど無慈悲なことはありません。さうでせう、吾々が針が刺さつて痛い〳〵と云つてゐる時に、そら食べろとパンを持つて來て口の中に入れられたら嘔吐らない事でせう。然るに赤ん坊には其通りの事をやつて居ります。泣きさへすれば直ぐ乳をやりますが、是は餘り宜しくないことであります。

如上例を擧げて申しました通りに、子供には生れた其時から既に要求と云ふことがあつて、始終求めて居ります。或意味で云ふと嬰兒ばかりではなく、人間は絶えず要求して居るもので、あれが欲しい是が欲しい、何でも自分の精神なり身體なりを發達させて行く爲には、絶えず求めると云ふことが必要であります。然るに其心が又非常に宗教に大事なものであります。が、同じ宗教の中にも祈禱を用ゐない宗教もあります。それ故大體宗教を分つて祈禱をする宗教と、祈禱をしない宗教とに區別する學者がある位であります。併し祈禱と云ふことを一種の儀式としてやらないにしても、宗教と云ふ以上は必ず此祈り求めると云ふことがなければ宗教の生命はないのであります。眞宗などには日蓮宗などで用ゐるような祈禱はないでせうが、眞宗でも佛樣に感謝するとか、有難さを述べて佛恩に報いると云ふことはあります。詰り是が佛の救ひを求める意思になります。同じことでも淨土宗となると眞宗とは餘程それが違つて居るようで、求めると云ふ心が餘程淨土宗には表はれて居ります。眞宗では祈つてはいけないと云ふが、其代りに感謝すると云ひます。感謝すると云ふことは依然是に依つて救はれる事で、佛樣が救つて下さると云ふ事を信じ、其處に一つの要求をする事になるのであります。要求が無ければ宗教は無い。若し何も入らないと云へば無關係になつてしまひます。然るにかゝる祈り求める心は、幼少の頃からあるのであります。處でこの適當にと云ふことをよく考へねばなりません。若し求めることを何でも無茶苦茶に聞いてやるとなると、恰も佛は始終居られると云へば、衆生

はそれに馴れて少しも佛樣を有難くも何とも思はなくなつて却つてよくないから、佛が寂を示してお隱れになると云ふ事があるのと同樣で、若し親が富豪で子供が要求するものは何でも無茶苦茶に求めに應じてやる、是が欲しいと云へば是を買つてやる、あれが欲しいと云へばあれを買つてやると云ふように、無茶苦茶に求めさへすれば直ぐそれに應じてやつて居ると、其子供は仕舞にどうなるでありませうか。宗教心どころではなく、終には度を過ぎると墮落して惡くなつてしまひます。さうして賊をするやうにさへなつて來ます。此事を善く注意せねばなりません。一寸話が他に轉ずるようであるが、諸君は人が物を盗むと云ふのは與へてやらぬ、足らぬから欲しくて堪らなくなつて盗むとお考へでありませう。それは勿論さうで、足らぬから盗むに違ひありません。欲しいが與へられぬて、足らぬから盗むのであります。併しそれならば富豪の子供は物を盗まぬか、金を持つて居る者は盗むことをせぬかと云ふと、如何にも彼等は何でも澤山持つて居るから盗みをしさうもありません。然るに存外物のあるもの、澤山物を持つて居るものが盗みをします。學校などでも非常な貧乏人の子供に、却つて賊をする者が比較的少いので、あるにはあつても割合に少いのであります。然るに富豪の子供や中流以上の子供で、家で物を澤山やつて居る者に人の物を盗む者が多いのであります。是をよく人は一概に、『仕方がない、生れ附きだ』。とか、又は『前世の因果だ』。とか宗教上からも云ひますし、今日の學説でも亦『是は遺傳である。父母の何代か前に賊が居た。それが遺傳して來たのである』。などと直ぐ云ひます。併し容易に因果に歸してしまつたり、又遺傳で誤魔化してしまふことは出來ません。かやうな者を調べて見ると、大概今云ふように子供の要求を漫りに滿足させて何でも物を無茶苦茶にする爲で、その結果子供が物を大切にしなくなります。從つて無くなります。無くなるといかぬと思へば大切にするのでありますが、大切にすると云ふことを知らないから、矢鱈と所謂濫費をします。その結果足りなくなるので、濫費すればどんなに澤山あつても足りなくなる筈で、足りなくなつた時に親に要求すると、『昨日もやつたではないか。そんなに無くなしては仕方がない。又やるから今日は止して置け』。と云ふようなことをどんな親にしても偶には云ひます。云はなくともさう始終親から貰つて居る譯には行きません。例へば學校に居る間に欲しくて堪らない事があると、直ぐその場で親から貰ふと云ふことが出來ません。が、無茶苦茶に欲しくてたまらない。貰ふことは出來ない。併し友達がそれを持つて居る。どうも欲しくて堪らない。と、云ふような場合に盗むのであります。それ故餘り要求を無茶苦茶に滿足させると、それは本當の滿足でなく、却つて盗みをするような心を起す事になります。是が宗教心に於ても墮落して來る基になるのであります。

それ故宗教にあつても、所謂他力の宗教の如き、自分はぢつとして居ても獨りでに佛に救はれると云ふようなことのみ云つて、餘り要求の容易く滿足されることばかり説くのは、隨分危險で大變弊害があります。現にかやうな例があります。愛知縣と云へば眞宗の大變盛んな所でありますが、私があ

ちらへ參つて、先生を集めて色々講義をします際、宗教意識のことに及び、『子供に宗教を說くには餘程注意せねばいけない。精神的のことをも子供は具體化して考へ、思想界のことをも今日の現實界の事のやうに考へる。理想と現實とを子供は區別することが出來ないから、子供に宗教を說くには餘程說く者が氣を附けねばならぬ』と云つて話をしました。すると或る小學校の校長が『先生の仰有る通りのことが私の學校にもありました』と云つて話しますには、其學校に來て居る或る子供の家は村會議員などをして、村でも中流以上の家であるが、其家の子供が賊を働いたと云ふのであります。確にそれがやつたに違ひないけれども、村會議員の子供にそんなことを云つて、若し掛り合ひにでもなつて怒られては大變と思つたから、其先生が子供の名譽を害せぬよう密かに呼んで、『誰にもあることだが、事によつたらお前がつい間違へて、人樣の物を持つて行つたのではないかと思ふがどうか』。と云つて靜に尋ねました。すると其子供は正直で直ぐ『先生私が取りました』。『どうしてさう云ふことをしたか』。『何でも欲しくて堪らなかつたから惡いと思ひましたけれどもつい取つて、それは使つてしまひました』。『何故そんなことをしたか』。『それでも先生、私はお念佛を三遍申して置きました』。と、眞面目な顏をして云ひます。『幾らお念佛を申しても、人の物を取つてはいけないではないか』と云つた處が、『それでも私はお母さんとお寺に參つて始終お說敎を聽きますが、其時に坊樣が幾ら惡いことをしてもお念佛さへ申せば佛樣は助けて下さると云ひます。私は物を盜むのは惡いと思ひましたけれども、お念佛を三遍申しましたから善いと思ひました』。と、かう云つたさうであります。子供の考では二遍だけ多く云へばお釣りが來る位に思つたのでありませう。念佛一遍申しても助けられる。まして二遍も餘計に云へば、もう少し盜つても善いと考へたのでありませう。かやうな譯で餘程氣を附けないと、無茶苦茶に要求が滿足されるような心持を與へて、思はぬ結果を招きます。これに反して他の者も持つて居るから自分も欲しい、是非無くてはならぬと子供が思ふものを、親が滿足させてやらないで、何時も其子供の要求を跳つけ、自分が育つ時にはそんな物は入らなかつたとか、そんな物は用ゐなかつたとかよく下等な親は申します。自分が育つた時分には學校などは無かつた、寺小屋へも行かなかつた、お前は學校へやつて貰つて居るのだからそれで結構だ、贅澤なことを云ふな。と、一切跳つけて少しも聞いてやりません。皆が持つて居るから鉛筆をもう一本買つて下さい、かう云ふものを買つて下さいと云つても、中々買つてやらないで、始終跳つけ〳〵して子供の要求を滿足させてやらないと、終には又餘り欲しくなつて賊を働いたりするやうな惡いことになつてしまふのであります。

それ故に宗敎心が起るのは、矢張り極く健全な家庭で、子供の要求に對しては適當な滿足を與へてやり、正しい願ならばお父さんに言へば聞いて下さる、お母さんに言へば私の願を叶へて下さると云ふ觀念を子供に起させ、常々さう云ふ習慣を附けて置くとそれが直ぐ今度は佛樣なり神樣なりに行き易いのであります。惡い事をお願ひしても、お父さんやお母さんは聞いては下さらない、無理を云つ

ても決して聞いては下さらない。併し正當の願ならば、お父さんもお母さんも聞いて下さると云ふ其心を移して行けば、やがて佛樣はお父さんやお母さんを大きくしたもの、お父さんやお母さんの完全なものであると分つて來ると、本當に祈ると云ふことが起つて來ます。それを間違へると無茶苦茶なことを云つて、「私は彼奴を殺したいから、どうか彼奴に見附かりませぬように」とか、「彼奴の物を盜みたいと思ひますからどうか目が明きませぬように」とか、飛んだ祈をする者が幾らも出來て來るのであります。あの鼠小僧のお墓に香花が絶えないと云ふのはそれであります。かやうな迷信は何處から起つて來るかと云ふと、必ず家庭から起るものであります。家庭で子供が無理を云つても、何でもあゝよし〳〵と、云ふ事を聞いてやるから、善惡の區別がつかなくなつて、無茶苦茶に賴みさへすれば何でも云ふことを聞いて貰へると云ふ感じを起して、やがてはそれを其儘佛樣に持つて行つて、何でも願へば其願が聞屆けられると云ふ心を起すのであります。それ故に子供の宗教心を養ひ、立派に開發して行くには、子供が紙を呉れと云ふのでも、菓子を呉れと云ふのでも、筆を呉れと云ふのでも、玩具を買つて呉れと云ふのでも、若しそれが正しい願、正しい要求であれば、親も正しく容れてやり、不正な要求であれば幾ら可愛がつて居ても、斷然退けて適當に導いて行つてやるようにし、そして其心をやがて其儘佛樣なり神樣に移して行くことが大變大切であります。であるから宗教は日常茶飯の間にやつて居ることから出て來るのであつて、決して特別なものではありません。かやうに親が適當に要求を滿足してやると云ふことを、方向を換へて佛樣に持つて來、神樣に持つて來れば善いのであります、迷信の祈禱は大に宜しくありません。是れは皆樣御承知のことでありませうが、今の宗教が色々に非難されたりするのは、迷信を鼓吹し、宗教が却つて賊を助ける土臺となると云ふようなことから、是等は皆此祈りの間違ひから來るのであります。今日、刑事心理學（Criminal-psychology）或は犯罪心理學と云ふ學問があつて、犯罪人の精神狀態を研究し、罪と云ふ觀念は如何にして起つて來るか、犯罪人の心的狀態が通常人と如何なる風に違つて居るかと云ふようなことを研究して居りますが、是は諸君が若し監獄に布教でもなさつて、罪人を教化なさらうと云ふ時には、非常に大切な學問であります。て、この犯罪心理學から調べて見るのに、信仰があつたならば罪を犯さぬだらうとは誰も等しく思ふ處で、普通に社會を經營して行く人は、政治家でも、感化救濟に從事する人でも直ぐさう思ふので、信仰があつたならば罪は犯さないだらう、宗教の盛な處には犯罪が少いだらうと思ふのであるが、今までの結果ではまるで正反對であります。歐羅巴でも伊太利のナポリ、ネープルスと云へば、最も信仰が深いと云はれて居る處であるが。其處では罪人も罪人、殺人犯の比例が歐羅巴の國中で一番多いと云ふとであり、非常な割合で殺人犯などが行はれて居ります。わが日本に於いても能登の國が最も信仰の盛んな國と云はれて居るが、それで矢張り殺人犯などが大變多いのであります。尤も此犯罪の狀態と云ふものは、極端に云へば時々刻々に變るものであるから、今日でもさうであるとは云へ

ませんが、數年前の調査に依れば、能登の國は宗教の盛んであるに拘らず、殺人犯が多いと云ふことであります。で、是は何かと云ふと、丁度日本の罪人の中に迷信があると同樣に、何處の國にも迷信があるのであります。是には樣々な例がありますが、西洋でも舊教の國ではマリヤと云ふものが信ぜられます。これは基督の母のマリヤでありまして、日本の觀音に當ると云はれて居ります。觀音樣とマリヤとは元は同じものであるなどと云はれて居るのでありますが、其マリヤを拜んで行つて人殺しをやると云ふことであります。さうして賊がうまく人を殺し了せた時には、「是はマリヤ樣のお蔭だ」。てその手で自分の親父を殺した者があります。實に大逆無道の奴であるが、後に捕へられた時に自白して云ふに、「私の親父は平常非常に力が強くて私などは迚も叶はなかつたのであるが、私はマリヤ樣を一生懸命に拜んで行つたから、あの時は親父の方が弱くなつてうまく組伏せて殺すことが出來たので、是は全くマリヤ樣のお蔭だ」。と云つたさうであります。かやうに全然不正な事を祈つて、それが成就すると神か佛のお蔭でゝもあるかのやうな考を起します。日本にもさう云ふ例は幾らもあります。色々の迷信がありまして、例へば摩利支天に祈つて何をしたとか――まさかにさう云う惡い事を阿彌陀樣に祈つたとか、お釋迦樣に祈つたとか、御本尊樣に祈つてどうしたとか云ふようなことはありませんでせうが、色々の神とか佛とか云ふものがあつて、それに祈つてさう云ふことをやると云ふような者が段々出來て來るようであります。是は所謂雜亂して居るからで、要求に對する滿足と云ふものが無茶苦茶になつて、善惡の區別をせぬからさう云ふことになるのであります。是は是非諸君が御注意になることが必要であると思ひます。兎に角眞實の祈りと云ふことは、最も大切なことであります。昔から申しますることに、菅公の歌であるなどと云ひ傳へて居りますが、私は恐らくさうではあるまいと思ひますが、

『心だに誠の道にかなひなば
　　祈らずとても神や守らん』

と云ふ歌があります。併しさう云ふことはありません。誠の道に叶ふには、どうしても祈らなければ叶ふものではないので、眞實心からどうかして此道に向つて進まう、此事に向つて進まう、眞に徹底してやらうと始終祈り求めて居なければ出來るものではありません。であるから孔子も

『丘の禱る久し』

と、云つて居ります。孔子も始終祈りをしたのであります。是は大層大切なことで、欲求に就て其の滿足を與へるまで適當に導いて行くことが大事なことであります。

三、救　濟

第三に宗教の要素として大切なことは救濟、救はれると云ふことであります。困つて居るとか、苦

しんで居るとか、恐れて居るとかして、祈り求めてゐる時に、其困ることを取去つて困らないように して呉れる。苦しみを少くして呉れる、恐れを取去つて呉れると云ふ、即ち救はれたと云ふ觀念——或は救はれたとは思へないまでも、まあ是てよかつたと云ふ安心が、宗教にとつては大切なので、肉體的にせよ、精神的にせよ、生命を危くされて居る時に、その原因が取去られたと云ふ感じが、宗教上大變大事な働きをするのであります。若し是がないならば宗教意識の發達と云ふことも無いのであります。私共の經驗から云つても、大聖人なら大聖人の生活が、腦裏に泌々と浸入るような場合には今まで非常に大儀に考へて居たり、苦痛に思ふたり、或は嫌だと思つて居た事が、何の苦も無くひよつと出來るようになる事があります。是はまだ本當の信念から來た救ひと云ふものではないてせう、私共のやうな信仰の淺い者にさう急に救ひが來るものであるとは思はれませんが、併しそれでも確に救はれたと云ふ感じがします。何故かと云ふのに若し大聖人の生活が私の腦裏に這入らなかつたならば、大儀に思ひ、苦痛に思へて、迚も出來さうになかつた事が、平氣で出きるようになるのであるから、確に或意味で救はれたのであります。諸君には必ずさう云ふ經驗が種々おありてありませう。併しこれは幼時から宗教家として寺で育つた人よりも、始めは宗教も何も信じない、頑固であつた人が、中年で非常な不幸に出合つて、不圖一念發起し佛門に歸依したと云ふやうな場合に、却つて救はれたと云ふ感じが痛切に起るものでありませう。が、常に寺などに居る人はさう云ふ感じはあつても氣が附かずに濟んでしまふような場合もあるでありませう。所謂薫習力今日の言葉で云ふ習慣で明瞭に意識されないと云ふだけで、分解して見れば矢張り始終さう云ふことは、本當の信仰さへあれば必ずあるに相違ないのであります。であるから宗教に救ひと云ふことがなければ、全く宗教としての意義をなさないのであります。

然るに是も子供が幼時から始終經驗して居る事で、救ひのない子供は非常に頑固な幾ら說き聞かせても人を信じない、仕方のない者になるのであります。それでは其意識の基である救ひが、子供の生活に如何やうに現れるかと云ふと、是も全く日常の茶飯事で、吾々が始終經驗して居ることであります。例へば子供が駈けて行つて倒れる、痛いから泣き出す、親が飛んで行つて起してやる。「おゝ痛かつた」と塵を拂つてやつて、何處か怪我をして居れば早速輕いのは藥を附けるし、重ければ醫者へ連れて行くと云ふように始終やつて居ります。是は即ち救ひの現象が目前に現れて來て居るので、親なり先生なり子供に附いて居る人々が其時にやる事は、全く佛樣のなさることと同樣で、唯是を小さくしたに過ぎないのであります。かゝる經驗が度重ると子供は救はれた時の心の狀態と云ふことを漸次體得して來ます。然るに世の中には可哀相な人間があつて、救はれない者があります。倒れても倒れ放し、病氣になつてもなり放し、物が欲しいと云つて誰に要求しても訴へても呉れる者も無い。もう手の附け處がない。止むを得ず人の物を盜む、見付けられる、直ぐ頭から叩かれる、酷い目には遇は

される、今は天にも地にも誰一人賴む者は無い、天地の間、本當に自分を救つて呉れる者は一人も無い。――天地とか宇宙とか云ふ考は子供には無いとしても、かやうなことが習慣となつて、深く子供の腦裏に染込んでしまふと宗教心どころではなく、世の中の人を皆敵とするような心を起すことになります。是は實に恐しいことで、五つ六つの子供でも繼母に育てられたとか、或は虐待されたとか云ふ者には、早くも既にさう云ふ考が起つて居て、決して人には賴らないし、人の云ふ事はどうしても信じません。そして甚く自分勝手で、一寸でも人の目が無いと、直ぐと喰べられる物はどん〳〵食つてしまつて知らぬ顏をして居ります。何てもその邊にある物は隱して置いて自分の物にすると云ふような、全く手の附けようのない子供が往々あります。かやうな者に宗教心を養ふことは殆んと不可能の事であります。人はかゝる者を生れ付きてあるから仕方がないと云ひますが、よく考へて見ると前のやうな事が原因となつて居るのであります。つい近頃の事でありますが、備後の尾の道へ行つて居りました時、土地の小學校長が訪ねて來まして、甚だ失禮だが是非三十分ばかり子供のことに就いて相談し度いと云ふことですから、疲れて休んでゐましたが直ぐ起きて聞いて見ますと、或酒屋の子供で、三人兄弟の一番末であるのが、生れた當時母が病氣であつた爲に、他へ預けて置いた。所謂里子にやつて置いたのでありますが、四つの時から實家へ取戻して今では小學校の六年に居るが、非常に成績が惡い上に手癖が惡くて仕方がありません。始終家では錢を盜むし、學校では他の生徒のものを盜むと云ふ譯で、親も困つて受持の先生を賴んで、始終家へ來て戴いて監督をして貰つて居るが、それでも惡い事をして仕方がないので、どうしたら宜しからうかと云ふ事であります。かやうな空漠たる問を突然出されても直ぐ答へられるものではありませんが、其時丁度其子供の親が來ましたから會つて戴き度いと云ふことなので、親にも會つて一部始終を聽きました上で、私は斷案を下して、「それは少しも子供が惡いのではない、お前さん達が寄つてたかつて子供を泥棒にしたのだ、少しも子供に罪は無い、泥棒養成の心理を非常に能く應用したから、それでは誰でも泥棒になる。」と、云ひました。何故かと云へば、假令自分の子であつても里子にやつて置きますと、丸で他人の子供のやうになります。子供は小い時から乳を飲まして育てゝ呉れた母を慕ふものであります。それが四年も五年も里子に行つて居れば、自然の家風が精神に浸込み、其處の風儀に染ります。そこを突然家に連れて來ても、他の兄弟は母の乳を飲んで育つたから非常に母を慕ふが、其子供だけは丁度隣の猫を借りて來たと同じことで、樣子が違ふから少しも母に馴れません。殊にヒステリーの母であつたから、同じやうに自分が生んだ子供だけれども非常にこの子供だけ憎んで、他の子供との間に分け隔てをします。父親は多少分つた人でありますから、「可哀相に餘所に行つて居たから……」と云つて、女親に内證で「これを上げるから早く行つて何か買つて來い」と一錢二錢の小錢を遣つては、外へ出て買食をさせつけたのであります。それ故父親には比較的馴付いては居るが、父親の云ふ事も無論聞きはしません。父親は可

哀相だと思つて先刻云ふように無茶苦茶に要求を滿足してやるので、さう云ふ習慣を幼時から養はれてしまつて馬鹿にし切つて居るのであります。母親は母親で、其子の顏を見ると自分が病氣になるからどうか離緣をして欲しいと云ふのださうであります。實に情け無いことではありませぬか。眞實の親子でかやうなことを云ふような有樣でありますから所詮駄目であります。それは迚も一緒に置いてはいけないから、必ず子供を何處かへ預けるように忠告し、又預ける所をも指圖して、子供を矯正する方法なども委しく話してやりました。かやうな實例もある事で、實に可哀相な話であります。女親と云ふものは普通の家庭に於ては、最も善く子供を救つてやるものであります。大小便の世話から、又何か欲しいと言ふ時でも、何から何まで母がそれを滿足させてやつて、救つてやるのであります。其行住座臥絕えず子供と生活を共にして居るべき母が、そのやうに子供を憎み、子供に反對し、陰になり陽になつて子供を疎外し、排斥するから、父親が偶〻見るに見兼ね、不當の要求の滿足をさせてやつて、益〻子供を惡くするのであります。それでどうして人間が善くなりませうか。普通の家庭ならば、子供が困つて居る時には親が愛の手を以つて救つてやる。子供は自然と有難いと云ふ心を起して母を慕ひ、親を慕ふ心が出來て來るものであります。それ故感化院に入れねばならぬとか、極惡無道で宗教心などは毛頭ありさうもない人間も、其元を尋ねて見ると大概普通人間の受くべき筈の救濟がなかつたのであります。誰も助けて呉れる者は無く、自分でやるより外は無いのであるから天地の間全く自分獨りであります。恐らく是程の寂莫、是程の悲哀は外にはありますまい。元來人は主從・師弟・親子・兄弟・朋友その他樣々な關係に依つて自分の生きて居る甲斐が出來て來るので、多數の人人と交り、互に助け合つてこそ生存して行く事が出來るのであります。謂はゞ吾々は多勢に持上げられてこの世の中に生存して居る神輿のやうなものであります。神輿を擔ぐと云ひますが、吾々は皆相互に神輿になつて、支へられて居るのであります。救ひの手が無いと云ふのは取りも直さず其一切の支へが無いと同じことで、其時人はどのやうに苦痛を感ぜねばならぬか、恐らく殺されるよりも辛いであらうと思ひます。それが殊に四つや五つの子供の時から寂しい賴り無い、一切人に任すことの出來ない、自分で何でもやらねばならぬ、自分より外に賴りにする者の無いやうな境遇に居ると、自然我儘をもし、人を見れば皆敵と思ふようにもなり、社會の一切を疑つて自分ばかりを護らうとするような心が起つて、次第に極惡無道なことを敢てするようになるのであります。

諸君が布教の上に何かの御參考にならうかとも思ひますから、一つかやうな例を附加へて申上げて置きます。是は拙著にも載せてありますから、或は御覽下さつた方もあるかも知れませんが、所謂有難い、救はれると思ふ心、其心がどの位强いものかと云ふ實例を申上げるのであります。茨城縣の者で坂本啓次郎と云ひまして、針金强盜と云ふことを始めてし出した男があります。繩で縛る代りに針金で人を縛つて置いて强盜をやつたのでありますが、私の友人の中島德藏君の家にも這込んで、留守

番をして居た人をピストルで撃殺したりした男であります。是程極惡無道な犯罪人は其當時までは無かつたのであります。只今では其當時よりも中々進んだ犯罪が出て來ましたが、この啓次郎は實に酷い奴で人を殺すことなどは何とも思はない、火も附ければ强姦もする、四度か捕へられたけれども巧みに逃げてしまつて、最後に到頭市ヶ谷監獄に收監されました。丁度その時其處に私の友人の藤澤正啓と云ふ人が典獄をして居りました。御存知の方もありませうが、只今ではもう隱退して居られます。氏は格別宗教上の信仰をもつて居るとも聞きませんが、或は何か信仰して居るかも知れません。兎に角非常に人情の厚い人で、私共と話をして居ても少し氣の毒な話や、可哀相な話になると、眼に一杯涙を溜めて話す程であります。丁度市ヶ谷監獄に針金强盗が收監されて來たのは寒中でありました。處が御承知の通り監獄には疊と云ふものが敷いてありません。薄つぺらな薄緣がたつた一枚敷いてある切りで、其處へ坐つて啓次郎は、袷か何か一枚着たまゝで捕へられて來たので、哀れな姿をしてぶる〳〵顫へて居ました。併し收監されて以來これが矢張り甚しく惡たれて大層人を馬鹿にします。看守や押丁を捉へて「お前達は俺のお蔭で飯を食つて居るのではないか。俺はお客樣だから大事にしないか、そんな横柄な事を云ふ法は無い。」などと毒吐くと云ふ有樣であります。成程考へて見ると監獄の役人はそのやうなものでありますが、威張つて仕方がありません「ちやんと坐つて居れ」と云つても、暴れたり唄を歌つたり勝手なことをして、裁判所へ行く時にも縛つて連れて行くと、「今に見ろ、逃げてやるから。」などと云ひます。「なに貴樣が逃げようと思つても、俺が附いて居るから逃がすものか」と云へば、「今に見ろ屹度逃げてやるから。」などと中々負けては居ません、又實際奇妙に彼は繩を拔けることが上手で、二三度も其手で逃げた事があるのださうであります。

すると、典獄の藤澤氏は、或日の事、看守長が附いて方々の監房を段々廻りまして、啓次郎の這入つて居る前へ來ると、看守長が、是が名高い針金强盗の坂本啓次郎で、先日這入つて來た由を告げました。云はるゝまゝに藤澤氏が中を見ると、三疊敷位の獨房に一人でぶる〳〵顫へて居ります。藤澤氏は「あゝ可哀相に」と云ふ念が込み上げて來たと見えます。是は誰しもさうでありませう。どのやうな惡人だとしてもこの哀れな樣を見ては可哀相に思はずに居られますまい。是こそ本當の佛の心。眞に宇宙絕對の愛とは是と同じ心でありませう。吾々にもさう云ふ心は時々起ります。若し始終さう云ふ心で居られゝば吾々も活きながらにして佛でありませう。藤澤氏も不愍に思つて見ると、監獄の窓は逃げられぬように高い所に附けてありますが――其四角な高い窓から冬の暮方の日が監房の板の間へ差込んで、四角な影を印して居ります。啓次郎は何を思つてか全く日の目の當らない隅の方に居竦つて顫へて居るから藤澤氏は『可哀相に、寒からう、日の當る所へやつてやれ。』と一言云ひ附けました。て、看守長が『典獄さんが仰有るから日の當る所へ行け。』と云ふと、啓次郎は默つてお辭儀をしましたが、軈て立つて日光の差込む方を背にして坐つたさうであります。其時は唯それだけの簡單な

事で、いつものやうに藤澤氏は監獄中を廻つて歸つて來ました。すると其後で啓次郎が――彼は重罪犯でありますから、其獨房の前には始終押丁や看守が巡回して居るのでありますが、その一人を「旦那々々」と小さい聲で呼びます。「何だ」。と云ふと「私はもう決して暴れませんからどうか御安心下さい。是からは規則を守つて必らず溫しくします」。と云ひます。「併し貴樣はあんなに暴れてお客樣だなどと云つて居たではないか。どうしてそんな心になつた」。「いや私はもう是からは屹度溫しくします。」と云ふ、其樣子が如何にも嘘でないらしい。そこで併し貴樣そんな事を云つて俺に油斷をさせて逃げようと思つて居るのだらう」と尙疑つてみたが、「決してもう逃げない」と堅く誓ひますので、どうしてそんな心が起つたのかと聞いて見ました。すると彼は、「はい。私は生れてこの方親からも兄弟からも一つとして優しい言葉を聞いたことがありません。物心附きまして以來、私のやうな惡人を可哀相に寒からう、日向へやつてやれと云つて下さつた有難い言葉は、全く始めて聽きました。さう云ふ典獄さんに背いては濟みません。どうせ私などは疊の上では死ねるものではありませんから、此處で死にますが、是からは溫しくします」と如何にも眞心を籠めて物語つたさうで、其瞬間から彼は本當に復活したのであります。生れ變つたように端坐して――今まで放浪の生活をして居た者であるから、嘸窮屈であらうのにきちんと端坐して、それからは裁判所へ行つても、今まで裁判官などに對して樣樣な惡體を云つたものが急に溫しくなつて、このやうなこともしました、あのやうなこともしました、と古い記憶を辿つて悉皆罪狀を自白し、遂に死刑の宣告を受けたのであります。其時藤澤氏は實に涙を以て、『是程人間が善良になつたのであるから、せめて無期徒刑位で島にでもやつて置いて、又赦される時期もあれば』と、惜んでやつたが法は枉げられませんから、止むを得ず死刑を執行したさうであります。すると、死刑の執行されるに先立つて啓次郎はにこ〳〵しながら第一に藤澤氏の所へやつて來て、『實に私のやうな者に今まで御深切を下さいまして有難うございました、是非この御恩を報じたいと思ひますが、今生では叶はぬ事ですから、此後生れ變つて來ましたら、屹度あなたの御恩はお返しします積りでございます』と慇懃に挨拶をし周圍の人々にも挨拶を濟まし笑を含んで斷頭臺に上り、僅か十一・二分で絶命したさうであります。御覽なさい、救ひと云つても、これは『日向へ出してやれ』と云つた僅な思ひやりに過ぎないが、其僅な同情すら心から出たものはそれ程の大惡人を救ひ、忽ちその心を變へたのであります。尤も是は所謂奇緣と云ふもので不圖した機會(チャンス)によつて起つたのであるから、何時でも又誰でもさう行くとは限らないのであります。が、兎に角彼は親からも兄弟からも一度も優しい言葉を聞いた事が無い。啓次郎の話はもつと長いのであるが、彼の話によると、自分でも『あゝ惡い事をした、もう止さう。』と、深く罪を悔いて家へ時々歸つて行つたさうであります。併し親が家へ入れて呉れない。夜ソーッと歸つて、『饑じくて堪らないからどうぞ御飯を一杯喰べさして下さい』と、賴んでも、『貴樣のやうな奴にやる飯は無い。』とすげなく斷られる。『それではお茶を一杯下さ

い。』と、云ふと、それも、『貴樣のやうな人てなしにやる茶はない。』と、一口に云はれる。母親が不愍に思つてお茶をやりたいと思ふけれども、父親が許さないから仕方がありません。現在の親でさへさうてあります。まして友達の所などへ行つても、やれ人殺しとか、强盜とか云つて寄せ附ける道理がありません。そこて天下の奴は皆敵だと思ふやうになつてしまひます。敵の物なら盜んてやれ。敵の物なら燒いてやれ。殺してやれと云ふので、一度も自分は氣の毒だと思つたことが無いと話したさうてあります。であるから先きに申上げた通り、一切のものが構ひ附けなくなると、救はれると云ふ經驗が無いからさうなつて來ます。神も佛も無いのてあります。然るに啓次郎は始めて藤澤と云ふ典獄に依つて、本當の活きた佛の慈悲に接し、本當の救ひに出遇つたのてあります。されば彼が心は全く生れ變つた狀態になつたのてありませう。かやうな時に、眞に道を說いたならば、啓次郎は必ず信仰を持つて死ぬ人になつたてあらうと思ひます。てあるから矢張り子供の時から適當に慈悲を以て救つてやつて、其救ひの經驗を得させる事が、宗教上非常に大切なことになるのてあります。如上お話したような事柄は、日常何處にもありふれた事て、親と子との間、互に道行く人の間にもある感情てあります。然るにかやうなものが段々纏つて宗教心になつて來るのてる。兎に角宗教と云ふものも決して特別なものてはない。是を何か違つたもののやうに思ふのは大きな間違ひてあります。

以上お話した樣な事を一の御本尊一の大聖人に歸著すると云處に眞の宗教が存するのてあります。

宗教意識の發達（下）

前回宗教意識の發達して來る要素に就て、其中の恐怖、祈求或は欣求、それから救濟と云ふ此三つに就てお話して置きました。

尙詳細な事に就てモウ少しお話を致したいこともありますが、先きを急ぎますので略して置きますが、詰り手近な例として、子供が苦しんて居るとか、困つて居るとか云ふ時に、それを滿足さして貰つた後の心の狀態――是は他の言葉て云ふと所謂解脫したと云ふやうな狀態が矢張りそれと同じてあります。即ち世の中の苦しみ、悲しみ、恐れと云ふやうな、唯今の學術上の言葉では之を世界苦（ウエルトシユメルツ）（Weltschmerz）と云つて居りますが、此苦から逃れたのが所謂解脫てあります。此世界苦と云ふのは恐ろしいとか或は此望が遂げられぬから悲しいとか、苦しいとか云ふのてはなくて、唯何となしに人間と生れて居るのが悲しい、現世に生れて居ることが何となく悲しい、苦しいと云ふ位の程度のものてあります。是は諸君の中にも御經驗があることゝ思ひますが、何となしに悲しい、何を見ても腹が立つ、何を見ても滿足しないと云ふやうな時が人間にはあるのてあります。それはどう云ふ時に多いかと云ふと、多く青年期にあるのてあります、即ち十七八歳から二十四五歳の頃に最も多いのてあり

ます。是は外國語で申しますと Weltschmerz（ウエルトシュメルツ）と云つて、取去りようがないのであります。之が爲には宗教上の救に依るより外はありません。で宗教等に依つて之を解脱して行くと云ふと、どうしてあんな馬鹿な事をしたかと可笑しくなります。所謂頓悟、或は解脱、法樂と云ふやうな狀態になつて來ます。子供が丁度何か痛い所が出來て苦しんで居る時に、其の子供の乳母なり母なりが痛い所を擦つてやるとか、それでも治らなければ醫者に見せるとか云ふ風にして助けてやると、其の後で子供は、前にそんな痛い苦しんだ事があつたのかと云ふやうに、前の苦を忘れてしまつて、却つて嬉しがつて居るのと同じであります。唯子供の方は單純で、世界苦の方は複雜である。單純と複雜の違ひがあるばかりであります。それに就ても精しいお話をしたいと思ふのですが、時間が足りませんから是だけに致して置きますが、皆樣が御經驗上からお考へ下されば、內容のモウ一層充實したものがあると思ひます。

四、信　賴（或は服從）

今度は之に續きまして第四の要素即ち信賴或は服從、人を信じ賴ることゝ、人に從ふと云ふ事とに就いて少し述べてみたいと思ひます。是等は元來殆ど同一の心理狀態なのでありまして、それ故に英語でも服從即ちデペンド(Depend.)といふ字は信賴とも譯することがあるようであります。信賴と云ふと普通レライアンス(Reliance.)と云ひますが、デペンドでも矢張り信賴と云ふことに使つて居る場合があります。で、信賴と服從とは同じやうな意味に用ゐられるのであります。是も亦最も早く兒童の精神作用に現れるものでありまして、子供には本來物事を容易く信じてしまふ輕信性があります。そして是が子供の精神狀態の一つの特性になつて居ります。人から何か話を聞くと直ぐ信じてしまひます。一寸したことを聞いても直ぐ其儘に心に取入れます。子供が佛樣のやうだと云はれるのもそれで、騙されると云ふことを少しも知りません。何を言はれても其儘信じます。さう云ふ者を騙すのは誠に罪だから、子供を騙すのは佛樣を騙すようなものであると云ふことを、能く世間で申します。是は子供には少しも經驗がありませんから話を聞いて直ぐ其通りを信じてしまふのであります。併し少し大きくなつて來て、段々經驗も積み、人から害を受けることを知ると、疑惑と云ふことが起つて來ます。併ながら同じ子供でも繼しい中に育つた子供、例へば繼母に育てられたとか、或は兩親が無いとか、親があつても其子供を可愛がつてやらないとか云ふ場合には、誰にも信賴することを知らないで、非常に疑ひ深いものであります。即ち疑惑が強くなります。併し是は繼しい中にある特別な子供で、普通の子供には皆輕信性があるから、乳母であるとか母であるとか、自分の味方をして呉れる、自分より年取つた人を非常に賴りにし、其人に從ふ心があるのであります。併ながら我儘な子供になりますと、母や乳母などに從はないで、少しも言ふことを聞かないと云ふやうな場合もあります。併しさう云ふ子供でも一人で居る時、即ち他所（よそ）へ行くとか、山の中にでも行つた時とか、母と子供と唯

二人限りの時には、屹度よく言ふことを聞くものであります。是は餘程面白いことでありまして、家に居ると賴りにする者が澤山あるから言ふ事を聞かないので、一人々々になると矢張り非常に信賴の念が生ずるのであります。元來が子供は信賴、服從の念の强いもので、此心が段々發達して參りますと、是が信仰になつて來るのであります。信仰と云ふものは是が誠である、是は誠でないと、唯理屈の上で知るばかりのものではありません。賴りにして之に賴つたら間違ないと思つて、自分の一切を其處に曝け出す處に、眞の歸依があるのであります。梵語のナマ（Namah.）は歸依といふ事で、南無釋迦牟尼佛も、南無妙法蓮華經も、南無日蓮大菩薩も、總て南無と云ふ言葉は歸依を意味して居るので、大事な自分をまるで宇宙絕對に任し、御本尊樣に任して賴ると云ふことであります。然るに其信仰と云ふことは、子供の信賴し服從する心が發達して出來て來るのであります。

今子供が保護を受ける人に信賴する心が如何に强いかと云ふことを、暫く例を擧げてお話を致しませう。唯今私が住んで居りますのは本鄕西片町十番地でありますが、其處で私は生れたのであります。併しこの話は私の生れない前の事で、私の兄が四つの時と云へば、モウ六十何年も前の事であるが、二度ばかり近所が燒けたことがあつたさうです。つい近所から出火して、段々燒けて來て私の家にも火が付きかけて來ました。それで皆必死になつて上下擧つて荷を片付けたりして大騷ぎをして居ります。此處ではパチ〳〵音がする、彼處では盛に燃えるといふ有樣で、人の心は緊張して必死に働いて居ます。其時私の兄なる長男が能く寢て居つたので座敷の眞中の安全な所に寢かせてありました。起しても仕方が無いから安全に寢かせて置いて、一家の者が愈々逃げるといふ時に連れて出るようにして皆が働いて居りますと其騷で子供は眼を覺まして泣出しました。其泣出した時に何といふかと思へば、『母ちやんに抱こしてお乳呑んで寢よう』といつたさうで、其事を常に母が話して申しますには、子供といふ者はどんな場合にても母に抱かれて寢て居れば安全だと思込んで居るものである。それを思へば親は子供を大切に守つてやらねばならぬと、心から感じたとよく申して居りました。世間でどんな悲慘な危ないことがあらうと、子供は母に抱かれて居れば安全だと居つて居ります。是程の絕對の信賴は無いでありませう。この親を賴む子供の心が廣がつて、久遠の本佛、其表現である所の大聖釋迦如來、及び其代表者である所の日蓮聖人を、私の兄――四つになる男の子が母に對した信賴の心から絕對に信賴すると云ふ以上に信仰といふものがありませうか。私共もさういふ信賴の念が佛に對し祖師に對して起るようになりたいと常に思ひますが、それ程の信賴の念は中々起り難いのであります。然るに子供の時には却つてそれがありまして母を賴り母を信ずるといふ心はどの子供も違はないのであります。若し其心が擁護され發達されて單に肉體的關係に留らず眞に精神的に引繼さへ出來れば宗教的信仰が出來るのであります。それではその引繼が如何にして出來るかと云ふに、それは學校教育、家庭教育及び布教をなさる諸君の力に待つ處が多いのであります。布教といふことは唯年取